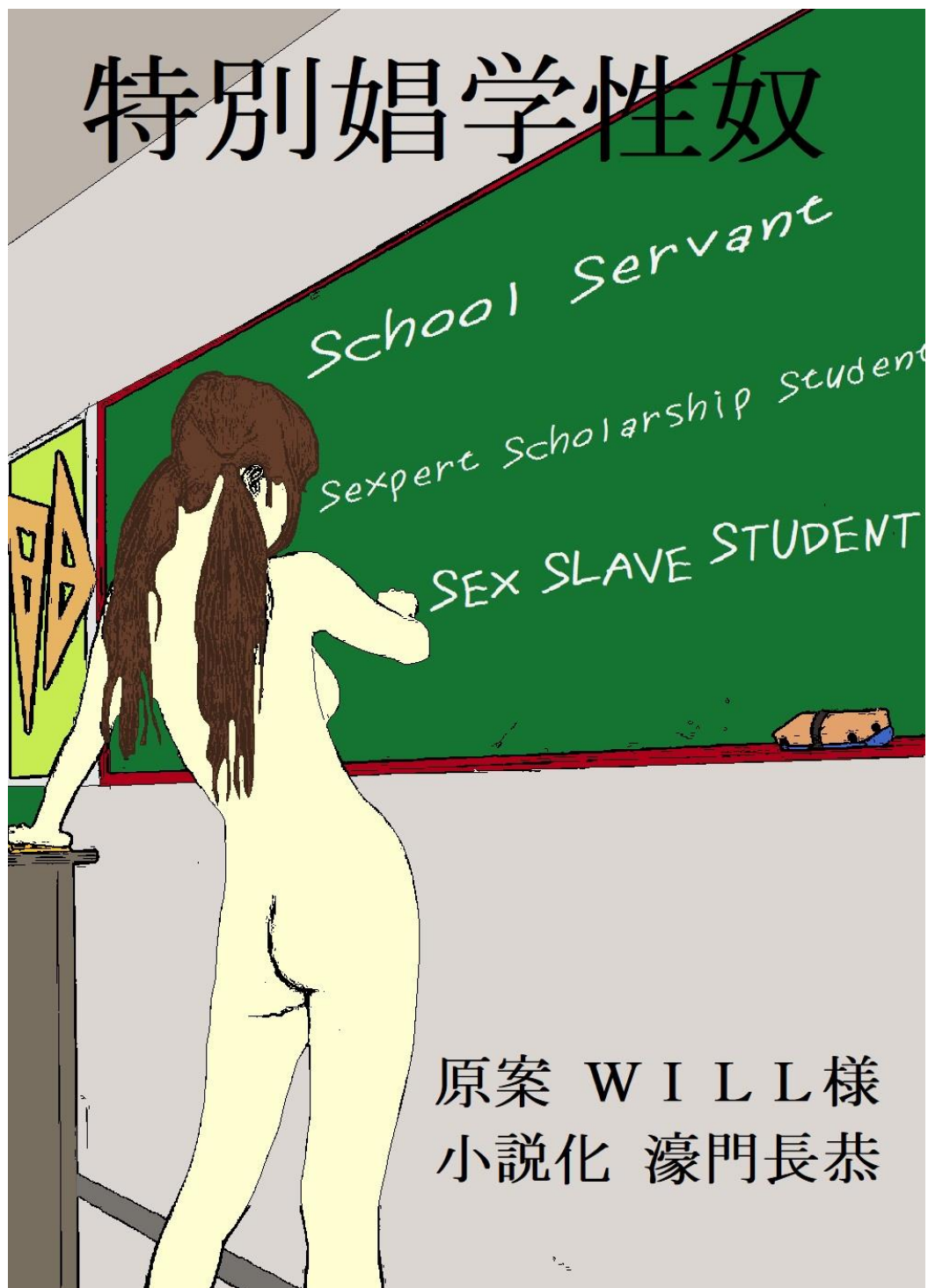


特別娼学性奴



原案 W I L L 様
小説化 濠門長恭

S c h o o l S e r v a n t
Sexpert Scholarship Student
SEX SLAVE STUDENT

SECTION S

S p i t e f u l	- 3 -
S u b s t i t u t e	- 20 -
S u b s i d e n c e	- 29 -
S h a m e	- 64 -
S c o r n	- 94 -
S u p p r e s s i o n	- 108 -
S e r v i c e	- 118 -
S e x p e r i e n c e	- 156 -
S t u d y	- 184 -
S u b m i s s i o n	- 192 -
S k i l l	- 228 -
S o d o m y	- 235 -
S h o w t i m e	- 253 -
S e q u e l	- 269 -
★ S e l e c t E N D I N G	- 276 -
《 S a c r i f i c e E N D 》	- 277 -
《 S a t i s f i c e E N D 》	- 288 -
《 S a d i s t i c s E N D 》	- 301 -

漢字表記について

ヒロインはY 4 まで父母の下で家庭教師から英才教育を受けていました。原文を邦訳したという想定の本作品ではヒロインの知的早熟を反映して、常用漢字すべてと、生殖器に係わる漢字および鞭笞枷姦淫浣（腸）などのSMジャンル必須の漢字を使います。

小説全般について

この小説はフィクションです。登場する人物、組織、地名、事件、年齢は架空のものであり、実在する如何なる事象とも関係はありません。

登場人物がなにがしかについて偏見を述べる場面もありますが、それは歪んだ人格を描写するための設定です。作者の意見ではありません。

S p i t e f u l

チッ……

目覚まし時計の針が重なる音で目を覚まして、ベルが鳴り始める前にスヌーズしました。

春の朝の柔らかな陽光が満ちるベッドルーム。快適な目覚めです。わたくしはすぐにベッドを出て、隣の寮室へ行きました。

わたくしの部屋と違って、ベッドが二つと机も二つ。それだけでも狭いのに、ベッドとベッドの間にはカラーボックスが並べられています。横向きに寝れば顔を見合うので、それが恥ずかしいという理由から、三か月前にチャーリー・アクティが買って来たのですが、四つのボックスを足元へ寄せて、顔が見交わせる配置で落ち着きました。考え無しですね。

「おはようございます、^{My lady}お嬢様」

ベッドの中からわたくしを見上げて、チャーリーが挨拶をします。致し方のないことです。だって、彼の左手と左足は手錠でベッドの脚につないであるのですから。

「おはようございます、お嬢様」

ジニア・コルベットも挨拶を寄越します。彼女は、右手と右足をベッドにつないであります。

「おはよう」

挨拶を返してから、二人の手錠を外してやりました。朝晩面倒な儀式ですけど、これも ^{noblesse oblige} 高貴な者の務めです。だいいち、使用人が間違いをしでかしたら、わたくしの落ち度になります。

あら。使用人ではありませんでした。二人はわたくしの学友——クラスメイルとクラスメイドです。同じY7ですけど、実はチャーリーは二つ年上。レディの護衛ですから、た

くましくなくてはなりませんものね。

だから、チャーリーにはとくに性的欲求が兆していると思います。ジニアも、ぼつぼつそういう年頃でしょう。三年ちかくも一緒に部屋に住んでいながら、今さらのようにパーティーションを欲しがったりするのは、そのせいだと思います。

もっとも、間違いなんて起きるはずがありません。二人を拘束するのは就寝のときだけですけれど、廊下への出入口はドアを取り払ってあります。男女が二人きりで同室のときはドアを開けておくのがマナーですから、いちいち開閉する手間を省いてあるのです。廊下のいちばん奥とはいえ、いつ他人にのぞき込まれるか分かったものではない環境で、いやらしいことなんか出来っこないですね。女子寮に男子を住まわせる特例を認めてもらうには、これくらい徹底する必要があるのです。

わたくしはベッドルームへ戻って、仕切りのドアを閉めました。それから、元は廊下だった部分に通じるドアを出て、向かい側のセクションにあるサニタリールームへ行きます。そうです。わたくしの寮室には、専用のリビングルームとサニタリールームがあるのです。男女合わせて約四百七十名の生徒の中で、わたくしひとりだけの特権です。

当然のことですわ。学園には男爵を親に持つ生徒が三人と、準男爵や騎士は二十何人かおりますけれど、子爵はわたくしだけ。しかも、この学園はわたくしの両親ふたりの母校ということもあり、有象無象の成金連中など足元にも及ばないほど多額の寄付をしているのです。フッド記念講堂もありますの。別に自慢するつもりはございませんけれど。

わたくしは朝の生理的欲求を満たしてから、シャワーを浴びました。もうすこしで腰まで届くブルネットは、ざっと水気を拭っただけで、バスタオル一枚でベッドルームへ戻ります。

「ジニア」

声を掛けると、ジニアが礼儀正しく部屋へ入って来ます。わたくしが猶予をあげている間に、自身の身支度は整えています。

ジニアはわたくしの髪をドライヤーで乾かしながらブラッシングをして、ていねいに編

み下ろしてくれます。

「これでよろしいでしょうか」

ブルネットに映えて、かつ学生らしく清そな白のリボンを差し出します。

「よろしいわ。おまえのセンスも、洗練されてきたわね」

使用人を褒めてやるのも、主人の心得です。

わたくしが立ち上がると、ジニアはかいがいしく着替えを手伝います。子供っぽくはないけれどけっしてセクシーではない、おそろいのブラジャーとパンティ。淑女のたしなみのスリッパ。ハイソックス。きれいに洗って、ふわっとした感じにアイロンを掛けたブラウス。校章を左胸に刺しゅうした紺色のジャンパースカート。真っ赤なストリングタイ。

身支度が調うと、ドレッサーの小さな鏡ではなく、壁にはめてある姿見で全身をチェックします——けれど、着付けの具合よりも身体の輪郭に目が行ってしまいます。

チビってほどではないですが、わたくしは同級生の中では小柄なほうです。あと二か月も遅く生まれていれば一学年下になっていたのですから、仕方のないことです。でも、胸の膨らみはY 8の先輩にだって負けていません。勝ってもいけませんけれど、乳房の大きな女性は知的でないと申しますから。

目下の悩みは、バストよりもヒップの数字が（すこしだけです）大きいことです。もともと、母様みたいにほっそりしていると、結婚してから苦労することになります。なにしろ、二人目を授かるために、母様はスポーツジムに通って体質改善に励んでらっしゃるんですもの。

でもまあ。わたくしの後ろに控えているジニアを鏡の隅っこに見ると、わたくしの自慢も悩みもぺちゃんこになってしまいます。わたくしより頭半分背が高くて（女性で長身は如何なものかと思いますけれど）、わたくしとジニアが並ぶと、男子の視線はわたくしの顔ではなくジニアのバストとヒップに集中するんですから。将来はきっと、殿方を悩殺するような下司な女性になることでしょうよ。

あら、いけない。朝ご飯を食べている時間がなくなります。カフェテリアでは皆さんが

順番を譲ってくださるから、長い行列に並ぶ必要はありませんし、そんなにたくさん食べるわけでもないです。けれど、淑女のマナーを守ってお食事をするには、相応の時間がかかるものなのです。

「学校へ行きます」

ジニアに声を掛けて、わたくしは廊下へ出ました。ジニアは、わたくしのバッグを持って、自分のバッグを取りに、あたふたと自分の部屋へ戻ります。わたくしの斜め後ろには、ちゃんとチャーリーがついています。

「おはようございます、ミス・フッド」

部屋から出てきた上級生が、立ち止まって挨拶をします。身分を弁えて、なれなれしくアイリスなんて呼び掛けたりはしません。

「おはようございます。良い朝ですわね」

この人はY9のネリッサ・グラフトン。ほとんど毎朝、出会います。顔なじみの方には、それなりの言葉を掛けて差しあげるべきでしょう。

挨拶を交わしている間に、ジニアも追いついて来ました。三人で階段を下ります。この様子を『お姫様の出陣』なんておっしゃる方々も、何人かはいらっしゃいます。同じ年令以上の女子だけで八十人なのですから、わたくしを良く思っていない方だっていないことではないでしょう。身分高き者を崇拝せず富める者を嫉妬する輩は、どこにだっているものです。もちろん、下級生は皆さん、わたくしの崇拝者に決まっていますけれど。

朝食を終えて教室に入ると、十二人のクラスメイトのうち一人を除いて、起立して朝の挨拶をしてくださいます。椅子に座ってそっぽを向いているのは、キャティ・ストックだけです。

彼女の頭に飾られているヘアブローチが、わたくしの目を引きました。細長い花の形をした金色は、彼女の金髪に埋もれて、ちっとも見映えがしていません。

わたくしはキャティの前に立ちました。彼女はわたくしを見上げただけで、何も言いま

せん。わたくしから挨拶されるのを待っているのでしょう。

「素敵なヘアブローチね。もっと良く見せてくださらないかしら」

キャティが立ち上がりました。ジニアと同じくらいに背が高いです。

「いやよ。髪が乱れるわ」

けんか腰です。この人は、いつもこうなのです。石油のほうが青い血よりも貴いとも思っているのでしょう。

「ジニア」

キャティをにらみ返したまま、低いけれどしっかりした声で命じました。でも、ジニアよりも早く、わたくしの友人が素早く動きました。マリー・デストンが斜め後ろから、ヘアブローチをむしり取ったのです。

「痛いっ、なにをするのよ」

マリーはキャティを無視して、ヘアブローチをわたくしに差し出します。

手に取って見ると、やはり意匠はアイリスでした。

「返しなさいよ」

キャティが右手を突き出しました。

先程からの数々の無礼に、腹が立ちました。それよりも、このわたくしを髪飾りにするなんて。きっと、分かってやってて、得意満面なのでしょう。

わたくしは、指の力を抜きました。

カツン。ヘアブローチが床に落ちます。それを、靴のかかとで踏んづけてやります。

ぐじゃっと潰れる感触が小気味良いです。

バチイン！

目から火花が飛び散りました。頬が熱いです。

「なにをするのよ。五百ドルもしたのに。パパからのプレゼントなのよ！」

やはり成金の娘です。真っ先にお金のことを言います。しかもドル。ポンドだと、二百五十くらいかしら。子供の玩具としては高価ですし、淑女の装身具としては安物ですわ。

「赦さない！」

キャティが、また手を振り上げます。

わたくしは顔をかばいかけて、その手を止めました。わたくしは貴族の娘です。困難にも真正面から立ち向かいます。でも、取っ組み合いのけんかなんてはしたくない真似は御免です。こういうときのために、チャーリーを学友にしてあるのです。

ところが、チャーリーがキャティを取り押さえる前に、男子のオッター・デアリングがキャティを羽交い締めにしました。

「放してよ！」

「もう暴れるなよ」

「暴れてなんかない。先に手を出したのは、向こうでしょ」

キャティは、オッターから逃れようと、もがきます。そうすると、オッターも意地になつて、ますますキャティを――あら、背中から抱き締めるみたいな形になりました。わざとかしら。キャティも、発育が早いほうですから。

もみ合つて（もまれて、かしら）いるところに、教師のヴィクター・トリアスが来られました。

「これは、なんの騒ぎだ。オッター、女の子を虐めるんじゃない」

「違います。キャティが、ミス・フッドを殴ったので、オッターが止めていたところです」

マリーが事情を説明します。

「なんと。淑女にあるまじき蛮行。しかも、貴族令嬢に暴力を――植民地の平民ごときが」

そうです。たとえ世界一の軍勢力と財力を誇ろうと、所詮は本国に反旗を翻した連中なのです。すくなくとも、上流社会の人たちは、腹の底ではそう思っています。

「手を出しなさい」

Mr. Trious

トリアス氏が厳しい声でおっしゃって、脇に抱えていた教鞭を右手に持ち替えました。

手の平をたたくなつて、授業中に騒いだ子へのお仕置きと同じです。

「先生。そんな罰じゃあ軽すぎると思います」

マリーがわたくしの内心を代弁してくれました。

「ふむ……」

トリアス氏はわたくしに視線を向けます。わたくしは、微妙にそっぽを向いて知らん顔。こういうときは、言葉で表わさない限り、どんな仕種でも肯定の意味になるでしょう。

トリアス氏は、キャティに向き直って、いっそう厳しい声でおっしゃいました。

「教壇に上がって、黒板に向きなさい」

げげんな表情を浮かべて、それでも言われた通りにしたキャティは、次の言葉に驚いたようです。わたくしも、びっくりしました。

「スカートをまくって、尻を出しなさい」

うわわわわ、です。お尻たたきなんて、せいぜいY3までです。それも、座っている教師の膝の上です。ズボンやスカートをめくったりはしません。立たせておいてお尻をじかにだなんて、このメイスレッド学園では、戦後初めてではないでしょうか。いえ、そんな大昔のことは知りませんけど。

キャティはトリアス氏を振り返って。それから、なぜかわたくしをにらみつけてから。黒板に向き直ると、スカートをたくし上げました。裾を握る手が震えています。いい気味です。

キャティは、学生にあるまじき卑わいなパンティを身に着けています。浅い二等辺三角形で、ヒップの上半分が露出しています。

トリアス氏は、教鞭を持っていないほうの手を伸ばして……

「きゃあっ……?!」

キャティが両手でスカートを押さえてしゃがみ込みました。

「ちゃんと立っていなさい」

トリアス氏は落ち着き払っています。

「いやです。なぜ、パンティを脱がそうとするんですか」

「わたしは、尻を出せと言ったぞ」

戦後初めてどころか、ウィンザー朝始まって以来かもしれません。

「いやですっ！」

金切り声です。

「チャーリー」

トリアス氏は、わたくしのスクールメールに声を掛けました。

「彼女を押さえておきなさい」

右隣の席に座っているチャーリーが、目顔で問い掛けてきました。ちなみに、左隣はジニアです。わたくしが軽くうなずいて承認を与えると、しぶしぶといった感じで立ち上がって、教壇へ行きました。

ジニアと同じくらいの背があるキャティも、ふたつ年上の男子と比べると、まるで大人と子供——というのは言い過ぎですが、肩を押さえつけられると、身動き取れないようです。

トリアス氏は、キャティの脇腹に手を差し込むと、ジャンパースカートの布ベルトを抜き取りました。両腕を背中へ捻じ上げて、そのベルトで手首を縛ります。

「いやああっ！ なにするんですか？！」

「静かにしなさい。隣の教室に迷惑です」

スカートをまくり上げて、手首を縛っている布ベルトに絡めました。

ぎゃんぎゃん喚いているキャティのパンティをずり下げて、お尻を丸出しにしました。

「いい加減に黙らないと、この布を引き千切って口に詰めますよ」

ひぐつと、しゃつくりを飲み込んで、キャティがおとなしくなりました。

トリアス氏がチャーリーに命じて、キャティを立たせました。あらためて教鞭を手に取りました。

「お願いします。たたかないでください」

キャティが、泣きながら訴えます。

「そんなに嫌なら、校長先生headmasterのところへ連れて行きましょう。直ちに退学の手続をしなさい

い」

「いやですっ！」

またヒステリックが、ぶり返しました。

「いやです。絶対に辞めません！」

「ならば、素直に罰を受けるのです」

「いやです、絶対にいやですっ！」

トリアス氏がため息をつきました。

わたくしもあきれてしまいます。パンティを履いていてもお尻の半分は露出しているのに、残り半分のさらけ出すのは、なぜ嫌なのでしょう。もっとも——どうしても退学したくないというほうは、理屈の上では理解できます。

平民にとっては、^{Boarding school}寄宿学校に入るのは、大変に名誉なことです。あ、平民といっても、労働者のことではないですよ。寄宿学校の学費は労働者の年収以上なのですから、子弟を入学させられるはずがありません。わたくしが言っている平民とは、お金はたくさんあるけれど身分の無い——当人一代限りの騎士叙任すら賜っていない、キャティの父親みたいな人のことです。入学が大変な名誉であれば、退学なんて、それを上まわる不名誉です。

わたくしなどは、有り得ないことですけれど、退学しても——父様に無理をしていただいて上位の学校へ転入するか、子爵令嬢の名前に傷が付くのに甘んじて下位の学校（大歓迎してくれるでしょうね）へ行くか、なんとでもなります。それも一時のこと。本当に大切なのは出身校の格ではなく、Y 1 1とY 1 3の学年末に行なわれる全国統一試験の成績なのです。

けれど、植民地ではそうではないのでしょう。学校の格付けを重視するとなると——栄誉あるメイスレッド学園を追い出されたキャティを受け入れてくれる同格の寄宿学校なんて、ありますでしょうか。

キャティはわがままを飲み込んでおとなくなりました。トリアス氏が教鞭の先をお尻に当てると、ぴくっと全身を震わせました。

トリアス氏が教鞭を後ろへ引いて。

びしっ！

豊満なヒップに教鞭の先が食い込みました。

「きゃああっ！」

本当に両隣のクラスまで壁を突き抜けて届くような悲鳴です。教鞭は細いプラスチックの棒ですけど、先端がどんぐりのように膨らんでいます。きっと、どんぐりを投げつけられるよりも痛いことでしょう。

びしっ！

「痛いっ！」

びしっ！

「くっ……」

だんだん痛みに慣れてきたみたいです。

びしいっ！

肉を打つ音が大きくなりました。

「きゃああっ！」

悲鳴も一発目以上に大きいです。

びしいいっ！

「いやああああっ！」

悲鳴に泣き声が混じっています。最初の三発では、横長の丸い小さなあざが残っただけでしたが、この二発では、左右のお尻に一本ずつの赤い線が刻まれました。

わたくしは、ちょっぴりだけ、キャティが可哀想になってきました。

^{Teacher Trious}
「トリアス教師。早く授業を始めてください」

彼は、教鞭を持つ手を止めました。キャティのスカートを下ろしてやり、手も解いてやりました。

「では、席に戻りなさい」

キャティはパンティをずり上げてから正面に向き直って――泣き腫らした目で、またわたくしをにらみつけました。

わたくしの心の中から、ちょっぴり可哀想が消えうせました。

「トリアス教師。わたくし、まだ彼女から謝罪を受けていません」

教師が何か言う前に、キャティが言い返します。

「あなたに謝ることなんか、これっぽっちも無いわよ！」

わたくしはトリアス氏に向かって、はっきりと首を横に振りました。

「キャティ、^{Miss Hood}フッド嬢に謝りなさい」

「先生は事情を御存知ないから、あたしが悪いと決めつけてらっしゃいますけど……」

「フッド嬢は、きみをたたいたのかね？」

「それは……でも」

「反省していないのだね」

「だって、あたしのヘアブローチを……」

「授業が終わるまで、教壇の隅に立っていなさい」

トリアス氏が彼女の背後へまわって、また手首を縛りに掛かります。

「やめてっ……」

彼女は抵抗しましたが、トリアス氏の次の言葉でおとなしくなりました。

「では、校長室へ行きましょう」

乾きかけていた彼女の目から、大粒の涙がこぼれます。

トリアス氏は、手を縛っただけでなく、スカートをまくり上げ、パンティも膝まで引きずり下ろしました。そして、キャティにとっては屈辱きわまりない指導をします。

「きみも、そこで授業を受けるのです。黒板に向き直りなさい」

つまり、剥き出しのお尻をクラスメイトの目にさらしていなさいという意味です。

キャティは、もう文句を言いませんでした。わたくしを物凄い形相でにらみつけてから、後ろ向きになりました。

涙を流しているのかは見えませんでした。授業中ずっと、キャティの全身が小刻みに震えていました。膝の震えを見ていると、よくもあれで立っていられるものだと、妙な関心をしたほどでした。

――授業が終わると、キャティは教室から逃げ出しました。

お昼休みに、わたくしは父様に電話をしました。簡単な挨拶と近況報告（楽しく学んでいますわ。クラスメイトも教師の皆様も、本当に良くしてくれています）を済ませると、おねだりです。

「キャティ・ストックを御存知でしょうか。彼女にヘアブローチをプレゼントしたいの。生徒名鑑を見てください。金髪に映えるような、エメラルドがいいかしら。どんなのにするかは父様におまかせしますが、一千ドルより高くても安くても困ります」

五百ポンドなら、貴族令嬢のわたくしが身に着けても見劣りはしませんでしょう。それよりも大切なことは、わたくしが、うっかり壊してしまったキャティのヘアブローチの倍の値段だということです。

放課後は、今日は美術部の日でしたけど、欠席すると、ジニアを使いに行きました。

わたくしのクラブ活動は、社交ダンス部と美術部です。本当は馬術部に入りたかったのですが、母様が猛反対をされたのです。股を開いてまたがって激しく揺すられると、処女膜が破れることがあるそうです。結婚初夜に、純潔を守ってきたと証明できなくなります。

わたくしは、三十歳を過ぎてからあらためて体力づくりに苦勞なさっている母様を見えていますから、若いうちに身体を鍛えておきたいのです。でも、馬術以外のスポーツは――不特定多数の殿方に太ももまでさらしたり、身体の線をくっきりと見せつけたり、とんでもないことです。そりゃあ、社交ダンスだってランニングとかウェイトトレーニングとかは欠かせませんが、それは学園内のことです。学外での競技のときには、フォーマルな装いでもの。

いえ、クラブ活動のお話がしたいのではなく、ジニアを遠ざけておいて、チャーリーを従えて寮へ戻って。それからのことをお話し致します。

「わたくしは不満に思っ、いいえ、怒っておりますのよ、チャーリー？」

「申し訳ございません」

一応は素直に謝りますのね。

「でも、ぼくが割り込む前にデアリング君が行動を起こしていました。それに、ぼくがしゃしゃり出たら、お嬢様がますます悪く思われるでしょうし」

^{Hit the roof}
怒髪天です。「ますます悪く」ですって？！

上級生の中には素っ気ない態度の方も少なくありませんが、それは年下でも身分の高いわたくしに、どう接して良いか戸惑っているだけです。女王陛下に気さくに声を掛ける平民なんて、おりませんでしょう。

今は、チャーリーの思い違いを正すより先に片付けておく問題があります。

「おまえの位置からだったら、キャティを羽交い締めには出来ず、わたくしの前に立ちはだかっていたでしょう。できれば、殴り倒すくらいはしてほしかった。それをわたくしが制止すれば、わたくしの慈悲深さをアピールできるし、わたくしに害を為そうとするとどうなるか、見せしめにもできたのに。教師の手を借りてしまつては、まるでライオンの皮をかぶったロバだわ」

「申し訳ございません」

空疎に吹き抜ける言葉。

「おまえには、キャティと同じくらいの罰が必要です。ズボンとパンツを脱ぎなさい」

男子は女子ほど羞恥心を持ち合わせていませんから、ずっと軽い罰です。それに……正直に打ち明けると、口実なのです。

わたくしは気づいてしまったのです。キャティが鞭痕の刻まれたお尻をさらして立たされていたときです。黒板のあたりに目を向けているチャーリーのズボンの前は、エベレストみたいになっていました。

学校の図書館には、もちろん卑わいな書籍などは置いてありませんが、各学年の参考書や家庭の医学書やかなり専門的な書物もあります。すでにわたくしはY 7の全教科を制覇して、歴史や文学はY 10、数学や物理化学はY 8を独習中ですよ。ちなみに、保健についてはY 13を終了しています。それでも、男性器なんて図解でしか見たことはありません。

女性器についても……わたくしの幼い器官など参考になりません。でも鏡で——こほん。

チャーリーの男性器は、もう生殖器官として機能しているみたいですから、いやらしい好奇心なんかではなくて、勉学のために、きちんと見ておきたいと思ったのです。

チャーリーは困ったような顔をして、まごまごしています。

「早くなさい。ジニアが戻って来ますわよ。それとも、彼女にも見てもらいたいのかしら」

わたくしの駄目押しで、覚悟が出来たようです。チャーリーは後ろ向きになって、ズボンとパンツを足元までずらしました。

「おまえは、主人に尻を向けるの？」

「でも……尻をおたたきになるのであれば」

「こちらを向きなさい。か弱い女の子と同じ罰で済むとは思っていないでしょ」

のろのろと、チャーリーが向きを変えます。でも、両手で前を隠しています。

「手を下ろしなさい」

当然ですけど、チャーリーはわたくしの命令に従います。でも、いつのようのにきびきびとではありませんでした。そして、彼の男性器も今の彼の態度を反映しています。うなだれて、先端まで包皮に埋もれています。

男性器が勃起するのは性的に興奮したときだけということくらい、もちろん知っています。女性であり主人であるわたくしに見つめられては、羞恥ばかりで、性的な興奮など起きるはずがありません。でも、分かっているのに。ちょっぴり肩透かしを食らった気分です。

わたくしは、ドア（があった場所）の横に置いてる靴べらを手にしました。しゃがまな

いでも使えるように、長い柄が付いています。そのグリップを握って、靴べらの先で彼の陰茎をつついてやりました。

あら。こういう物理的な刺激を与えると勃起するって本には書いてあるのに、まるきり反応しません。どころか、ますます委縮しました。もしかすると、この若さで勃起障害なのでしょうか。それならそれで、好ましいことかもしれません。ジニアと間違いを起こす懸念が無くなります。でも、やっぱり。今度はちょっぴりではなく大いに肩透かしを食った気分です。腹が立ってきました。

わたくしは靴べらを下げました。

チャーリーは、ほっとした様子で、パンツに手を伸ばそうとしました。

「動かないで。まだ、罰は終わっていないことよ」

これも、本音は罰ではなく好奇心です。わたくしだって少女ですから、大衆向けの少女雑誌でもたまには読むことがあります。そこに書いてあった護身術のひとつには——暴漢に正面から襲われたときは股間を蹴り上げると、相手は即座にもん絶するとありました。本当にそんなに効くのか、せっかくですから実験してみましょう。

蹴り上げるのは、はしたないし可哀想ですから。

しゅん、ピチッ！

靴べらを跳ね上げて、ホオズキのように小さくなっている陰のうを軽くたたいてやりました。

「あうっ……！」

チャーリーは両手で股間を押えて、その場にうずくまりました。

「そんなに痛かったの？」

つい、おろおろ声になってしまいました。

「痛い……ですけど、大丈夫です」

「あら、そうなの。それじゃ、ちゃんと立ちなさい」

トリアス氏と同じ台詞になってしまいました。

「キャティだって、一発では済まなかったのよ」

チャーリーは両手を下ろして、たたかれると分かっているのに、ぴしっと姿勢を正しました。

健気ですけど、ここで甘やかしては本人のためにもなりません。

しゅんっ、ビチイン！

手加減し過ぎてはいけないという思いが強すぎたようです。さっきよりも強い手応えがあつて——もん絶はしませんでしたけど、チャーリーは、また膝を突きました。ものすごく痛そうです。ですので、二発だけで赦してやりました。わたくしって、慈悲深い主人ですわよね。

父様から小さな小包がとどいたのは一週間後でした。さっそく、わたくしはそれを教室でキャティに渡してやります。

「このあいだは、あなたのヘアブローチをうっかり壊してしまつてごめんなさいね。おわびに、これを受け取ってくださいな。あなたの髪の色に映えるような品を父に選んでいたのよ」

机の上に置いてやりました。贈り物用の包装をしていますから、どんな品なのかは、わたくしも知りません。ですが、手違いで領収書まで入れてあるのは分かっています。倍額のおわびをしたなんて誰彼に吹聴するつもりはありませんけれど、当人には思い知らせてやってもよろしいでしょう。

キャティは、包みに手を出そうとはしません。がたんと、椅子を鳴らして立ち上がると、スカートの裾を掴まんで太腿が露わになるまでたくし上げ、左足を大きく後ろへ引いて上体を折り曲げました。

「ありがとうございます、^{L a d y I r i s}アイリスお嬢様」

ああ、^{curtsey}膝折礼のつもりなのですね。上体を起こしていないし、足の引き方も大げさだし、裾をたくし上げ過ぎです。おそらく、きちんと学んだことがないのでしょう。

でも、呼び掛け方は。これは、わざとに決まっています。ファーストネームにレディを冠するのは、伯爵令嬢から上の身分の未婚女性に対してのみです。わたくしは子爵の娘ですから、ファミリーネームにミスを付けるべきなのです。つまり、正しくはフッド嬢様^{Miss Hood}です。わたくしを持ち上げている振りをして、実は馬鹿にしているのです。

ですけど、そんなことをいちいち指摘するつもりはありません。たとえ平民でも、分かる方には分かることです。分からない方とは、お付き合いする必要もありません。

わたくしは寛容にうなずいて、自分の席に戻りました。

S u b s t i t u t e

わたくしが社交ダンスをたしなんでいることは、前にお話し致しました。ですから、なにかと男女が一緒になる機会が多いのですが、さすがに着替えるのは別々の更衣室です。当たり前です。そんなときは、女の子同士のおしゃべりに花が咲きます。同じクラブの男子のうわさ話（パートナーになって踊るのですもの）くらいなら、他愛ないものですが、他愛無くない話題に及ぶこともあります。このときが、そうでした。

何がきっかけだったか、忘れてしまいましたが、Y10のメル・ブリークが、驚天動地の大事件を告白したのです。一週間ほどお休みして帰省して。なんと、初体験を済ませたというのです！

自動車の運転とかスカイダイビングとかの初体験ではありませんよ。つまり、その……殿方との交接です。下層階級には、Y10どころか、もっと幼いうちから、そういうことをする不良娘がいるとうわさに聞いたことはありますけれど。仮にも寄宿学校に学ぶ良家の子女がですよ。

でも、よくよく事情をうかがってみると。聞いていた皆さんが感動してしまいました。

メルには、すでに十歳も年上の婚約者がいるのです。空軍に勤務していて、大型爆撃機の通信士だそうです。その方が、ナイフランド紛争の戦地へ爆撃に行くのです。本国を飛び立って、空中給油を繰り返しながら地球の裏側まで行って爆弾を落として来るのです。空中給油は、自動車にガソリンをいれるのとは違います。危険な作業らしいです。しかも、爆弾を落とす場所はもちろん戦場ですから、ミサイルに狙われるし敵の戦闘機に迎撃されるし。戦死しても心残りが無いように、婚約者と契りを交わしてから出撃したい。その心情は、よく分かります。その熱い心に応えなければ、乙女ではありません。応えてしまったら乙女ではなくなる——なんて茶化してはいけません。

そうして、二人は結ばれたのですけれど。その先はのろけ話というのでしょうかしら。「そりゃもう、すごく痛かったわ。お股にクサビを打ち込まれるようなものよ。でも、痛いのをぐっと堪えているとね、痛いのはじきに薄れて、気持ち好くなってくるの。自分で悪戯するのより、何十倍もすごいのよ」

女の子でも自慰行為masturbationをするんだというのは初耳でしたけれど。そんなのは小さなことです。どんなふうに痛いのか、どんな過程を経て気持ち好くなるのか、皆さんは興味津々。でも、メルは恥ずかしがって、具体的な感覚までは話してくれませんでした。それくらいなら、何も言わずに黙っていればいいのに。

わたくしは、是非にそれを知りたいと思いました。将来に結婚をして旦那様との初夜を迎えるときの心構えです。だから、自分で体験するわけにはいきません。

そこで、ジニアを実験台にしました。でも、わたくしは——下女に男と交接させて乙女の純潔を踏みにじるような無慈悲な女主人ではありません。そんなことをしたら、その男の口から秘密が漏れるに決まっていますし。もちろん、チャーリーとジニアを交接させるなんて、わたくしが除け者になるみたいで……なんでもないです。

思いついたのが、チャーリーがカラーボックスを組み立てるときに使ったドライバーです。ドライバーの柄は、直径が一インチ半弱。医学書によると、陰茎の勃起時の太さもそれくらいです。

さらに。一石二鳥のアイデアが浮かびました。

休日には、たいいてい二人を従えてハイヤーで街へ遊びに出るのですが、その日は寮で過ごすことにしました。

低学年は校庭や自室で遊ぶ子も多いですが、Y 6 から Y 1 0 までに割り当てられている二階までは上がって来ません。好都合です。

チャーリーとジニアの相部屋に出向いて。二人に、下半身を丸出しにするように命じました。なぜ、そんなことをさせるのかとチャーリーが尋ねましたが、主人の命令に従いなさいとだけ答えました。二人は互いに顔を背け合って、恥ずかしそうにしながら、のろの

ると、それでもちゃんと命令に従いました。

最初にチャーリーを彼自身のベッドへ上げて、寝るときとは違って、彼の左足首をフットボード側の手錠につなぎました。身体を起こしていられるように、両手は自由にさせておきます。座りにくいので足を開いています。股間の陰茎は、四月に見ときよりはだいぶ大きくなっています。性器を丸出しにした女の子が目の前にいるので、性的に興奮しているのでしょう。でも、勃起というほどではなく、半分だけ露出した亀頭はシーツにこすれています。

ジニアはベッドに直角に寝かせて、上下の端にある手錠に両足首をつなぎました。手錠の鎖は長くしてありますが、それでも淑女なら絶対にしないくらいの大股開きになります。ジニアは淑女ではなく、労働者階級の娘だから構いません。

それでも、斜め前からチャーリーにのぞき込まれる位置関係になるので、両手で股間を隠して、顔を真っ赤にしています。顔だけでなく、全身も淡いピンク色に染まっています。「あお向けになりなさい。両手は頭の上よ」

ジニアは動きません。

「お嬢様、お願いですから、もう赦してください。なにかお気に障ることをしていたのなら、謝ります。どんな罰でも受けます」

「わたくしの命令が聞けないというの？」

叱りつけます。これから考えている実験のことを事前に説明するつもりはありません。ますます反抗するでしょうし、わたくしも本心を……なんでもないです。これは、わたくしの将来に備えての実験です。わたくしが、セックスに関することに卑わいな関心を持つなんて、有り得ないことです。

わたくしに叱られて、ジニアは泣き出しそうな顔になって、それでも命令に従いました。Y 4から一年間、自宅でわたくしに仕えて。Y 5からは学園で共に過ごして。わたくしに奉仕して如何なる命令にも服従するのが、彼女の第二の天性になっています。

「チャーリー。前を向いて彼女を見ていてやりなさい」

顔を背けていた彼も、わたくしの命令に従います。

「身体を反らして、両手はベッドに突きなさい」

この命令には、すぐには従いません。でも、わたくしが靴べらを手にして、ベッドをたたくと、やっと命じられた姿勢を取りました。

彼の陰茎は、さっきよりも太く長くなって、大砲が射撃をするときみたいな角度になっています。男性の完全に勃起した陰茎を目撃するのは、初めてです。これが
Kill two birds with one stone
一石二鳥です。

二羽目は後回しにして、本来の実験に取り掛かります。

チャーリーの机から、ドライバーを取り出します。縦に溝を刻んだ木製の柄はニスで仕上げて滑らかです。頭が丸くなっています。これなら、スムーズに挿入できるでしょう。

「いいこと。身体を起こしては駄目よ」

わたくしの意図に気づいたのは、チャーリーでした。

「お嬢様、まさかとは思いますが、それをジニアのマンコ^{cunt}に入れるおつもりではないでしょうね」

卑わいな単語を口にした罰に、逆手に持っていたドライバーで、彼の陰茎をたたいてやりました。

「わたくしの前で、汚い言葉を使わないでちょうだい。女^{Female genitalia}性器^{Vagina}、それとも膣^{Vagina}と言いなさい」

「お嬢様、赦してください」

ジニアが起き上がって、泣きそうな声で訴えます。

「身体を起こしては駄目と、わたくしは言わなかったかしら」

「でも……」

「わたくしの命令に従えないのなら、家へ帰りなさい」

四月のキャティとトリアス氏の遣り取りを思い出して、そんなふうに脅しました。ジニアは父様の使用人の娘、チャーリーは使用人の従兄の息子です。わたくしの不興を買った

使用人は即座に解雇されます。

「でも、でも……わたし、まだ処女なんです」

労働者階級の娘など、処女であろうとなかろうと、たいした問題ではありません。でも、安心させてやりましょう。

「これは、うんと太いタンポンのようなものよ。膣に陰茎を挿入されないかぎり、おまえが処女であることに変わりはないの。お分かり？」

初潮は迎えていなくても、タンポンの使い方はすでに保健衛生で学んでいます。っですから、ジニアも納得しました。しなくても、一家で路頭に迷いたくなければ、おとなしく仰向けになるしかないのです。

寝ている使用人の足元にひざまずくなんて耐え難いことですが、実験を遂行するためにはやむを得ません。

間近に見るジニアの女性器は、わたくしのととはすこし様子が異なっています。産毛が太く長くなったような縮れた陰毛が、わたくしよりずっと広い面積に生えています。下品です。美しい一本筋のわたくしと違って、大陰唇の外にまで小陰唇がはみ出しています。これは彼女が股を開いているのと、わたくしを見る角度とのせいかもしれませんけれど、包皮をかぶった陰核が、ひと目で分かります。わたくしのは、もっと慎ましやかです。

観察はおしまい。他人の外性器に触れるのは気色悪いですが、左手で大陰唇を左右にくつろげました。小陰唇も外側へ引っ張られて、内側がのぞき込めるようになりました。膣前庭のやや下側に、小さな穴があって、縁は縦長になっています。この縦長の部分が処女膜でしょう。穴はドライバーの頭部より小さいですから、この処女膜が破れるのです。

ドライバーを押し込もうとすると、押し返してきます。

「痛いっ……もう赦してください」

「どんなふうに痛い？」

「痛いんです。もうやめてください」

おしゃべりできるのなら、たいした痛みでもないのでしょう。わたくしは、体重をのし

かける感じで、さらにドライバーを押し込みました。

ぷつと微かな手ごたえがあって、一気にドライバーの柄が膣口を突破しました。

「いやあああっ……痛い！」

「だから、どんなふうに痛いの？ わたくしに教えなさい」

「痛いんです！ まるで刃物で切られたみたいです！」

クサビを打ち込まれるのと刃物で切られるのとでは、痛みの質が違います。個人によって感じ方が変わるのか、ジニアの表現力が乏しいのかもしれません。

あ、そうだ。男性は挿入するだけでは射精に至らない。ピストン運動が必要だと家庭の医学百科に書いてありました。最後まで疑似体験させてみます。

「痛い痛い痛い！ 動かさないでください！」

ジニアの声がますます大きくなってきます。廊下の向こうまで聞こえそうです。わたくしは左手を伸ばしてジニアの口をふさぎました。

「んんんっ……いまい……！」

ええと。射精に至る時間は五分でしたっけ。実際のピストン運動は、男性が腰を前後に振るのですから、二秒で一往復くらいのものでしょう。いいち、にいい、さんん、しいい……ドライバーを動かすと、穴の縁から血が流れます。にじむといった穏やかなものではなく、ドライバーの柄で血をくみ上げている感じです。大陰唇まで真っ赤に染まります。

「痛いのがすこしずつ薄れて気持ち好くなるはずよ。どうかしら？」

「んんんんんんんーっ！」

ジニアがぶんぶん頭を振りました。

考えられる可能性は、三つあります。ジニアがうそを言っているか、メルが見栄を張ったのか、個人差なのか。とにかく、ピストン運動を続けてみます。ごじゅうさん、ごじゅうし、ごじゅうご……

百回を越えても、相変わらずジニアは痛がっています。すこし可哀想になってきたし、腕も疲れてきました。五分には達していませんけれど、実験はおしまいにします。

ドライバーを抜いて、あらためてジニアの女性器を観察しました。膣口が洋梨形に大きくなっています。下側の大きな丸い部分に、ドライバーの柄が出入りしていたのですね。細まっている部分が残っているということは、まだまだ太いドライバーでも（陰茎でも）挿入可能でしょう。これは、良い勉強になりました。だって、勃起時の直径が二インチを超える男性もいるからです。

泣きじゃくっているジニアは、もう用済みです。夢中になってすっかり忘れていたチャーリーを振り返りました。

うわ……さっき見たより太く長くなっている陰茎を握って、しごいています。これが、男性の自慰行為でしょう。

「こら！」

叱りつけてやりました。

「同僚の女の子が痛い目に遭っているというのに、おまえは何をしているの」

チャーリーが、あわてて手を放しました。

「あの……ごめんなさい」

最近、ジニアもそうですけど——とりあえず謝っておけばいいやっという態度が透けて見えます。そのことも含めて、お仕置をしてやりましょう。けっして、興味本位の悪戯ではありませんことよ。

「もっと深く腰掛けなさい」

わたくしもベッドへ上がって、足で肩を蹴って、チャーリーを奥へ動かしました。ついでに、手も元通りに後ろへ突かせました。

見下ろすと、勃起していてもけっこう可愛いものです。女性器のうねうねぐにぐにとしてぱっくり口を開けた複雑さに比べて、単純な一本棒。神様は不公平です。女性器は複雑だから、おしっこをした後でも男のようにそのまま収めることもできません。

手で触ってみたいくなりました。あくまで、硬さとかを確認するためです。いやらしいことなんか、考えていません。

でも、使用人とはいえ、相手は年上の男性です。社会的に同格であれば、女性が男性にかしづくのも当然ですけど、そうでないのですから、ジニアに対するより後ろめたさが倍加します。

わたくしは、足の裏で勃起に触れてみました。

「あの……お嬢様？」

うるさい。靴下越しでは感触がはっきりしません。脱ぎました。すこしうなだれかけてきた陰茎を上から踏んづけて、ベッドに押しつけてみました。

あら？ どうしたことでしょう。ぐんぐん硬くなって、足を押し返してきます。

「なに、これ？ おまえ、踏んづけられて性的に興奮しているの？」

異性に辱められて性的に興奮するのをマゾヒズムというのでしたかしら。チャーリーは変態性欲の持ち主なのかしら。

「お赦ください、お嬢様。ぼく……もう……」

「なによ。はっきり言いなさい」

主人だから遠慮しているのとは違う感じです。恥ずかしがっているのか、性的に悦んでいるのか、よく分かりません。

「もう、なんなのですか？」

煮え切らない態度に腹が立って、ぐりっと踏みにじってやりました。そしたら、びゅくびゅくって脈動が足の裏に伝わってきて……

白い液体がベッドの上に飛び散りました。わたくしの足の裏も汚れました。これが、射精という現象ですね。交接ではなく、女性に陰茎を踏みにじられて射精するなんて、本当にチャーリーは変態だったのです。裏切られた思いです。

「汚いじゃないの、馬鹿！」

淑女にあるまじき罵言を吐いてしまいました。

「きれいにしなさいよ」

チャーリーを蹴り倒して、顔を踏んづけてやりました。

「おもゝうさま……やえゝえくまゝさい」

声がくぐもって、何を言っているのか分かりません（ということにしておきます）。

「ほら、きれいにしなさいったら」

唇をねらって、ぐりぐりと踏みにじってやりました。

チャーリーはあきらめて、わたくしの足の裏をなめ始めました。

くふふ……くすぐったい。でも、笑ったり足をどかしたりしたら、女主人の威厳が台無しです。すっかりきれいになめ終わるまで、足は動かしませんでした。

足をどかして、ふと気がつく——射精して五分と経っていないのに、チャーリーの陰茎は、またすこし大きくなっていました。ますます、変態です。

——処女膜が破れるときにどんなふうに痛いのか、どんなふうに気持ち好くなっていくのかは分かりませんでした。その意味では、実験は不首尾に終わりましたけれど。男性器の勃起現象と射精を間近に観察できたし、チャーリーが性的変態っだということが判明したので、それなりに有意義でした。

まさか、彼がわたくしに向かって変態的欲求を発揮しようなどとは思いませんけれど、ジニアに対してなら、あり得ることかもしれません。これからは、もっと厳しくチャーリーを監視しないとイケない。それを肝に銘じました。

S u b s i d e n c e

皆に敬愛され何ひとつ不自由の無い学園生活が一瞬にして奪い去られ、学園でただひとりの性奴隷に墮とされたのは六月十五日、奇しくもナイフランド紛争が我が国の圧倒的大勝利に終わった翌日、神に感謝をささげる全学集会が学園内の教会で朝から催された、その当日のことでした。

その日の昼食後、チャーリーとジニアが午後の授業中に校長に呼び出されて、そのまま戻って来ませんでした。

放課後には、わたくしまで呼び出されました。

まさか、寮の外でわたくしに隠れて良からぬ間違いをしでかしていたのではないかしら。真っ先に、それを疑いました。

でも校長室には、二人の姿がありませんでした。その代わり、父様の顧問弁護士であるパイク・ハバクック氏が、わたくしを出迎えました。

お二人が並んで長椅子に座って、わたくしは下座の一人掛け椅子をあてがわれました。お二人ともわたくしより年長ですし、たとえ平民とはいえ、校長は教師ですし弁護士は父様に助言をなさる立場ですから、不自然ではありません。けれど、大人の男性二人と向かい合うと、居心地は悪いです。

「まずは、これを読みなさい」

父様に向かっては決して使わないでしょうぞんざいな口調と共に、ハバクック氏が封筒を小机の上に起きました。

密封されていない封書を開けると、タイプライターで印字された手紙でした。署名を見ると、見慣れた美しい筆跡で『クライドバンク子爵夫人メリー』とあります。母様です。

いつもは本文も手書きなのに。それに弁護士。事務的で格式張っています。すこし早い

ですが、三つ年上のメルが婚約したのはY 9のときだそうです。母様はY 8で三学年上の父様と交際を始めていますし。わたくしにも、どこかから婚約の申し出があったのかもしれない。

可愛いわが娘アイリスへ。

あなたを心配させまいと連絡を控えていて、結果として、あなたを驚き悲しめることになってしまいました。

浮わついた気分は吹き飛びました。きっと、良くない報せです。一体、何が起きたのかと、次の行へ視線を移します。

「そんな……!？」

思考が停止して、目はそこにタイプされている文章のところで止まってしまいました。

マイティが行方不明となったのです。

「こほん」

ハバクック氏のわざとらしいせき払いで我に還って、ようやく次の行へ視線が動きます。

マイティは五月二十日にプライベートジェットで南米へ向かい、そのまま消息を断ちました。彼のビジネスは知っていますね。この度の戦争で巨額の支払債務が生じて、その事後処置に行ったのです。

ナイフランド紛争。まさか、撃墜……??

手紙の内容は、どんどん深刻になっていきます。

わたくしたちの選択肢は、二つしか無いように思えました。裁判所にマイティの死亡を認めてもらうか。マイティの事業を引き継いで、ロイズ保険協会のアンダーライターとして無限責任を全うするか。

前者の場合は、フッド家には嫡男がいないのですから、爵位は廃されます。ただ

し、相続放棄をすることで、マイティの莫大な負債を引き継がなくても済みます。お屋敷は人手に渡りますが、わたくしのささやかな財産は手元に残ります。母娘で平民に落ちぶれてつましく生きていくくらいは出来るでしょう。

後者を選んで、なおかつマイティが生きていても、負債を返済し切れないので破産します。破産者に爵位は認められません。

母様は、どうしてこうも淡々と書き進められるのでしょうか。いえ、きつと一か月も悩まれたあげくなのでしょう。タイプライターからは感情を読み取れません。

いえ、次の行は違いました。

十代も続いたフッド家がマイティの代で潰れるのは、妻として慚愧に堪えません。でも。父様が生きてらっしゃっても、破産確実なのです。どうすれば……

ですが、つい最近になって、第三の選択肢が示されたのです。わたくしのも含めて全財産を処分しても、まだ五十万ポンド以上の負債が残るのですが、これを個人的に融資してくださろうというお方が現われたのです。しかも、うまくすれば五年くらいで返済できる特別なお仕事も斡旋してくださるそうです。

ああ、神様。サンタクロースなんて子供向けのおとぎ話だなんて、馬鹿にされていてごめんなさい。

これは、我が愛する娘アイリス。あなたにとっては、この上なく辛い選択肢なのです。あなたは無一文で（あなたの持ち物もお小遣いも、法律上は父上に所有権があるのです）学園を追放されるのです。しかも、母はドイッチュまで出稼ぎに行かねばならず、あなたを伴うことも叶いません。

ですから、この選択肢も不可能だったのですが、今度はメイスレッド学園の理事長様から、特別の温情を掛けていただけることになりました。特別奨学生として学園に留まらせてもらえるのです。

詳しいことは、あなたが直接に校長先生からうかがってください。

わたくしは、きっと借金を返済して、あなたを迎えに行きます。

愛娘アイリスへ、愛を込めて。

クライドバンク子爵夫人メリー

ユナイテッド・キングダム¹の貴族制度に詳しくない方のために申し添えておきますと、クライドバンクというのは領地の名称です。父様は、クライドバンク子爵マイティ・フッドなのです。ですから、クライドバンク子爵夫人というのはもっとも正しい（堅苦しい）名乗りです。母様は娘に対する手紙でも、このような書き方をなさいます。けれど、いつもとは違う点が二つありました。

署名の最後に小さく添えていた（レパルス）の文字がありません。母様の実家のレパルス家は、十代どころか二十三代も続くゴーヴァン伯爵です。

父様が爵位を失っても、母様が伯爵家の娘である事実は変わりません。そんなことは忘れて、フッド家と命運を共にするという決意なのでしょう。

そして、気づいた二つ目は。署名のインクがにじんでいるということです。涙の跡です。

わたくしは、母様に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。母様がフッド家存続のためにすべてをなげうち、貴族の身でありながら、外国まで出稼ぎに行くというのに。このわたくしは、ぬくぬくと学園生活を続けていられる。

父様が無事でいてほしいという思いはもちろんですが、母様が頑張り過ぎて健康を害さないか、それも心配です。

「得心したね」

ハバクック氏に声を掛けられて、わたくしはあれこれの物思いから覚めました。

「はい……」

なにも得心など出来ていませんけれど、受け容れざるを得ない運命なのでしょう。

「それで……^{Special Scholarship}特別奨学生というのは、どのようなものなのでしょう」

父様も母様も、いずれは再会出来るに決まっていますが、今はいらっしゃらないのです。
自分の身は自分で処さなければなりません。

「その前に……」

わたくしは校長に話し掛けているのに、ハバクック氏が割り込んできました。失礼な方です。

「こちらの用事を先に片付けたいのだがね」

「どうぞ」

母様の手紙を運ぶ他に、何かあるのでしょうか。

「では、裸になってください」

聞き間違えたのでしょうか。

「失礼。もう一度、ゆっくりと言ってくださいな」

「こちらは、^{L o r d H o o d}フッドきょうの顧問弁護士として、ここに居ります」

「はい」

分かり切ったことです。

「目下の仕事は、彼の財産を債権者に引き渡すことです」

「……………」

「母上からのお手紙に書いてあったはずです。あなたが身に着けている一切は、父上の財産なのです。だから、こちらへ渡してください」

アンダーライター（保険引受人）は、最後の下着の一枚まで差し出して保険金を支払う。
父様がおっしゃっていたのを思い出しました。ものの喩えだと思っていましたのに。

「わたくしの着ている物などより、ずっと価値のある品がお部屋にはあります」

「御心配なく。そちらは、すでに業者が回収に掛かっています」

なんて手際の良——などと、感心している場合ではありません。

「でも、今着ている服を脱いだら、わたくしは裸になってしまいます！」

最後のほうは、声がヒステリックになっていました。わたくしにとっては、五十万ポン

ドよりずっと深刻な問題です。

「心配は要らない。奨学生になれば、制服を貸与します」

校長が救けて——くれたのでしょうか。早く脱げと、弁護士の手方をしているように聞こえます。

「では、制服を貸してください」

ちっちちちと、校長が指を立てて舌打ちしながら左右に振りました。無礼にも程があります。

「まず、ハバクック弁護士の用件を済ませない。それから、奨学制度の説明をしてあげる。納得して契約書にサインして、制服の貸与はそれからです」

わたくしは唇をかんで、校長と弁護士を順繰りににらみつけてやりました。でも、二人とも薄笑いを浮かべて平然としています。

「どうしても自分で脱げないのなら、手伝ってあげようか。服が破れたりしたら値打が下がって、その分、きみの母親の負債が増えるのだからね？」

わたくしは、意を決して立ち上がりました。男性の目の前で、ジャンパースカートを脱ぎました。弁護士に脅されたからではありません。服の価値がどうなろうと、五十万ポンドの前にはゼロも同じです。わたくしが決心したのは、貴族のプライドです。生じた返済義務を果たさないなど、青い血が許しません。

わたくしはジャンパースカートを小机の上でたたみ、さらにブラウスとスリッパも同じようにしました。

「これで、よろしいですわね」

ちっちちちと、弁護士まで校長の真似をしました。それから、わたくしの身体の一部ずつを指差していきました。

「リボン、ブラジャー、パンティ、靴下、そして靴」

「……………！」

言葉が出てきません。かれは、わたくしに全裸になれと言っているのです。本当に、最

後の下着の一枚まで差し出させるつもりなのです。

もしも最初から全裸を要求されていたら、さすがにためらっていたでしょう。けれど、恥ずかしい下着姿をさらしてしまっています。もはや程度の問題です。やりを構えて突撃する騎士が、途中で引き返すなど有り得ません。

わたくしは、リボンを外しブラジャーを取り、靴を脱いで、それをわざと脱いだ衣服の上に重ねました。ささやかな抵抗です。それから靴下も脱いで。パンティに指を……うまく引っ掛けられません。指先が震えています。サイドをわしづかみにして、目をつむって、ぐいと引き下げました。股間が空気にさらされて、風が吹き抜けたような錯覚がありました。パンティは小さく丸めて、積み重ねた衣服の下に隠しました。

わたくしは両手で前を隠して、椅子にどすんと腰を落としました。淑女らしからぬ振る舞いですが、全裸を人目にさらすことこそが、もっとも淑女らしからぬはしたない行為なのです！

ハバクック氏は、せっかく隠したパンティを引き抜いて。ジップ付きのビニール袋に入れました。パンティだけでなく、ブラジャーもスリッパも同じようにひとつずつ袋に密閉します。

不思議そうに眺めているわたくしの視線に気づいて、にやりとハバクック氏が笑いました。弁護士らしからぬ下司な顔つきです。

「こうやって臭いまで封じておくと、ずいぶんと高値で売れるのですよ。少しでも負債を減らして差し上げるのも、顧問弁護士の務めですからね」

洗わずに古着を売りに出すなんて、不潔ですし恥ずかしいです。でも、負債を減らすめと言われると、文句も言えません。

「さて、セキスパート・スカラーシップ・システムについて、説明しよう」

セキスパート。初めて聞く単語です。航海用の天文観測器具に六分儀^{Sextant}というものがあるのは知っています。わたくしの知的好奇心の範囲は広いのです。将来、どんな殿方とお付き合いするか分かりませんもの。

六番目のPart、つまり^{Sixth form}延長教育のことでしょうか。でも、発音はp e r tだったような。

「理事長殿の発案で、数年後に始めようとしていたプログラムなのだが、前倒しに実施することに決めたのです。したがって、いろいろと準備不足な面もあるが、そこは我慢してもらうしかないね。とにかく、きみの苦境を救うためなのだから」

恩着せがましい言い方です。

「このシステムは義務教育のY 1 1 までではなく、Y 1 3 まで面倒を見ます。さらに、就職の面倒まで見てあげます」

やはり、わたくしの推測は当たっていました。

詳しいことは、これを読みなさい——すっかり片付いてしまった小机の上に、校長がカーボンコピーを重ねた書類を広げました。

わたくしは、一語ずつ慎重に読んでいきました。自分の運命に直結する問題ですし、契約書ですもの。

特別奨学生契約書

1. 私（署名者）は、Y 1 3 終了までメイスレッド学園（以下、学園）から、学費及び寮費及び食費の全額免除を受け、制服を貸与して頂きます。但し、個人的都合により退学する場合は、免除された全額を即時に返還致します。
2. 私は、学園が指示する雑役に従事し、その余暇に授業を受けます。労働への対価は求めません。
3. 私は、学園の斡旋により就職致します。就職先については争いませぬ。尚、雇用主が希望する場合は学年次の終業を待たず直ちに就職しますが、第1項の返還義務は免れるものとします。
4. 私は、学園の指示に従って、就職に必要な技能を習得する為の講習を受けます。この講習は、一般生徒の履修課程に優先するものと致します。

5. その他の細則は、学園が定めるところに従います。

契約者〔署 名 欄〕

受託者 メイスレッド学園

校長 キプリング、ケリー

きちんと読んだつもりでも、気が動転していました。父様は行方不明、母様は外国、そしてわたくしは全裸なのです！

いろいろと疑問を感じたのですが、自分に都合良く、自分を納得させるような解釈をしてしまいました。

これは契約書というより誓約書ですが、恩恵を与える者と受ける者ですから、対等であっても仕方ありません。雑役をするというのも、当然ですわ。一切の費用を学園に負担していただいて、当人は余暇に遊ぶというのでは、まともに学費を払っている学生から文句が出るでしょう。学校が指定する先に就職しなければならないというのは、士官学校と同じです。

書類と並べて置いてあったボールペンを使って、すぐに署名しました。

「これで、よろしいでしょ。他はともかく、制服だけでもすぐに貸してください」

校長は書類を確認して、正本は壁の金庫に入れ、写しはハバクック氏に渡しました。彼は父様の顧問弁護士ですから、何の問題もないはずですが、やはり小さな違和感が残りました。

校長が、小さな段ボール箱を小机に置きました。開けてみると、確かに制服が収まっています。けれどジャンパースカートだけで、ブレザーコートもボレロも見当たりません。ストリングタイも無くて、代わり（？）に犬の首輪のような物と……それだけです。

「下着が見当たらないのですけれど？」

校長が、くくっと笑いました。

「学園がきみに貸与するのは制服だけだ。下着もブラウスも靴も自弁だね」

わかくしが一文無しとご存知のくせに。

「では、お金を貸してください。就職して給料をいただけるようになったら、すぐにお返しします」

校長は、せせら笑うばかりです。

そうだ。

「ジニアは、どこに居ますか。彼女を呼んでください」

彼女の下着を借りようと考えました。新品でなくお古でも、我慢します。

「素っ裸で会うつもりかね。まずは、制服を着なさい」

校長の言葉も、もっともです。破廉恥な格好でも、全裸よりはましです。わたくしは制服を手にとって、目を疑いました。目は正常だと分かると、ぐらつきかけていた校長への信頼が、完全に崩壊しました。

ものすごい超ミニなのです。それでも、他に肌を隠す手立てが無いので、頭からかぶりました。立ち上がってスカートの裾を整える必要がないほどです。超ミニどころか、裾が股下に届いているか怪しいです。ミニスカートの丈は膝上何インチと表わしますが、これは股下ゼロインチとしか言いようがありません。うんと引っ張ってから椅子に腰掛けましたが、お尻が座面にじかに擦れてしまいます。それだけではありません。袖ぐりも襟ぐりもウエストラインの布ベルトまで達しているのです。胸元が広く開いているし、横からは乳房がのぞけてしまいそうです。こんなの、デザインではなくて露出です。

「首輪も付けなさい」

やはり、首輪のような物は首輪でした。

「なぜ、こんな物を付けなくてはならないのですか！」

「学校を養っている一般生徒と、学校に養われているSS生徒を区別するためだよ」

区別ではなく差別です恥辱です。でも、開きかけたドアは最後まで開けるしかありません。首輪を手にとって——手回しの良すぎることに驚きました。首輪にリベットで打ちつけられた金色の名札にはSSS—I R I Sと刻印されています。準備不足だなんてとんで

もない。それとも、これは仮の首輪で、これから奴隷に着けさせるような錠前付きの鉄の首輪でもあつらえるというのでしょうか。

首の後ろでバックルを留めるのは、まだ指が震えていて、なかなかうまくいきませんでした。弁護士が後ろに立って、断わりもなく手伝ってくれました。必要以上に首を締めつけられました。悪意を感じ取ったのは、被害妄想に陥っているせいでしょうか。

「うむ。なかなか似合っているよ」

校長は満足気にうなずくと、ドアに向かって大声で呼ばわりしました。

「フォーブス先生、お入りください」

ドアが開いて、校医のミルダ・フォーブス女史と、その後ろからチャーリーとジニアが入って来ました。フォーブス女史が長椅子の端に座り、チャーリーとジニアは両側に分かれて立ちました。

二人はわたくしに挨拶もせず、わたくしもジニアにする頼み事も忘れていました。二人の、いえ三人の服装に驚いて（かつ、あきれて）いたのです。

ジニアは、わたくしと同じ制服と首輪です。半袖のブラウスを着ているのが羨まし——くなんか、ないです。だらしなくボタンを外して、リングを子午線で真っ二つに割ったくらいの乳房（わたくしは、オレンジを北緯三十度で輪切りにしたくらいです。今は関係ありません）が、今にもこぼれそうです……って、あら、ブラジャーは着けていないのかしら。でも、パンティは履いているでしょう。それが、座っているわたくしからも見えないという事実が、すこしだけ安心させてくれました。こんな短いスカートでも、最低限の護理にはなるのです。

チャーリーは、まあ、なんという珍妙な格好なのでしょう。胸から下が裁ち落とされたワイシャツ（？）で、胴が丸出し。そして半ズボン、いえ、ホットパンツです。股下の丈が、やはりゼロどころか、両サイドは切り上がっています。そして前は、ファスナーが無くて、ほとんど直角に開いています。その二等辺三角形の中央をメッシュの縦帯が通っています。思い切りハイレグのブリーフかしら。下着を見せるなんてはしたない——と、叱

ることもできません。わたくしは、下着そのものを着けていないのです。

二人以上に特筆すべきなのが、フォーブス女史のファッションです。黒いレザーのビスチェとタイトミニ、膝まである同色のハイヒールブーツ。ラフな服装に白衣を引っ掛けている普通の姿からは、想像もできません。

そのフォーブス女史が、いきなりわたくしに問い掛けてきました。

「あなたは処女なのでしょうね？」

今日は、目も耳も疑ってばかりです。けれど、幾分は免疫も付きました。

「淑女に向かってぶしつけです」

「はぐらかさずに答えなさい」

たしなめても、ちっとも堪えた様子がありません。弁護士が（あまり小さくもない声で）
Lady bitch
雌犬淑女とつぶやきましたが、それは無視します。わたくしは気を静めて、質問の真意を探ります。

「当然ですわ。なぜ、そんなことをお尋ねになるのですか」

「当然ねえ？」

フォーブス女史は、傍らに立っているジニアを振り返りました。ジニアは、まっすぐにわたくしを……にらみつけているのですか？ かつてない、無礼な態度です。チャーリーはと視線を転じると、彼は楽しそうに微笑んでいます。校長や弁護士と同じような、乾いた笑みです。

「では、そこに立ちなさい」

わたくしの質問には答えず、一方的な指図です。いつもでしたら、たとえ教師とはいえ非礼を詰るところですが——事実上父母を失った衝撃と、破廉恥極まりなく屈辱的な格好をさせられている羞恥とで、一刻も早く教師の用件を済ませてジニアに下着を借りたい思いで、言葉に従いました。

「チャーリー。お嬢様のスカートをまくり上げておきなさい」

チャーリーが、フォーブス女史の言葉を受けて、わたくしに近づきます。

「やめなさい。わたくしを辱しめるなど、許しませんよ」

きぜんと制止しました。

けれどチャーリーはわたくしの正面に立ちはだかって、スカートに手を掛けました。

「やめなさい！」

肩を突き飛ば——そうとしたのですが、わたくしのほうがよろけてしまいました。チャーリーはわたくしを抱き止めて、そのまま抱きすくめました。

そうやって抵抗を封じておいて、スカートの裾をまくり上げると、ジャンパースカートの布ベルトに絡めました。後ろだけでなく、前もです。

わたくしは身をもがいて、わずかに自由になった手で、裾を下ろそうとしました。そして、その腕を背中へ捻じ上げられました。痛いです。痛みより怒りが、先に立ちます。

「使用人の分際で、何をするのよ。放しなさい！」

ふっと、彼の腕が緩みました。正気に還ってくれたのね——と、思う間も無く。

バチン、バチン！

目の前で星が飛び散るほどの痛烈な往復ビンタを食らいました。

「いつまでも、お嬢様ぶってるんじゃないぞ。おまえは、もう、ぼくたちと同じ、いいや、ぼくたち以下の身分なんだからな」

「そうよ。わたしとチャーリーには、帰る家もあるし、お小遣いくらいは仕送りしてくれる両親だって居る。おまえは、親無しっ子で、無一文じゃないの」

ジニアまでが、わたくしに逆らいます。いえ、これは歴とした反逆です。

「そのまま、押さえておいてちょうだい」

この言葉にいちばん腹が立ちました。

「わたくしを家畜みたいに扱うなど許しません！」

フォーブス女史に抗議しました。

「スカートをまくる必要があるのなら、そう言えばよろしいでしょ。やむを得ないことだと判断して、わたくしはわたくしの意思でみずから、このような破廉恥な服装になったの

です。同じことです。チャーリーに、手を放すよう命じてください」

自分の使用人を動かすのに他人の言葉が必要だなんて、これも恥ずべきことですけれど、現実を否定しては改善も出来ません。

悔しいことに、フォーブス女史が小さくうなずくと、チャーリーはすぐにわたくしから放れて、元の場所へ戻りました。

わたくしは、ああ言った手前、スカートを元に戻すことも出来ず、無様な姿で立ち尽くすしかありません。

「こうしていれば、よろしいのですか？」

挑戦的な物言いになってしまいます。

「そうね。手が邪魔だわね。頭の後ろで組んでいなさい。良しと言うまで、下ろしては駄目よ。それから、足は一フィートほど開きなさい」

両手を頭の後ろで……戦争映画で観た記憶があります。捕虜が無抵抗の証しに強制されるポーズです。しかも、股間を丸出しのまま、足を開く！ 女性として耐え難いポーズです。でも、開きかけたドアです。開け放ちますとも。

わたくしが屈辱のポーズに震えていると、フォーブス女史が立ち上がって、携えていた大きなバッグから、鎖を取り出しました。これは首輪からの連想ですけど、大型犬をつなぐ鎖くらいの太さです。

その鎖が、わたくしの腰に巻きつけられました。

何をなさるのでですかと詰問したいのですが、あのように見栄を切ってしまった以上は、されるがままになっているしかありません。抵抗したら、またチャーリーに押さえつけられるでしょう。

鎖が前で合わされて、小さな留金でつながれました。鎖は、長いのと短いのが途中でつながれていたようです。その短い鎖が後ろからお尻を割って、前へ引き上げられます。

「くうっ……」

硬く冷たい感触が陰裂に食い込んできて、わたくしは思わずうめいてしまいました。痛

いのとくすぐったいのとが混ざり合った、奇妙な感触です。訂正します。強く引き上げられて、痛いのが強くなりました。

引き上げられた鎖と腰を巻く鎖との交点を、小さな南京錠で留められました。

「もう、手を下ろしてもいいわよ」

「なぜ、こんなことをなさるのですか」

フォーブス女史がわたくしから離れて、ようやく詰問の機会を見い出しました。

「あなたの処女を守るためよ。臭いのこもらない清潔な貞操帯といったところね」

「……………」

しゃらっと返されて、それがあまりに奇想天外な言葉だったので、わたくしは絶句してしまいました。

「そんな男を挑発するようなファッションで校内をうろつけば、物陰に引きずり込まれて犯されるかもしれないからな」

校長が、さらにとんでもないことを言います。

「この学園の男子生徒は、皆さん紳士ですわ。教師もです」

ちっちゃと、また、あの人を馬鹿にした仕種です。

「もちろんだとも。紳士は淑女に対してどう振る舞うべきかを心得ている。と同時に、下女をどう扱うべきかも、な」

「わたくしを下女呼ばわりするおつもりですか！」

「学園の雑務に従事し、学園に養ってもら。これを下女と言わずして、何というのかね」

「奨学生は下女ではありません！」

「もちろんだとも。今のはものの喩えだ。本当はどういう身分なのか、これから嫌でも体験することになる」

どういう意味でしょうか。それを考えるよりも先に、別の疑問が浮かびました。

「では、ジニアも、こんな物を着けさせられているのですか？」

「見せてやりなさい」

校長の言葉で、ジニアが超ミニスカートを片手でまくり上げました。学生にあるまじき、面積の少ないパンティが現われました。その中にY字形の鎖が潜り込んでいます。ジニアは、さらにパンティまでずり下げました。

「……………」

鎖の貞操帯は、わたくしのと似ていますが、決定的な違いがありました。Y字形の交点が陰裂の上ではなく、会陰部にあるのです。これでは、交接を妨げるという目的を果たせません。

「彼女には処女膜が無いから、それでじゅうぶんなのだ」

校長の説明は、さっぱり分かりません。

「チャーリー。きみも見せてやりなさい」

チャーリーがホットパンツをずり下げました。

「まあ……」

驚きの声です。メッシュ素材のハイレグに見えていたのは、メッシュはメッシュでも金網だったのです。男性器の膨らみに沿って曲がっています。後ろ向きになると腰を巻く鎖とお尻を割る鎖が見えました。その交点、尾底骨のあたりに南京錠があります。

これは分かります。金網の中で膨張しても、交接は出来ません。

「さて。三人そろったところで、SS生徒の宿舎へ案内しよう。ああ、言い忘れていた。特別奨学制度は初めての試みであるから、この私が直々に監督する。職業訓練については、いずれ専門講師に来てもらうが、当面の基礎訓練は先生方と、一部の一般生徒にも手伝ってもらいます」

「それでは、こちらはおいとまします」

弁護士が立ち上がって校長と握手を交わして、フォーブス女史には、差し出された手の甲にキスをしました。気障です。

わたくしも、御挨拶をするべきでしょう。

「あの……父のことを、よろしくお願いします」

具体的には財産の処分ですが、そんな悲しいことは言いたくありません。

キスをされるのは嫌だと思いながら、マナーですから手を伸ばしました。弁護士は、わたくしを無視して。

「さ^sょ^oう^lら^oんⁿが^g」

さっさと部屋から出て行きました。本当に無礼な人です。

フォーブス女史も退出して。校長がわたくしたちを引率して、新しい宿舎とやらへ向かいます。

わたくしは、この上もなく慎重に歩いて——後ろを歩くジニアから幾度も急かされました。

「早く行きなさいよ。いつまでもお姫様を気取ってるんじゃないわよ」

言葉も無礼ですが、態度は最悪以下です。あろうことか、お尻をたたくのです。それも、悪意を込めてしたたかに。

「誰も見てやしないんだから、裾がめくれたって平気でしょ」

パチン！

最初はたしなめて、二度目からは叱ったのですけれど、耳を素通りです。

「静かにしなさい」と校長に叱られたのは、わたくしのほうでした。校舎を出る頃には、諦めました。

わたくしが、小幅にゆっくりと歩く（ようにしたい）のは、裾の問題だけではありません。それは、もちろん——普段なら、膝を露出させずに、かつ優雅に軽やかに裾を翻して歩くのが習い性になっているのに、今は千分の一インチもめくれないようにしたいのです。けれど、それは最重要ではありません。普通に歩くと、陰裂に食い込んだ鎖が内側に擦れて、ちりちりっと痛みが走ります。反射的に腰が引けて、その動きで別の部位にも刺激が及びます。

それでも。校長から何度も急かされて。お尻を^{School maid}学友にたたかれる恥辱を受けたくないから、歯を食い縛って股間の痛みに耐えて、前をすたすた歩くチャーリーの背中を追い

掛けました。痛みだけでなく、陰裂の上端あたりに、引きつれるような感覚もあります。

学園の主な建物は、サッカーコート四面分ほどの敷地の奥のほうに、円弧状に並んでいます。左端から順に、フッド記念小講堂、女子寮、Y 1 から Y 6 までのプライマリー校舎、Y 7 から Y 1 1 までのセカンダリー校舎、Y 1 2 と Y 1 3 の六番校舎、二棟の男子寮、ソブリン小講堂です。二つの小体育館は、敷地の四辺形と校舎の円弧の間です。教会を兼ねた大講堂と総合体育館は、敷地の手前側です。クラブハウスがその両翼で馬術部は馬房が必要なので、すこし離れています。学園案内をしている場合ではありません。

セカンダリー校舎を出た校長は男子寮へ向かいました。校庭では部活に勤しむ生徒の姿もありますが、遠目ですから、わたくしたちに注意を払わないでしょう。けれども、寮は違います。上階の窓からこちらを見下ろしている顔も、ひとつやふたつではありません。

わたくしは痛いのを堪えて足を速め、チャーリーの陰に隠れようとしました。ところが、チャーリーはいっそう足を速めて、校長に並び掛けます。校長が振り返ってわたくしを見て薄笑いをすると、ものすごい大腿で歩き始めました。

たちまち、置いてけぼりにされかけて。また、ジニアにお尻をたたかれます。急かされるまでもありません。さらし者にされる恥辱よりは股間の苦痛を選びます。わたくしは、思い切って大きく足を踏み出しました。

瞬間——苦痛の中心を外れた、陰裂の上端あたりを、甘い稲妻のような感覚が突き抜けました。

「ひゃうんっ……?!」

腰が震えて膝が砕けました。

Y 3 のとき理科の授業で、積層乾電池とブザーと変圧器を使った感電の実験をしたことがあります。あれにちょっぴり似ていますが、もっと太くて柔らかくて、痛いのと甘いのがひとつになったような感覚でした。

「こらっ」

ジニアにお尻を蹴られました。声に嘲りが含まれています。

校長とチャーリーが立ち止まって、振り返っています。いきなりうずくまったというのに、二人とも笑っています。

「立ち上がって歩きなさい。まだまだ楽しめるよ」

意味不明の言葉を残して、校長が歩みを再開しました。

わたくしも、後に続きます。小刻みにちょこちょこ歩くと、あの稲妻は襲って来ませんでしたけれど。さっきみたいに歩幅を大きくすると……

「ひゃあっ……?!」

予期していたので、今度は耐えられました。いいえ。耐えるという性質の刺激ではありません。むしろ、享受というべきです。

わたくしは、淑女にあるまじき大股で二歩三歩と歩きました。甘い稲妻が立て続けに陰核を貫きます。稲妻が大きくなり過ぎると、また失態をさらすので、適度の歩幅と歩度に留めます。

それにしても、この感覚は何でしょうか。女性の性感は膺よりもむしろ陰核に兆すと、図書室の奥でほこりをかぶっていた医学書で読んで、あくまでも知的好奇心から、自分の身体で実験したことがあります。

大陰唇を指で左右に広げると、内側に小陰唇があります。その上端にある小さな膨らみが陰核——正確には、陰核の包皮です。それを指でつまむと、実核がにゅるんって押し込まれて、小さな電撃のような感覚が走りました。お小水を漏らしかけた（もちろん、Y7にもなって粗相したりは致しません）ときの感覚に似ていました。気持ちが良いか悪いかというと、良かったのですが。「なあんだ、こんなものか」と思いました。こんなのになんて、信じられません。医学書にも、女性のオナニーは良くないことだと書かれていたので、二度と実験は繰り返しませんでした。

そのときの感覚と今とは、まるきり違います。自分で肌をつねったときと、他人につねられたときとは、感じが違います。それと同じなのでしょうか。それとも——最初からあった、引きつれるような感覚。これは、鎖の環で陰核の包皮が押し下げられているせい

だと思います。そのことと関係しているのかもしれませんが。

どんっと、チャーリーの背中に顔をぶつけてしまいました。わたくしとしたことが、陰核に発する快感に、我を忘れていたのです。はしたない、みつともない。

校長が立ち止まったのは——セカンダリー校舎の裏手でした。ものすごく遠回りをしたのです。わたくしの破廉恥な姿を男子生徒の目にさらすのが目的だったとしか思えません。

「この物置小屋を、ＳＳ生徒三人の仮宿舎とします。新学年度には、きちんとした寮を作るから、それまでは我慢なさい。ああ、言っておきますが、一般生徒の寮舎へは、舎監か私の許可がない限り立入禁止です」

学校を養う者と学校に養われる者。その言葉を思い出して、屈辱が心に広がります。貴族令嬢のわたくしが、平民に養われるなんて。

「トイレも、当面はあれを使いなさい」

校長が指差したのは、物置小屋の横にある電話ボックスみたいなブースでした。見たことがあります。工事現場などに設置する仮設トイレです。

「シャワーは、スクールバスのガレージ横の洗車場を使うのです」

寄宿制の学園にスクールバスとは、奇妙に思われる方もいらっしゃるでしょうけれど。休日ごとに百台を超えるタクシーに出入りされてはたまりません。だいいち田舎ですから、そんなにたくさんのタクシーがありません。なので、時間を定めて街までのシャトルバスが運行されるのです。何事も経験ですから、わたくしも一度だけ乗ってみました。

でも、スクールバスの洗車場なんて。開けっ広げです。プライバシーがありません。今は初夏ですから、まだよろしいですけど、冬に冷たい水で……ああ、そうでした。新しく寮を作るっておっしゃっていました。しばらくの我慢なのですね。それでも、露天で水を浴びさせるなんて、人権無視もはなはだしいです。けれど、抗議は控えました。これまでの扱いを考えれば——嫌ならシャワーを使うなどと言われるに決まっています。深夜に、こっそり使うしかなさそうです。

「では、三人で協力して物置を片付けなさい。不用品は外に積んでおけば、業者が処理し

ます。私物を運び入れるときは寮舎への立ち入りを許可しますが、階段と廊下および自分の部屋だけです」

夕食の時間になったら、カフェテリアの裏に来なさい。そう言って、校長は去って行きました。

わたくしは、校長の後ろ姿をぼう然と見送るばかりです。わずか一時間で、わたくしの世界は粉々に打ち砕かれたのです。後に残されたのは……これは、本当に現実なのでしょうか。

「ぼやっとしてないで身体を動かせよ」

「きゃっ……」

ぼんっと、お尻をたたかれたのです。この一時間で、生まれてからそれまでよりも、たくさんたたかれたのではないかと思います。

「中のガラクタを外へ運び出すんだよ」

「その前に着替えなくちゃ」

そう言ったのはジニアです。

「この制服は一点しか貸してもらえないのよ。汚れてしまうわ」

それもそうかと、私物を取りに二人は女子寮へ向かいます。わたくしも、仕方なくついて行きました。

女子寮に入ると、エントランスのロビーに居る人たちの視線が突き刺さってきました。

「うわあ、なに、あれ？」

「破廉恥！」

「フッド嬢様、これは何の余興ですか？」

戸惑いながら尋ね掛けてくる人もいます。

「はい、静かになさい」

寮監のアリス・グロウ女史が出て来て、ばんばんと手をたたきました。

「アイリス・フッド（呼び捨てです）は没落したので、これからは特殊奨学生の待遇を受

けます。お付きだった二人も、ほぼ同じです。明日の朝に、校長先生から詳しいお話があります。今日のところは、関わり合いにならないようにしなさい」

お部屋へ戻りなさいと、皆さんを追い返してくださいました。

「あなたたちも、さっさと用事を済ませて出て行きなさい」

まるで乞食を追い出すような口ぶりです。いえ、乞食なんて小説でしか読んだことはありませんけれど。

チャーリーとジニアは、さっさと用事を済ませに行きます。わたくしも動きます。

後ろから急かす者がいなくなったので、わたくしは鎖に刺激されないよう、そろそろと階段を上がって（足を上げると刺激が強いのです）、小さな歩幅で廊下を奥まで進んで。

チャーリーとジニアが私服に着替えているのが、ドアの無い出入口から見えました。そういえば。ずっと二人は、このようにして着替えていたのです。これからは、わたくしも物置小屋の中で、ふたりと一緒に着替えることになるのです。そんなことくらいで、いちいち嘆いていては、これからの生活を乗り切れません。ですから、嘆きません。

嘆く必要は、なかったのです。突き当りのドアを開けた瞬間に、それが分かりました。わたくしの部屋からは、まったく完全に、一切の物品が消え失せていたのです。ハバクック氏の言葉は、うそではなかったのです。では……わたくしは、一日二十四時間ずっと、この露出過剰な制服で過ごさなければならないのです。

それで思い出しました。

「ねえ、ジニア。わたくしに下着を貸してくださらないかしら」

ジニアはわたくしを振り向きもしません。

「聞こえているのでしょうか、ジニア。返事をなさい」

やっと、ジニアがわたくしを振り返りました。

「貸したら、いつ返してくれるの？」

「いつって……」

いつもとはまるきり違うジニアの態度に、わたくしは困惑しました。

「^{M i s s I r i s}アイリスお嬢様は、言葉遣いにうるさかったですわね。貸していただきではなく、恵んでくださいの間違いでしょ」

「まあ……」

とくに気づいていて然るべきでした。この子は、わたくしに敵意を持っているのです。
^{Boarding school}寄宿制学園の学費は、労働者の年収に匹敵します。使用人風情の子弟が通える所ではありません。これまでは父様の善意で学費を出していただいていたのです。それを打ち切られて、一般生徒以下（らしいです）の身分に落とされたのを恨んでいるのです。本来なら、同じ身分に落とされたわたくしに同情して、いつそうかいがいしく仕えてくれるべきなのに。けれど、それを指摘したところで、簡単には考えを正そうとはしないでしょう。皆さんが聞き耳を立てている（に決まっています）場で、声を荒げるなんて出来ません。

「言い争ってないで、さっさと片付けよう」

チャーリーが割って入ります。この子の言葉遣いは、ジニア以上に悪くなっています。

「それよりも、荷物を運ぶのを手伝ってくれよ。どうせ、手持無沙汰なんだろう」

「馬鹿なことを言わないでちょうだい」

使用人の荷物を運ぶ主人なんて、聞いたこともありません。

この場に居ても、惨めさを強く意識するだけです。わたくしは、さっさと（でも、慎重に歩いて）物置小屋へ戻りました。

物置小屋は、予想外に空っぽでした。折りたたみ式の長机が数台と、十幾つのパイプ椅子。移動式のパーティション。道路工事や、学園でなら樹木のせん定や外壁の清掃のときに危険地帯を示すのに使う三角コーンやバー。後は、木箱の類です。わたくしもこの小屋に寝泊まりするのですから、片付けるときには二人を手伝いましょう。いつまでも青い血にこだわっていても仕方ありませんものね。

ラフなシャツとジーンズに着替えた二人が、両手にトランクを提げて戻って来ました。それだけで全部ではないはずですが、まずは小屋の中の不用品を処分しないことには始まりません。

「こりゃあ、いい。床に寝なくちゃならないかと思ってげんなりしてたんだが、これをくつつければ……」

チャーリーは自分ひとりで動いて、部屋の両側に長机を二つずつ並べました。

「布団は寮に固有の備品だから貸してもらえないだろう。とりあえずはバスタオルを重ねて敷こう。つぎの休日には、マットから一式買って来なくちゃね」

長机をベッド代わりにするつもりでしょう。でも、この小屋に五十インチ幅のベッドを三つは狭すぎます。

「わたくしのベッドだけをその形にして、おまえたちは長机を一台にしたほうがよろしいんじゃないかしら」

「何を言ってるんだよ。このベッドは、ぼくとジニアのに決まってるじゃないか」

「わたくしを、半分の幅のベッドに寝かせるつもりなのですか？！」

非礼に無礼を重ねられて、どうしても声が荒くなってしまいます。

「いいや。そんな窮屈な真似を子爵令嬢にさせるわけにはいかないよ」

そうでしょうとも。

「おまえには、床で手足を伸ばして寝てもらうさ」

「なんですって。そんな馬鹿なことをするもんですか」

「させるんだよ」

いきなり、チャーリーに押し倒されました。

「ジニア、準備を頼むよ」

ジニアがトランクから手錠を取り出しました。

「それは……」

就寝時に、チャーリーとジニアを拘束していた手錠です。解錠している状態では、左右をつなぐ鎖を五インチから二フィートまで調節できる特殊な品です。学園の備品ではなく、わたくしの——ハバクック氏の言葉を借りれば、父様の持物です。

「ぼくが、小遣いで買ったのさ。四つで一ポンド。安い買い物だったね」

安過ぎます。父様の財産を出来るだけ高額で処分するという顧問弁護士の務めを果たしていません。

ジニアが、長机の脚に手錠の一端をつなぎました。もう一端を……

「やめて。悪ふざけにも程があります。やめなさい！」

叱りつけても、わたくしの言葉は耳を素通りです。

カチャ……わたくしの右手首と右足首に手錠が掛けられてしまいました。

「替わってくれ」

ジニアが馬乗りになって、わたくしを押さえつけます。チャーリーは、反対側の長机の脚に手錠をつないで——わたくしの左手首と右手首に手錠を掛けました。

わたくしは、床の上にXの形に張り付けにされたのです。

「無礼にも程があります。外しなさい。今すぐ、手錠を外しなさい」

あっさりと、チャーリーは解錠しました。少しは正気を取り戻したのでしょうか。というのは、わたくしの誤りでした。

「Y 5からY 7までの三年間、ぼくたちは辱めを受けてきたんだ。Y 1 3の卒業まではちょうど六年間だから二人の三年分だ。これからは毎晩、こうやって寝てもらうよ。まあ、この部屋で眠れるときだけにはなるけどね」

計算が間違っています。わたくしは、二人の片手と片足だけを拘束していたのです。両手の拘束なら、二人分で三年です。六年ではありません。そんなことを考えつくのですから、わたくしは冷静そのものです。それでも、「この部屋で眠れるときだけ」という言葉の意味が分かりません。まさか、物置小屋から追い出して野宿させるつもりでしょうか。

「ねえ、早く片付けないと、晩御飯に間に合わないわよ」

それもそうかと、チャーリーはわたくしのことをうっちゃって、小屋の中の不用品を外へ運び出しにかかりました。訂正します。今日は、自分の言葉を訂正してばかりです。それほどに、予想外の事態が続いています。

「アイリスも手伝えよ。それとも、ガラクタをベッドにしたいのかい」

チャーリーは部屋の隅から木箱だの三角コーンだのを引っ張り出して、長机のベッドの間に集めています。言い争っていても不毛です。わたくしは、鎖を引っ張らないように注意して腰を屈め、何段にも重なっている三角コーンを——意外に重たかったので、上から三つだけを持ち上げました。服を汚したくないので、しっかりと抱えずに、宙ぶらりんみたいな形で外まで運びました。

チャーリーは残っていた五つの三角コーンを木箱に乗せて、軽々と運びます。やはり、腕力では男の子にかないません。ジニアも、服が汚れても平気なせいでしょう、わたくしの五割増くらいは一度に運び出していました。

カフェテリアが開く合図のチャイムが鳴ったときには、不用品の片づけは終わっていました。

カフェテリアは、それぞれの校舎の中にあります。チャーリーとジニアは、いそいそとそちらへ向かいます。わたくしは、どうしようかと迷いました。こんな露出過剰な破廉恥な服装で人前に出たくはありません。けれど、今夜は空腹を我慢しても、明日になったら服装が替わっているわけではないのです。痛む虫歯は、放置すれば悪化します。さっさと抜いてしまうしかないのです。もちろん、ものの喩えですよ。わたくしには虫歯などありません。

足取りも重く、二人の後ろについて行きました。ところが、二人は校舎へは入らず、建物に沿ってカフェテリアの裏手へ向かいます。そういえば、校長がそんなことを言っていたっけ。

カフェテリアのキッチンに通じるドアを、チャーリーがノックしました。出てきたコックが、チャーリーにトレイを手渡しました。

「^{T h a n k} ^{y o u} ^{s i r} ありがとうございます」

同じようにして、ジニアもトレイを受け取ります。そして、ドアの横に置かれた木箱の上に置きました。木箱は三つあります。寮だけではなく、カフェテリアも立入禁止。外で食べなければならないのです。

三つ目のトレイを持って、コックがわたくしを——ではなく、わたくしの太腿を見ています。気は進みませんでしたが、彼の前へ行ってトレイを受け取りました。

「恵んでもらっておきながら、感謝の言葉も無いのかよ？」

彼の冷たい声に、衝撃を受けました。恵んでもらう。トレイを投げ捨てたくなりました。けれど、それは——施しを受けるよりもいっそう、淑女らしからぬ振る舞いです。これしきの恥辱、破廉恥な服装を人目にさらすことに比べれば、何程のことがあります。Thank you……s i r「ありがとうございます」

これほどつらい思いをして s i r と発音したのは、初めてでした。そして、これからは同じ思いを毎日何度もすることになるのでしょう。

トレイに載っていたのは、クラブサンドエッグサンドとマフィンがひとつずつ。フィレステーキとコロケとサーモンムニエルがひと切れずつ。何種類かを混ぜ合わせたらしい、とにかくサラダと分かる食べ物が一皿。きちんとしているのは、ポタージュとミネラルウォーターだけです。そして、プラスチックのフォークとスプーン。

二人は地べたに腰を下ろして、食事を始めています。無作法です。でも、キャンプでは（荷物を軽くするために携帯テーブルと椅子を持って行かずに）そのような食べ方をするときもあります。それと同じだということにしました。

わたくしも、頼りないフォークとスプーンを手に持って、食事を始めました。味なんか、分かるはずがないです。半分は残して、惨めな食事を終わりました。

トレイは木箱に置いたままにして、物置小屋へ戻りました。二人は寮舎に残している私物を取りに行きました。最初にカラーボックスを運び入れて、長机の下に横倒しに並べました。もう一往復して、トランクに入り切らなかった品々を持ち込み、カラーボックスに収めました。わたくしのことはまったく無視して、それらの作業を終えると、今度はバスタオルやら替えの下着やらを長机の上に敷き詰めてベッドメイキングに取り掛かりました。

わたくしは必要が生じて小屋から出ようと思いました。

「どこへ行くんだよ」

チャーリーが、とがめるような声を掛けてきました。

「おまえには関係の無いことです」

「そうは、いかない。ここでは、ぼくが班長なんだ。許可無く行動してくれては困る」

「誰が、そんなことを決めたのですか。わたくしは認めません」

「決めたのは校長先生だよ」

あつと、思い当たりました。二人が校長に呼び出されてからわたくしに声が掛かるまで、午後の授業まるまるの時間がありました。特別奨学生の契約だけではなく、わたくしには説明のなかった、あれこれも教わっていたのでしょう。だから、わたくしひとりが戸惑っているうちに、てきぱきと物事を進められたのです。

「認められないって言うのなら、あらためて決めたっていいんだよ。僕が班長になることに賛成の人は？」

チャーリーが自分で挙手をして、ジニアはくすくす笑いながら手を挙げました。

「三人のうち二人が賛成。多数決で決定だね」

茶番劇です。言い争う気にもなりません。というより、生じた必要が切迫してきました。

「用を足しにいくのです。これで、よろしいですわね」

わたくしは少しだけ急いで、小屋の隣に置かれている仮設トイレに向かいしました。

そして、非情な困難に気づいたのです。わたくしの股間には一本の鎖が通されているのです。このままでは用を足せません。切迫をいっそう強く感じながら、六番校舎へ向かいます。

三つの校舎はだいたい同じ規模です。プライマリーの二百人と延長教育の七十人とが、^{Sixth form}同じ容積の中に収容されるのですから、六番校舎には余裕があります。だから、医務室などはそちらにあるのです。ああ、とかく怪我をしやすい小さな子供たちのために、プライマリー校舎にも簡単な保健室があって、昼間は看護婦が常駐しています。

フォーブス女史は、まだ医務室にいらっしゃいました。まともなファッションに戻っています。

「鎖を外してください。用を足したいのです」

フォーブス女史は、取り合ってもくれません。

「そのまま排尿も排便も出来るわよ」

さっさと出て行きなさいとばかりに、デスクに向き直りました。

「でも……後始末が出来ません！」

「洗車場の水道を使っても構わないのよ」

「……………」

垂れ流して、そのまま洗車場へ行けと言っているのです。

淑女にあるまじき振る舞いですが、わたくしはドアを開け放ったまま、無言できびすを返しました。

股間の刺激を気にする余裕もなく、仮設トイレに駆け込みました。照明の無い暗がりの中でドアを手探りしましたが、鍵が見つかりません。便座を拭こうとしても、ペーパーホルダーに紙がありません。もし汚れたら、それこそお尻まで洗う破目になるのを覚悟して、そのまま座りました。

スカートをきちんとめくっていたりパンティを下ろしたりしては間に合わなかったくらい、ぎりぎりでした。ノーパンティで超ミニスカートは、とても便利です。ただでさえ飛び散りやすいのに、鎖に当たって……いつもよりも激しく飛び散って、太腿までぬれてしまいました。裾に染みないことを祈りながら、校舎の裏手を通して、ソブリン小講堂のさらに先にあるガレージへ行きました。

洗車場は、ガレージ脇のコンクリート床です。水道には、さいわいにホースがつかない放しになっていたもので、しゃがみ込んで洗いました。星空の下、スカートの裾を布ベルトに挟み込んで、お尻を丸出しにして……鼻の奥がむずがゆくなってきたので、空を眺めます。郊外だというのに、スモッグがここまで漂ってきているのでしょうか。星が、にじんで見えました。わたくしは誇り高き青い血筋の人間です。どんな逆境に突き落とされても、泣いたりはしませんとも。

必要最小限の範囲だけでなく、便座に触れていた部分まで洗ったものですから、スカートをぬらしてしまいました。

物置小屋へ戻っても、受難はさらに続きます。受難ではなく、迫害です。

わたくしと入れ替わりに仮設トイレと洗車場を使った二人は、さっさとパジャマに着替えました。電気が通じていないのですから、予習復習もできません。わたくしには、教科書すら無いのですけど。

「あなた、まさか制服のままで寝るつもりじゃあないでしょうね」

ジニアが意地悪く尋ねます。

「わたくし、着替えを持っていません。貸してくださるとても、おっしゃるの」

答の分かり切った質問で切り返しました。でも、返って来た答は、とんでもないものでした。

「素っ裸で寝なさいと言っているのよ」

「そんなこと、出来っこありません」

「だけどさ。よれよれの制服を着て登校されちゃ、ＳＳ生徒全体の評判に関わる。班長としても、制服を脱いで寝ることを求めるね」

「ああ、そうだったわね。アイリスお嬢様は、服を脱ぐのにもわたしの手助けが要るんですわね」

ジニアが、わたくしに近寄ります。わたくしは後ずさりしましたが、すぐ壁際に追い詰められました。

「いっとくけど、暗闇で手探りになるからね。もしも制服を破ってしまったら、ごめんなさいね」

おとなしく脱がなければ破るという脅しです。今でさえ卒倒しそうなほど恥ずかしいのに、たとえ一インチでも破られたりしたら、裸よりも惨めな姿になってしまいます。

「手伝っていただく必要はありません。自分で脱ぎます」

そう言うしかありませんでした。

わたくしは自分を励まして、しゃんと立ちました。脅されて慌てて服を脱ぐのではありません。しわくちやの制服を着て授業を受けるなど、わたくしのプライドが許さないのです。わたくしは、き然とした態度で制服を脱いで、小屋の奥にひとつだけ残っている長机の上で、きちんとたたみました。

「首輪は外さなくていいよ。犬だって、首輪をしたまま眠るだろ」

犬は自分の毛皮を脱いで寝たりはしません！

心の中で反発してから、犬扱いされたことに気づきました。でも、それは両刃の剣です。チャーリーだって、同じ首輪を着けているのですから。もっとも、労働者階級から犬への転落は、貴族から犬への転落に比べれば、千倍も容易いことでしょう。

「さて……それじゃ、寝る準備をしてあげよう」

チャーリーが手錠を持って、鎖をちゃらちゃら鳴らします。

そうでした。床に寝るだけでなく、四肢をX字形に拘束されるのです。抗議しても無駄です。さっきみたいに、二対一の多数決で押し切られます。抵抗しても無駄です。二つ年上の男性にかないつこありません。助けを求めるのも無駄です。弁護士から手錠を捨値以下で買えたのは、使い道を知っている校長が許したからでしょう。

無駄なあがきをして惨めな結果に終わるくらいなら、き然として受け容れるほうが、まだしもです。

コンクリートの床に、わたくしはみずからの意思であお向けに横たわりました。引っ張られるまでもなく手足を机の脚に向かって伸ばしました。こうなると、股間を割る鎖が救いです。うんとクロッチの細いパンティを履いているのも同じですから——と、自分を説得します。

「へええ。ずいぶんと素直になったな」

かちや、かちや、かちや、かちや……チャーリーとジニアが左右に分かれて、わたくしの手足を拘束しました。

卒業までずっと続けるなんて言っていましたけれど。真冬にこんなことをされたら、風

邪を引くだけで済めば幸運です。肺炎になるかもしれません。でも、そうなったら。入院している間は、ぬくぬくと過ごせることでしょうよ！

「子爵令嬢ともあろう淑女が、すごいポーズだなあ」

「こうやって眺めると、ずいぶんb o o b sと小さいおっぱいね。あたしのほうが、ずっとグラマーだわ」

星明りだけで、そんなにはっきりシルエットが分かるはずがありません。当てずっぽうに決まっています。

「だけど、こっちは、これくらいのほうが好きだな。きみのは濃すぎるよ」

言いながら、チャーリーがわたくしの股間に向かって手を伸ばしたので、触れられたときには覚悟が来ていました。陰毛を引っ張られても、わたくしは身じろぎひとつしませんでした。わたくしがたしなめると、いっそう面白がって、もっと無礼なことを仕掛けてくるのだと、だんだんに分かってきたからです。

「あら、そうなの。それじゃ、もっとあなた好みにしてあげるわね」

ジニアはわたくしの陰毛を何本かひとまとめにして、強く引っ張りました。

痛みを感じましたが、たいしたことはありませんでした。実際には抜かれずに、指のほうで滑ったのでしょうか。

「いまいましい。やめてくださいって泣いてお願いしてくれると思ってたのに」

ジニアはトランクを探って、細長い品を取り出しました。

ちきちきちき……カッターナイフの刃を繰り出す音です。引き抜けないのなら、切るかそるかするつもりなのでしょう。

「刃物は駄目だよ。暗がりですてんが狂ったら、傷つけてしまう」

ちえっと舌打ちをして、ジニアはカッターナイフをトランクに戻しました。

「そのうち、明るい所でそり落としてやろうかしら」

「勝手なことをしたら、校長先生に叱られるぞ」

「ふん……」

ジニアはトランクを長机のベッドの下に戻しました。立ち上がって、長机の上に置いてあったバッグを手に取りました。それをわたくしの真上にかざして。

ぼすん……お腹の上に落としたのです。

「うぶっ……」

不意打ちに腹筋を固める暇もありませんでした。お腹で鈍い痛みが爆発しました。

「あまり無茶はするなよ。先は長いんだ。みんながアイリスをどう扱うか、それを見定めてから——それよりも、ちょっとだけ酷いことをしてやろうよ。それくらいなら、叱られなくて済むと思うよ」

みんなというのは、クラスメイトのことでしょう。教師も含まれているかもしれません。彼らがわたくしに酷いことをすると、チャーリーは考えているのでしょうか。たとえ零落したとはいえ、貴族令嬢であるこのわたくしに？

チャーリーだけでなく、ジニアも同じ考えのようです。

「そうね。今夜のところは、これくらいで勘弁してあげる」

それから三十分ほどして、校長が就寝前の点呼に来ました。寮監の仕事ですが、この物置小屋は男女いずれの寮にも属していないし、SS生徒は校長が直接に指導するので、こうなるのでしょうか。言うまでもなく、校長は単身で学園に泊まり込んでいて、週末は遠くに居る家族の元へ航空便で往復しています。

校長は、惨めに不様に拘束されているわたくしを見ても、何も言いませんでした。驚きの声が無かったのですから、予期していたのではないのでしょうか。

点呼が（三人ですから、数秒で）終わると、二人はわたくしをほったらかしにして、長机のベッドに上がりました。

それきり、二人の気配はしなくなりました。まさか、すぐに眠ったのではないでしょう。わたくしがどうするか、息を殺して様子をうかがっているのかもしれません。手錠を緩めようとしてもがいたら、また何かを落とされるかもしれません。さめざめと泣いたりしたら、いい気味だと思うことでしょう。

そんな思感に乗ってたまるもんですか。わたくしは、床に張り付けられたまま、逆に彼らの様子をうかがうことにしました。

.....

.....

.....

ひとり天井の裏側を見上げていると、いろんな想念が頭をよぎります。考えるのをやめると、全裸を浸す夜気とか手錠の感触が意識されて、惨めさと不安に押し潰されそうになるので、あれこれの想念に身を委ねます。

父様は、生きてらっしゃるに決まっています。南米へ赴かれたとのことですが、事後処置ですから、戦場へ向かわれたのではないのでしょうか。撃墜されたりとかは、有り得ません。通信手段が確保できなくて、連絡が絶えているだけに決まっています。

母様のほうが、気がかりです。五十万ポンドの負債といえば、労働者の数十年分の年収です。医者とか大学教授ならともかく、そういった資格を持たない母様が五年で返済できるお仕事って、国内ではなくドイッチュになら、あるのでしょうか。わたくしを伴えなないというのも不思議です。それはもちろん。子爵令嬢としては、変なところへ留学するよりも、国内で由緒正しい寄宿制学校を卒業するべきなのですけど。

特別奨学生になったら、こんなに惨めな待遇を受けると、母様は御存知なかったのでしょうか。いえ、わたくしのことは考えないようにしましょう。

母様のお仕事って、どんなのでしょうか。上流階級のマナーや社交ダンスの講師としては、たとえ子爵夫人、伯爵令嬢の肩書があったとしても、医者に匹敵する収入は得られないと思います。

あれこれ考えるうちに、クルチザンヌというフランシュ語が頭に浮かびました。
courtisane
高級売春婦。まさか、ですわね。十九世紀じゃあるまいし。ふしだらなフランスでは、貴族の娘どころか正夫人ですらそのようなことをした例はありますが、高潔なイングル貴族が、まさかです。だいいち、夫を助けるために夫を裏切るというのは、本末転倒自己矛

盾です。

同じ事を何度も何度も考えているうちに、夜が明けてしまいました。

S h a m e

環境が激変して。チャーリーとジニアも、熟睡できるはずがありません。二人とも夜明け前には目を覚ましました。けれど、すぐには手錠を外してくれません。高い所から見下ろしているくらいなら、まだしも。

チャーリーは床まで下りてきてわたくしの横にしゃがみ込みました。ばかりか。不届きにも、わたくしの乳房をなでたりつかんだりし始めました。

「やめなさい、チャーリー」

たしなめましたけれど、彼の手は止まりません。わたくしは、重ねて叱ったりはしません。絶対に従わないだろうと、予測できたからです。叱れば叱るほど、主人としての威厳が損なわれます。

今のチャーリーは、小さな子供と同じです。珍しい物をあれこれいじっているのです。

「ひゃんっ……」

乳首をつままれて、不快な電撃が走りました。ええ、不快なのです。

「へえ。こんなちっこい胸でも感じてるんだ」

チャーリーは調子に乗って、指の腹で乳頭をくすぐったり、あるいはオレンジを胸板から引き剥がすみたいにつかんだり。

そのたびに、細く鋭い不快感や、乳房全体に染み通るような不快感に襲われます。うっかり声を漏らした結果がこれなのですから——わたくしは声を出すまいと、懸命に堪えました。

ぼぐっ……お腹に重たい衝撃を受けました。

「ぐぶふっ……」

また、バッグを落とされたのです。それも、昨夜よりずっと高い位置から。激痛に息が

できません。反射的に身体を曲げようとして、手首に手錠が食い込みました。

「そんな平らな胸が、あなたの好みなの？ それじゃ、わたしのは二度と触らせてやらないからね」

女同士です。声に含まれている嫉妬の響きは、容易に聞き分けられます。なんとかしたことでしょう。あれだけ厳しく管理していたのに、いつの間にか二人は（どこまでかは分かりませんが）通じていたのです。

「怒らないでくれよ。ちょっと、お嬢様をしつけていただけさ」

「そんなのは、先生方に任せておけばいいのよ。そんな平原で遊んでいないで、わたしの丘で遊んでよ。なんだったら、密林を探検……あ、そうか。出来ないんだっけ」

「勘弁してくれよ。前が突っ張らかるのは痛いんだから」

状況が状況ですから、そんな^{metonymy}換喩だらけの会話も、およそは分かります。わたくしの胸が平原ですって？ 平原にオレンジは生りません——この修辞は捻じれています。

それ以上の悪戯はされずに、張り付けから解放してもらえました。わずか十秒で制服を着て、隣のブースで恥辱をかみ締めながら用を足して、校舎の裏伝いにガレージへ行き、男子寮の窓から外を眺めている顔が無いのを確かめてから、大急ぎで股間を洗いました。

物置小屋まで戻って、ずいぶんと迷いましたが、中に入りました。使用人が中でのんびり過ごして主人が外で待つなんて不自然ですし、さっきの会話から察するに、二人だけにしておくと良からぬことをしでかしそうです。使用人の不始末は主人の責任でもあるのですから、きちんと監督しなければなりません。分かっています。もはや、二人ともわたくしの言うことになんか貸す耳を持たないのでしょうか。けれど、だからといって責任を放棄するわけにはいきません。それに、彼らがわたくしを主人と思わないにしても、『第三者』の目の前で^{illicit sexual relations}不純異性交遊にふけったりはしないでしょう。

はなはだしく居心地の悪い二時間が過ぎて、朝食の時間になりました。また、二人について行く形でカフェテリアの裏手へ行って、昨日と同じコックから朝食を恵んでもらいました。

「え……？」

思わず疑問の声を漏らしたのは、二人に比べて明らかに食事の量が少なかったからです。絶対的な量の不足が不満だったわけではありません。差異をつけられたことに納得がいかなかったのです。

「おまえさんは食が細いから、それでじゅうぶんだろ」

昨夜は半分くらいを残した、そのことを言っているのです。

たかだか食事の量くらいのことで、労働者といさかいを起こすなんて、わたくしのプライドが許しません。

「^{T h a n k y o u s i r}ありがとうございます」

昨夜よりは滑らかに、感謝の言葉を言えました。誇りを失ったわけではありません。事務的手続き、あるいは呪文みたいなものと、割り切っただけです。

食事の途中で、わたくしたちのクラスの担任^{advisor}であるレイカー氏が来て、教室ではなくフッド記念小講堂へ行くようにと告げました。二人は心得顔。何事だろうといぶかしく思ったのは、わたくしだけのようです。

フッド記念小講堂へ行くと、担任に関係者通用口へ案内されました。通用口から控室を通って袖へ行き、そこで待機です。

袖からは座席が見えませんが、講堂の収容人数と聞こえてくる私語から推察すると、セカンダリーの生徒だけが集められているようです。

一時限目のチャイムが鳴ると、わたくしたちとは反対側の袖から、校長が姿を現わしました。

「おはよう、生徒諸君。本日は、当学園で初めて試みる^{Scholarship System}奨学制度について説明します」

生徒の皆さんはお行儀よく校長の話を聞いていますが、きっと何の関心も持っていないでしょう。学費の心配なんて無縁ですものね——わたくしたち三人を除いては。

「近世までは学僕という制度がありました」

校長が後ろの黒板に大きく“School Servant”と書きました。

「学校の雑役夫として働きながら、その合間に無償で授業を受ける生徒の事です。新しく設ける奨学制度も、この仕組みと似ています。在学中の生徒で、学費を工面できなくなった三人に、この新しい制度を適用することにしました」

レイカー氏に引率されて、わたくしたちは舞台の中央へ進みます。進みたくなくても、進まざるを得ません。生徒たちと向かい合って立っても、ひとりひとりの顔なんか見分けが付きません。とにかく、スカートの裾が気になって仕方がありません。下から見上げられているのです。

「奨学生の三人も、こちらを向きなさい」

ほっとした気分になって、まわれ右をします。股間を見上げられるよりは、お尻を見られるほうが、まだしもです。もっとも、六つと半ダースの違いですけど。

「新しい奨学制度は、公式には特別奨学制度と称します」

最初にした文字の下に“Special Scholarship Sysytem”の文字が加わりました。
「学僕などという言葉は古臭いので使いませんが、一面においては同じです。下級生といえども、この三人に雑用を言いつけて使役してかまいません」

ちょうど（昨日までの）わたくしとチャーリー、ジニアとの関係のようなものです。今度は、わたくしも二人と同じ立場になるわけですね。

「しかし、生徒も教師も心得ておいてもらいたいのは、実際の運用形態です」

校長が三行目に“expert Scholarship Student”と書きました。何かの分野の専門家を養成する目的の奨学金制度という意味でしょう。だから、学園が就職先を世話してくれるのだと、理解しました。

ところが。校長は三行目の左端にSの文字を書き加えて、最初の三文字にアンダーラインを引きました。“Sexpert”

「あっ……」

わたくしは息を飲みました。昨日の校長の発音は、聞き違いではなかったのです。こんな単語は初めて見ましたけれど、容易に想像がつかしました。SEXのエキスパート。

売春婦です！

それで、この破廉恥極まりない制服の意味が明白になりました。売春婦は客を引くために、ずいぶんと露出的な服装をするのだと、男性向けのいかがわしい雑誌に書いて……あると、うわさに聞いたことがあります。こんな超ミニスカートとか、裸身に毛皮のコートだけをまとうとか。

「セキスパートとしての訓練には、主に同学年以上のセカンダリー生徒に協力をしてもらう場面もあることでしょう。しかし、教師の許可を得ずに、そういうことをしてはいけません」

わたくしは、この場から逃げ出そうかと考えました。大声で校長に抗議しようかとも考えました。けれど、どちらも危うく思いとどまりました。

ひとつには、学園を逃げ出しても、身を寄せる所が無いのです。こんな破廉恥な服装で外を歩かなければならないという事実は無視するとしても。

二つ目には、他の二人が平然としているのに、わたくしひとりを取り乱すことへの羞じらいです。

この二つは、現実的な困難と個人的な見栄の問題です。けれど、それ以上にわたくしを縛るものがありました。契約書への署名です。うかつに署名してしまったとはいえ、契約が成立したことに変わりはありません。契約を破るなど、ならず者のすることです。貴族の名誉にかけて、そんな真似は出来ません。

それに、セキスパートが売春婦だというのは、わたくしの勘違いでしょう。伝統と格式を誇るメイスレッド学園が売春婦を養成するはずがありませんもの。

「……さて、ここで諸君に覚えておいてもらいたいのは、アイリス・フッドと他の二人は明確に事情が異なっているということです」

自分の考えにかまけて、校長の話を聞いていませんでした。

「チャーリー・アクティとジニア・コルベットには、労働者階級とはいえ両親が健在です。親元から若干の金銭的援助を受けられます。しかし、アイリス・フッドは事実上の孤児と

なり、まったくの無一文となったのです。彼女は、学園の慈悲と生徒諸君の善意とによってのみ生きていけるのです。したがって、彼女に対してその見返りを求める権利が学園と生徒諸君にはあるのです」

酷い言われようです。けれど、ここまでの長広舌は、わたくしにとどめの一撃を加えるための前準備に過ぎなかったのだと、思い知らされました。

「したがって……」

校長は、チャーリーとジニアに、袖へ引っ込むように命じました。わたくしひとりが壇上に立たされています。

校長はチョークでわたくしを指し示してから黒板に向き直り——四行目に、それまでより大きな文字で、すべてを大文字で書き記しました。

“SEX SLAVE STUDENT”

講堂全体がどよめきました。

わたくしは——立ったまま卒倒したのでしょうか。それとも、夢遊病者みたいに行動していたのでしょうか。気がついてみると、クラスが集まる教室に居たのです。

いつもとは違って、わたくしは最前列よりもさらに黒板に近く、教室の入口あたりに座っています。机は斜めになっています。黒板の半分は数式で埋められています。Y7の内容だから、ひと目で理解できるはずなのに、アインシュタインの一般相対性理論みたいに見えます。

それよりも、教室に居る十二人の生徒全員の視線がわたくしに突き刺さっているのを意識してしまいます。女子の蔑んだ目つきにいたたまれない思いですが、男子の熱を帯びた目つきが嫌です。男子同士が集まって、女子には聞こえないようにひそひそ話をしているときと同じ目つきです。そちらに気を取られていたので、チャーリーとジニアの姿がないことに気づくまでに時間を要しました。

二人は、わたくしとまったく同じコースを選択しています。片時もわたくしから離れないためです。二人を従えずに授業を受けるのは、これが初めてです。もしも、今のわたく

しが授業を受けているのだとすれば。

だって、わたくしの机の上には教科書もノートもペンすらありません。みんな、父の負債の弁済に充てられたのです。

教師のアルペイン氏は生徒とは反対に、わたくしをちらとでも見ようとはしません。わたくしなど存在しないかのように、授業を進めていきます。

「先生、ありがとうございました。さようなら」

授業が終わって、皆が一斉に挨拶をしたときも、わたくしは声を出せませんでした。

休憩時間に次の教室へ移動すると、やはり黒板の端にひとつだけぽつんと離れて机が置いてありました。わたくしの席だと思いますが、見世物みたいで嫌です。でも、他の席に座るのもためられます。どうしようかと迷っていると、不意にお尻をたたかれたというか、なで上げられました。

「ひゃあっ……」

「授業を始めます。うろちょろせず、アイリスは受^{punishment chair}罰椅子に着きなさい」

わたくしのお尻を触った（と、控えめに表現しておきます）のは、古典語のキャビン氏でした。とんでもない教師——ではないのかもしれませんが。校長の言葉を真に受けて、わたくしを性奴隷^{SEX SLAVE}として扱うつもりなのだとしたら、これでもずいぶんと紳士的なのでしょ
うね！

受罰椅子というのは、授業中に騒いだ子を座らせる、足が床に着かない三角椅子のことです。この机は、むしろさらし台^{pillboard}というほうが適切でしょう。

「なぜ、わたくしがこんな位置に座らなければならないのですか？」

キャビン氏は肩をすくめました。

「たとえば、きみを教室の後ろに座らせると、主に男子生徒が黒板を見ないからです」

十二人のうち、女子は四人です。その四人がくすくす笑いました。腹立ちまぎれにさらし台と表現しましたが、本当にさらし台だったのです。

わたくしは恥辱と怒りに打ち震えました。教室から立ち去ろうとしました。

「待ちなさい。怠業は許しません」

腕をつかんで引き戻されました。力づくで座らされました。そして、なぜか布ベルトを抜き取られました。

「授業が終わるまで、きみを縛りつけておきます」

わたくしの怒りは頂点に達しました。

「必要ありません。教科書もノートも無しで授業を受けるお芝居をしろとおっしゃるのなら——よろしいです、そのように致します」

縄目の恥を受けるくらいなら、男子生徒にいやらしい目つきで眺められるほうが、まだしもです。

「よろしい。しかし、勝手な振る舞いをしたら、すぐに縛りつけます。そのために、ベルトは預かっておきます」

「貴族の名誉にかけて、言葉を違えたりは致しません。ベルトを返してください」

嘲笑めいた笑いが、男子からも湧きました。

何がおかしいのですか。貴族とは、財産ではありません。敢えていうなら、爵位でもありません。高貴な血筋の元に生まれた者をいうのです。無一文になろうと、破廉恥な衣服を（自由意思でならともかく強制されて）着ていようと、わたくしに青い血が流れているという事実はいささかも揺るがないのです。

「分かった分かった。そこまで言うのなら、そら」

キャビン氏は、無礼にも布ベルトを机の上に放り投げました。このような輩は、たしなめても無駄です。わたくしは黙って、布ベルトを締めました。締めたからといって、肌の露出を減らせるわけではありませんけれど。

古典語の授業も数学と同じでした。単純明快なシーザーの書簡が、まるで魔法使いが唱える呪文のように聞こえました。アルファベットですら^{hieroglyph}象形文字に見える始末です。

そんな調子で午前の授業が終わりました。授業中はもちろんですが、休憩時間にもわたくしに話し掛けることはおろか、近寄る者すらいませんでした。わたくしをどう扱って良

いか、戸惑っているのでしょう。誰もキャビン氏を見習ったりしないことを願うばかりです。

昼食はこれまでと同じで、カフェテリアの裏に置かれた木箱の上で食べました。朝と同じでわたくしだけ半分の量でしたけれど、むしろありがたかったです。だって、日中に生徒の目がある中で、洗車場にしゃがんで裾をまくり上げて股間を洗うなんて、出来っこありませんもの。

——午後もそんな調子で、放課後を迎えました。ですが、わたくしの受難は、そこから始まったのです。セカンダリー校舎全体に流される放送で、わたくしはひとりだけ医務室に呼び出されました。まだ看護婦も勤務時間中ですが、プライマリーの保健室に詰めていますから、ここにはフォーブス女史しかいません。

「そのベッドに直角に寝なさい」

事務口調で告げられて、質問の虚しさを分かりかけてきたわたくしは、おとなしく言われた通りにしました。

「足を曲げて開いて、膝を両手で抱えなさい」

これには従えません。パンティを履いていないのです。

「なぜ、そんなことをしないといけないのですか」

質問ではなく詰問です。

「あなたは処女だと自己申告しましたが、それを確かめる義務が私にはあります」

当然でしょうといった感じの答が返ってきました。

「貴方にそんな権利はありません」

「権利ねえ？」

昨日から頻繁に投げつけられるようになった、人を馬鹿にしたような口ぶりです。

「そう言うあなたに、誰かに逆らう権利なんてあるのかしら」

「わたくしは、自然^{common law}法に規定される個人の権利を放棄した覚えはありません」

そんな堅苦しい言い方になったのは、特別奨学生契約書を思い出したからです。わたく

しが学園の指示に従わなければならないのは、雑役と、就職に必要な技能講習だけです。その他の事柄については、一般生徒と変わりはないはずです。

「いいこと。あなたには二つしか選択肢が無いのよ。ひとつは、おとなしく命令に従うこと。もうひとつは、これから呼び出す男性教師に腕力で命令に従わされること。どちらを選ぶの？」

明白な脅しです。けれど、脅しに屈しまいとすれば、いっそうの辱しめを受けます。

「昨日は^{gentlemen}殿方が居らしたから、猶予してあげたのよ。私の好意を分かってほしいわね」

口調を和らげてそう言われると、ほだされてしまいます。もしかすると、この人はわたくしの味方になってくださるかもしれません。絶対的権力者の校長には服従するでしょうけれど。

それに。この人は医者です。医者^のの指示には、王族といえど従います。

わたくしは自由意思で、き然として、尊厳を保って、命じられた姿勢を取りました。

女史はわたくしの股間に手を伸ばして、鎖を封じている南京錠を外しました。

股間への圧迫が消え失せて、なんとなく物足り……なんでもありません。すっきりしました。

女史が片手で大陰唇をくぱあと開いて、ペンライトで照らしながらのぞき込みます。

「ふうん。処女膜は分厚いほうね。中央にも隔壁があるから、破か痛は大きくなるでしょうね」

医者^のの所見です。からかっているのではないと思います。

一瞬鋭い光が走って。カシャッとシャッターの音がしました。

「何をするのですか。まさか、写真を撮ったのですか？！」

^{customer}「お客様に見ていただくためよ」

わたくしの頭の中で、その言葉がセキスパートという単語と重なりました。やはり、売春婦だったのです。

わたくしは跳ね起きて、カメラを奪い取ろうと——したときには、女史はそれを引出し

に仕舞っていました。

それで、すこし冷静になりました。わたくしが売春婦という『職業』に就くのは六年後です。それまでには、母様が借金を返済し終えて、わたくしを迎えに来てくださるでしょう。仮に「雇用主が希望」して卒業を待たずに就職しなければならなかったとしても、それはY 1 2になってからです。学園も雇用主も国家が定めた最低限の教育期間は守らなければなりません。四年も先のことを、今から心配するのは^{borrow sorrow}悲しみの前借です。

「そこに立ちなさい。封鎖は、立ってもらったほうがやり易いわ」

女史の言葉に素直に従うだけの自制を、わたくしは取り戻していました。

冷たい感触が小陰唇まで割り込んで、陰核の包皮を押し下げ気味に——かちり。南京錠が掛けられました。これが、わたくしの唯一の下着なのだと、悲しくなりました。胸が切なく捻じられて、鎖に封じられた奥で恥辱が震えます。

けれど、こんなのは、まったく恥辱ではなかったのです。夜になって、それを思い知らされました。

「アイリスは、ぼくたちより下の身分になったじゃないか」

わたくしだけが性奴隷だという意味です。

「だから、呼び捨てにするのは、ぼくたちのほうだぞ」

本当なら、自分たちのことはミスターとミセスを付けて呼ぶべきだが、それでは三年間の親密な関係が失われてしまうから、^{My brother}お兄様・^{My sister}お姉様と呼べなどと要求します。

先にも言いましたように、チャーリーは同学年でも二つ年上。ジニアは年令通りの学年ですが、十月生まれなので、わたくしより九か月だけ年長です。その意味では、彼らの言い分にも理はあります。

でも、親密な関係ですって？ 昨日までは、わたくしがそう思っていました。それを仕返しなどと言って否定したのは、この二人なのです。

「身の程を弁えなさい」

厳しく叱ってやりました。二人はすぐ過ちに気がついて、無体な要求は取り下げました。

「それじゃ、電気も無いことだし、さっさと寝よう」

建設的な意見です。

「そうですわね」

薄暗くなってから、一度は仮設トイレ（と、洗車場！）を使いましたが、夜中に行きたくなってもチャーリーかジニアを起こして拘束を解かせないといけないので、寝る前に済ませておこうと考えて、小屋から出ようとしてしました。チャーリーが通せんぼをしました。

「お兄様お姉様って呼んでくれるまで、トイレは使用禁止だ」

「……………」

ちっとも分かっていなかったのです。

強行突破しようとして押し倒されるのは嫌ですから、さっさと制服を脱いで床に横たわりました。ひと晩くらい、生理的欲求は我慢できます。

チャーリーとジニアは拍子抜けした顔で、わたくしを拘束しました。昨夜と同じで、ひとりが片手と片足です。本当に、これを六年間も続けるつもりでしょうか。

わたくしをX字形に拘束し終えても、二人はベッドに上がる気配を見せません。ジニアが長机つまりベッドの下から、大きなボールを取り出しました。

どすん。床に落としましたが、鈍い音がして、あまり反発しません。トレーニング用のメディシンボールです。

それを腰の高さから、わたくしのお腹の上に落としたのです。

見えていたから、息を止めて腹筋を固めていました。それでも……

ぼすん！

「ぐぶっ……」

軟らかい衝撃がお腹全体にめり込んで、口からつばしぶきが飛び散りました。昨夜のバッグほど鋭くはないけれど、はるかに重い鈍痛です。

「言ってごらんなさいよ、お姉様って」

わたくしは、ジニアをにらみつけました。そうではなく目を伏せて、「許してください、

お姉様」-とも言えい、ジニアは満足するでしょう。

どうせ開けかけたドアだからと、わたくしはこれまで、-ンドン-ンドアをこじ開けられるに任せてきました。けれども。ここら辺が限界ではないでしょうか。これ以上に押し開けられたら、ドアそのものが壊れて、二度と閉じられなくなると-思います。さ-さ-やかなことでも抵抗したいし、さ-さ-やかなことだから、諦めてくれるのではないのでしょうか。

「なにい、その目つきは！」

今度は胸の高さから落と-されました。

どしん！

「んぐっ……」

ボールの半分ほどもお腹にめり込んだ——というのは、錯覚でしょう。

ジニアは、またボールを持ち上げて、今度は明白に投げ下ろ-しました。

どっしん！

「げふっ……！」

苦い水が口にあふれました。満腹するまで食べていたら、醜態をさら-したことで-しょう。

どっしん！

「あぐふっ……！」

吐きそうにはなりませんでした-が、ちろっ-と漏らし-かけて、あわてて下腹部を引き締めました。

「この、強情っ張りのビッチめ！」

ジニアがボールを頭の上まで持ち上げました。チャーリーが、慌てて止めます。

「やり過ぎだ、内臓破裂で殺してしまうぞ」

「死んだって、かまやしない」

「やめろったら。そう-なったら、きみが^{Sex Slave Student}性奴隷生徒に落と-されるんだぞ」

一瞬にして、ボールから空気が抜けたみたいになりました。

「そうよね。殺し-ちゃったら、三年掛ける二人分の恨みが晴らせないわね」

ちえつと舌打ちして、ジニアは低いところからボールを落としました。落とすというより、手に持ったままたたきつけて、バウンドしないボールをそのまま持ち上げて、またたたきつける。そんなことを十回くらいは繰り返しました。一回ずつの痛みは小さくても、ダメージが蓄積して行って、苦しいです。

でも、物理的な痛みよりも——わたくしは二つの事実に戦慄していました。

そのひとつは、殺意を否定しないほどに、ジニアがわたくしを恨んでいるという事実です。まるで理由が分かりません。

もうひとつは、彼女がその恨みを後回しにせざるを得ないほどに、性奴隷に落とされることを避けようとしたという事実です。ところが、わたくしは、その性奴隷なのです！

貴族令嬢がおびえを見せて良いのは（公認でなく秘めた想いでじゅうぶんですが）将来の旦那様と想い定めた男性の前でだけです。同格以上の人からは男女を問わず、所詮は小娘と思われますし、目下の者からは頼りないお嬢様と侮られます。ですから、わたくしは、平然を装いました。

それで誤解されたみたいです。

「ちえっ。やせ我慢してさ。効いてないはずがないんだ」

どすんと、最後の一発、また吐き気を催したほどきついのを一発たたき込まれて。でも、それでお仕舞いになりました——その夜は。

続きは次の夜ではなく、朝から始まりました。

わたくしは夜明け前には目を覚ましてしまいましたが、二人は目覚ましが鳴るまで熟睡していました。起きて、すぐに一人ずつ外へ出て——仮設トイレを使いました。チャーリーも、ジニアと同じくらいに長くかかりました。金網で陰茎を包まれているので、洗浄が必要なのです。もしかしたら、排尿だけでなく排便もしていたのかもしれませんが。他人の生理現象など、どうでも良いことです。

二人はパジャマから私服に着替えてまた制服に着替えるのを面倒くさがって、破廉恥な（チャーリーのほうは、むしろ滑稽です）制服を平然と身に着けました。そして、その後

は何もしませんでした。わたくしを解放しようとはしないのです。

しばらくは待ってみました。二人はわたくしを見下ろして、にやにやしています。わたくしが降参するまで放置する意図が見え見えです。

手錠を外しなさいと命じようかと思いましたが、拒絶される屈辱を味わう気にはなれませんでした。あれこれ考えて。朝食を犠牲にする決心に至りました。生徒が一斉にカフェテリアへ行くわけではありませんが、朝食の時間中は、男子寮がほぼ空っぽになります。その隙に洗車場を使えば良いのです。

ところが、それも出来ませんでした。朝食開始のチャイムが鳴ると、二人はわたくしを拘束したまま食事に行ったのです。バッグは残してありますから、食事の後に取りに戻って、そのときにわたくしを開放する魂胆なのです。

その通りになりました。制服を着るのは、わずか十秒ですが、すぐに校舎へ向かわないで授業に遅刻します。わたくしの学習はY8のずっと先まで進んでいるので授業を受けなくても差し支えはありません。それでも、欠席は論外ですが、遅刻もしたくありません。露出的な服装を恥ずかしがって、皆と顔を合わせるのをためらっていたと思われるに決まっています。困難が不可避であれば、敢然と立ち向かうのが貴族です。淑女の恥じらいよりは気高さを優先します。問題は、今日の夕暮まで生理的欲求を我慢するのは不可能だということです。昼食時に皆がカフェテリアに集まるのを待つしかなさそうです。それまでの四時間くらいは、耐えてみせますとも。

最初の授業は歴史です。チャールスとジニアは、やはり居ません。三十八人のY7生徒は常に三つのクラスに分かれてそれぞれの授業を受けるのですが、三人のSS生徒は、その一つずつに配置されているのです。雑用を言いつけるのに便利だからでしょう。二人が居ないだけで、この授業では基本クラスからの入れ替わりはありません。

最前列よりも黒板に近い位置にぽつんと置かれたわたくしの席、すでに^{punishment chair}受罰椅子の名前が定着しかけていますが、そこに座ろうとしたときです。ダン・カークが後ろから近づいてきて、いきなりスカートをめくり上げました。

「きゃあっ……」

淑女であろうと、いえ、淑女だからこそ、破廉恥なことをされたら、うろたえて悲鳴をあげます。でも、すぐに落ち着きを取り戻します。

「なにををするのですか、カーク。恥を知りなさい」

スカートの裾を元に戻して、たしなめました。

「ちええ、ぼくの負けだ。何も履いてないと思ったのにな」

わたくしの言うことなど聞いていません。誰かと（わたくしがパンティを履いているかいないかの）賭けをして、結果を確かめたのでしょう。

「どうかな。鎖みたいだったぞ。パンティとは言えないんじゃないかな」

レビー・ブロックスが応じました。賭けの相手なら勝っているはずなのに、おかしい主張です。

「それじゃ、前も見せてくれよ」

カークが、とんでもないことを言います。

「お断わりです。それよりも、謝罪が先ではないですか」

彼は問答無用とばかりに、手を伸ばしてきました。

「やめなさい！」

手を払いのけるだけでは怒りが治まらず、ぱちんと頬をひっぱたいてやりました。

そこへ、トリアス教師が入ってきました。

「何を騒いでいるのですか」

質問の形をしていますが、彼の目はわたくしをにらんでいます。

「先生。SS生徒のアイリスが、一般生徒のダンをたたいたのです」

告げ口をしたのは、キャティ・ストックです。

トリアス教師は、手にしていた教鞭を手の平に打ちつけました。教室ごとに教鞭は備え付けられているのですが、この方は自前なのです。

「よろしい。アイリス、尻を出しなさい」

「でも、先に無礼なことを仕掛けてきたのは、カークです」

「カークが、きみをたたいたのかね？」

「違います。彼は……」

「たとえ、たたかれて仕返しをしたのだとしても、非はＳＳ生徒にあります。まして、先に手を出すなど、言語道断です」

理不尽にも程があります。

「スカートをめくって、尻を出しなさい」

反論を封じ込むような威圧的な声です。

「トリアス先生」

キャティが、手を挙げて発言を求めました。

「先生はＳＳ生徒に、一般生徒の私と同じ罰を与えるおつもりなのですか」

そうでした。彼女はわたくしをたたいた罰として、スカートをまくられパンティを下げられて、お尻をたたかれたのでした。

キャティの言い分を聞いて、トリアス教師がうなずきました。

「もっともな意見ですね。では、アイリス。制服を脱いで裸になりなさい」

「いやですッ！」

叫んでいました。今だって、お尻どころか胸元も股間も容易にのぞき込まれてしまうような破廉恥な服装ですけれど、裸とは根本的に異なります。

「聞き分けがないのなら、キャティと同じように縛るしかなさそうだね」

トリアス教師がわたくしに向かって手を伸ばします。

わたくしは彼の手をかいぐって、教室から逃げ出しました。そのまま廊下を走り（股間に食い込む鎖なんか、どうでもいいことです）階段を駆け上がって、校長室へ行きました。ノックをすると、さいわいに校長は在室でした。

わたくしは、トリアス教師の非道を訴えました。カークの非礼も、昨日のフォーブス女史の高圧的な態度も。

校長は、わたくしの訴えにいちいちうなずいてくださいました。

「つまり。特別奨学生契約書に書かれていないあれこれを命じられて、それが契約違反だということだね」

なんだか論点をすり替えられたような気もしましたが、^{common law}自然法のことを最初に言ったのは、わたくしです。だから、「そうです」と答えました。

「分かりました。すぐに対処しましょう」

トリアス氏とフォーブス女史を呼んで嚴重注意——してくださるのでは、ありませんでした。校長は金庫から書類を取り出したのです。一昨日にわたくしが署名した契約書です。校長はペンを執ると、書類の下之余白に数行を書き加えたのです。

特別奨学生契約細則

5-1. 特別奨学生は、教師、生徒、その他学園関係者の命令に無条件で服さねばならない。

5-2. 上記に違反した特別奨学生は、命令者がその場で定めた体罰を受けるものとする。

わたくしは、信じられない思いで、凝視していました。

「こんなのって……」

ヒステリックになりかけて、深呼吸をしました。

「それでは——校舎の屋根から飛び降りろと命令されても、従わなければならないのですか？」

精一杯の皮肉のつもりだったのですが。

「そんな命令をされないよう、常日頃から従順にしていなさい」

真顔で返されて、わたくしは言葉を失いました。

「どうしても従いたくなければ、命令した者が気紛れに、あるいは腹立ち紛れに定める厳しい罰を受けなさい。たとえ縛り首にされようと鞭で打ち殺されようと、警察が介入しな

いように事を運んであげます」

明白な脅迫です。警告というべきでしょうか。

でも、不要のことです。わたくしに与えられた選択肢は、書き加えられた契約を順守して虐げられるか、反抗して理不尽な体罰を受けて（たぶん、その後で）力づくで従わせられるか——なのです。契約を破棄（出来れば、ですが）して無一文の素裸で学園を追放されたら、警察でさえ味方になってくれないとしたら、野垂れ死にするしかないのです。わたくし個人でしたら、恥辱に甘んじるよりも死を選びますけれど。父様と母様を悲しませてしまいます。などと、思い悩む必要は、実はありません。

わたくしは契約書をきちんと読み、細則について事前に確認しなかったのはうかつでしたが、自由意思で署名をしたのです。一般大衆ですら、契約は順守します。このわたくしが契約を守らないはずがありません。

「……分かりました。契約は守ります」

その言葉を口にするには、ありったけの勇気と自尊心を注ぎ込み、羞恥と屈辱を捻じ伏せなければなりませんでした。

校長は満足そうにうなずくと、早速にわたくしの覚悟を試しにかかりました。

「全裸で懲罰を受ける途中だったね。では、この場で準備をしろ」

制服を脱げという意味だと受け取りました。全裸で教室まで歩かせるつもりなのでしょうか。真意を探っても無駄です。わたくしは、どんな命令にも従うと誓ってしまったのですから。

わたくしは指だけでなく全身を恥辱に震わせながら、制服を脱ぎました。わずか十秒で着れるのに、一分も掛かりました。襟元にあるファスナーの金具を、うまくつかめなかったのです。

「腹のあざは、どうしたんだね？」

「ジニアが、メディシンボールを何度もわたくしのお腹に落としたのです」

客観的事実だけを告げました。お兄様お姉様と呼ぶのを拒んだら拷問紛いの事をされた

——なんて告げ口はしません。主人が使用人に虐められるなんて、恥の上塗りです。

「なるほどね」

校長はうなずいただけです。それから、立ち上がって。

「では、教師が性奴隷生徒^{Sex Slave Student}をどのように扱うか、視察しましょうかね」

ぱちんと、お尻を強くたたいてわたくしを廊下に押し出しました。そして、お尻を押してずんずん歩きます。わたくしも、股間の鎖の刺激を不快に思いながらも早足で歩かなければなりません。

授業中の上級生（Y7は、セカンダリーの最下級です）が廊下に目を向けないことを祈りながら、教室へ戻りました。祈りは神様に聞き届けてもらえなかったのですが、何も騒ぎは起きませんでした。起きたのは、Y7の歴史の教室です。

わたくしが全裸で（正確には股間をただ一本の鎖で隠して）戻ってきたものですから、男子は総立ち。変な意味ではないです。女子は赤くなった顔を露骨に背けています。

「よし。パンティは履いてるぞ」

「あんなの、パンティじゃないよ」

賭けをしていた二人が激論です。

わたくしは、心臓を今にも捻じ切れそうです。腰の奥がすごく熱くなっています。血液が沸騰するほどの怒り——かもしれません。女は子宮で物を考えるといいます。それに、裸が恥ずかしいのは性的な意味合いが濃厚です。だから、子宮が羞恥にもだえているのだと思います。

「静かに。校長先生がおいでなのだぞ」

ぴたりと鎮まりました。彼の頭に悪戯で黒板消しを落としたY11の生徒が上位十パーセントの成績だったのに留年させられたという伝説があります。

「アイリス・フッドが着けているのは貞操帯です」

これは新型のペンです——と同じくらいに淡々と、校長が説明します。

「彼女は、まだ処女です。SS生徒とはいえ、処女性は守られねばなりません——その必

要が生じるまでは」

構文としては「その」は処女性を守ることを指していますが、それでは重言になりますし、文章として不自然です。わたくしは、大変に不安な気持ちになりました。けれど、文法上の問題を検討している暇はありませんでした。

「それでは、守られていない箇所は、守らなくていいんですね？」

挙手をしてから立ち上がって質問したのは、アル・ブライトンです。国語ではわたくしと学年トップを競っています。わたくしの不安を増大させる発言です。もっとも、ことに男子の大半は、二人の言葉の意味が分かっていないようです。

後ろにいる校長が大きくうなずいたのが、気配で分かりました。

「きみたちくらいの学年になれば、語られない言葉を理解する能力も求められますね」

遠回しな肯定です。

「アイリスのせいで、時間を無駄遣いしています。^{Mr. Trious}トリアス先生、彼女への懲罰を済ませてしまいなさい」

わたくしは教壇の上に、黒板に向かい合う形で立たされました。両手は腰の上で組まされました。姿勢がぐらつかないようにと、足を一フィートほど開かされました。別に平気です。生徒からも教師からも、見えているのはわたくしの背中（と、お尻）です。

トリアス氏の持つ教鞭が、わたくしのお尻をすっとなでて……

ぶゅん、バチイン！

「あっ……」

激痛が爆発しました。でも、声を漏らしたのは痛みのせいではありません。それは覚悟していました。たたかれた瞬間に、堤防が決壊しそうになったのです。危うく踏みとどまりましたけど。

「待ってください……」

ぶゅん、バツデイン！

「ああっ……！」

一発目より強い痛みを感じた瞬間に、堤防が決壊しました。奔流はさらに堤防を突き崩して……止まりません。

「いやああっ……」

わたくしは両手で顔をおおって、みずから作り出してしまった水たまりの中に、膝を突いて——へたり込んでしまいました。昨日の夕方からの貯水量はダムの容量を超えています。その一部を目からもあふれさせながら、わたくしは水たまりをさらに大きく拡げていきます。

「うわっ……汚い」

「いやだわ。恥じらいってものがないのかしら」

「貞操帯が無くたって触る気にもなれないね」

聞こえてくるのは嘲笑ばかり。同情の声はありません。

「みなさん、隣の教室へ行きなさい」

「まあまあ、トリアス先生。この時限は、行儀作法の勉強に振り代えましょう」

「行儀作法ですか？」

「左様。将来は支配階級に属する生徒たちです。最下層の者を如何に仕付けるかを学ばせる良い機会です」

校長は教壇の奥にある校内電話を取り上げました。

「バケツを二つ持って来てくれ。水を入れたのと空のと。それから、使い捨て^{waste cloth}の布とハンドブラシを」

わたしは、不始末にどう対処して良いか分からず、水たまりの中にへたり込んだままです。立ち上がると、いっそうからかわれると思ったので、気持ち悪いのは我慢していました。

五分も経たないうちに、昼間は常駐の雑役夫が注文の品を持って来ました。生徒が廊下で受け取ってくれたので、わたくしの裸も無様な姿も見られずに済みました。

「それで後始末をしなさい。ワックスは、後で業者を呼びます」

自分のしでかしたことですから、やむを得ません。布で身体を拭いてから、床の水を布に染み込ませて、空のバケツに入れます。それから、ハンドブラシを水でぬらしては、床をこすります。柄の付いたデッキブラシなら立って作業出来ますが、ハンドブラシですから四つんばいにならなければなりません。立って全身をさらすのと、四つんばいでお尻を集中的に見られるのと、どちらが恥ずかしいかは——どっちも恥ずかしいに決まっています！

この出来事があって以来、キャティはわたくしのことを“Piss Iris”と呼ぶようになりました。“Piss”は小水を意味する四文字言葉です。“Sexpert”とか“Slave”とか呼ばれるより、はるかに屈辱です。

——わたくしへの迫害は、まだまだ続きます。

午後はY7全体、男子二十五名と女子十三名が合同の体育です。体育には、特に服装規定はありません。運動クラブに所属している生徒の中には、そのユニフォームを誇らしげに着用する人もいます。わたくしもジニアもチャーリーも、これまでは短めのハーフパンツとTシャツで授業を受けていましたが、今日の二人は、トレーナーを着ています。普段が露出過多なので、その埋め合わせのつもりでしょう。わたくしは……股下ゼロインチで胸元も脇も緩いジャンパースカートしか、着るものがありません。そんな姿で列に並ぶのは、(もはや、これ以上ないとは形容しませんが) 屈辱です。

でも、体育教師のジャン・スヴェン氏とアリス・プレトリカ女史は、救済策を用意してくれていました。隔離策といったほうが適切かもしれません。

「あなたたち三人は、敷地内を壁に沿ってランニングしていなさい」

何周とも指示されませんでしたし、三人居る助手の一人をコーチに付けてくれるわけでもありません。他の生徒の目障りにならないよう、小体育館から追い払われたのです。

ちょっと走って、後は建物の陰にでも隠れて遊んでいればいい——とは、チャーリーなら考えそうなことです。

「ジニアがペースメーカーになれよ。ぼくは後ろから^{My Lady}お嬢様を追いたてるから」

この「お嬢様」には、嘲りの響きがありました。それどころか、かれは手近の木から、二フィートほどもある枝を折り取ったのです。葉っぱをむしり取って、ひゅんっと空気を切り裂きました。

わたくしは、屈辱と怒りとで、顔から血の気が引きました。

「ちゃんと一列で走ろうよ」

わたくしのお尻を押して、ジニアの五フィート後ろへ並ばせました。悔しいけれど、逆らえません。逆らえば、枝の筈なのでしょう。

「よーし。それじゃ、^{Ready, Go}用意ドン！」

わたくしは、よたよたと走り出します。使用人から笞でたたかれる屈辱を免れるには、自分の意思でランニングを始めるしかありません。教師に与えられた課題なのですから。

走り始めてすぐに、予期していたこととはいえ、鎖が厳しく女性器に食い込んできます。小陰唇にの裏側をごりごりと擦ります。それだけでなく、肛門にまで食い込んでくるのです。

ジニアは女性器の封印は免れていますが、肛門はわたくしと同じようにこねくられているのでしょう。だから、腰を動かさず、太腿から先だけを動かす、男性のようなフォームになっています。わたくしは、彼女よりもっと不様な走り方をしているのだらうと思います。

ジニアが振り返って。わたくしが遅れずに走っているのを確かめると――歩度も歩幅も大きくしました。まるで長距離競争みたいな速さです。

遅れまいとして大きく足を踏み出すと――したたかに股間をえぐられました。その鈍い痛みもですが、鎖の環に陰核をこね繰られて、太い稲妻のような衝撃が走りました。

「あっつ……？！」

思わず立ち止まりかけると。

バッチイン！

お尻をしたたかにたたかれました。下からすくい上げるようにして、スカートの上から

ではなく直にたたかれたのです。

「きゃっ……」

悲鳴を飲み込んで、わたくしは駆け出します。

今の一発は、トリアス教師の教鞭よりも痛いくらいでした。

鎖が痛くて、ちょっとでもジニアに遅れたら……

バッチイン！

すかさず木の枝でたたかれます。もしも、授業が終わるまでたたかれ続けたら、わたくしのお尻は腐った桃みたいになってしまうでしょう。

わたくしは歯を食い縛って、ジニアを追いつけます。陰核に走る稲妻のような感覚が励みになっていたのは、認めざるを得ません。

そうして、十分でしょうか二十分でしょうか。お尻を笞打たれることなく懸命に走っているうちに、苦痛が苦痛でなくなってきたのです。いえ、痛いことは痛いのですが。擦れている小陰唇よりもずっと奥のほうに、熱いうずきが生じたのです。快なのか不快なのか、よく分かりませんが、陰核に落ち続ける雷を際立たせるような感覚です。校長に引率されて、校舎を大回りして物置小屋へ初めて行ったときと似ています。わたくしは、むしろ後ろからジニアを急かすくらいの速度で駆け続けました。

バッヂインと、強くお尻をたたかれました。瞬間、これまでとは比べ物にならないくらい稲妻が背骨を駆け上がりました。

「止まれと言ってるのが聞こえないのか」

聞こえませんでした。我に還ってみると。裸足で地面を何十分も走っていたせいで、足の裏が擦り剥けていました。

これは、はっきりと不快な痛みに、わたくしは両手両膝を突いて、しばらくは立ち上がれませんでした。なんだか、とても虚しい気分です。

荒い息を吐きながら、考えました。さっきの感覚は、絶対に快感ではないはずです。だって——美味しいお菓子を夢中で食べて、直後に（体重を考えて）やましい思いになるこ

とはあっても、こんなふうに、何もかもどうでもいい、父様のことも母様のことも気にならないなんて、そんな投げやりな気持ちにはなりませんもの。

「ちええ。こいつ、処女のくせして、とんでもない淫乱だね。マ^{c u n t}ンコをこれだけ鎖でしごかれてケ^{a s s}ツを鞭で打たれて、逝^{c o m e}くんだもんな」

逝くというのが、性的快感が絶頂を迎えるという意味だとしたら、チャーリーの言葉は間違っていあす。

わたくしの女性器は、分泌液にまみれていますが、これは鎖の物理的な激しい刺激から保護するための、身体に備わった機能に過ぎません。性的快感がクライマックスに達すると深い満足が得られると、家庭の医学書には書いてありますが、わたくしが感じているのは悔しさばかりです。

ですが、チャーリーの勘違いは好都合でした。ランニングのペースを落として、ジョギング未満、ぶらぶら歩きに近いものになったのです。もちろん、わたくしに不満はありませんでした。ただ、股間の違和感が減じると、擦り剥けた足の裏の痛みが強くなって、ただ歩くだけでも、ハイペースで走っていたときよりもつらく感じたのは事実でした。

体育が終われば、今日の授業はおしまいです。助手のひとりが来て、みんなの居る体育館へ戻る必要は無いと告げましたので、そのまま物置小屋へ戻りました。

夕食まで時間を潰してから——二人は教科書もノートもあるのだから、復習をきちんとすれば良いのに。カフェテリアの裏手で食事を恵んでもらって。この言い回しを使うときには、胸の中に氷塊が生じます。わたくしのトレイも、二人と同じ分量に戻っていたので、ほっとしました。お腹が空くのくらいは平気ですよ。でも、栄養失調になってプロポーションが崩れるのは嫌です。こんなにしょっちゅう裸をみられるのでしたら、なおさらです。だから、しっかり食べました。

そして、夜になりました。「恐怖の」などとは形容しません。メディシンボールをお腹に落とされるくらい、全裸を強いられてお尻を……思い出したくありません。

ところが、今夜は様子が違いました。わたくしの両手を広げて拘束すると、足首に掛け

るはずの手錠を、手首の手錠と同じ側に付け替えたのです。

二人はわたくしの足首をつかんで脚を折り曲げようとします。

「何をするの……説明しなさい」

やめろと命令しても無駄でしょうから、妥協したのです。ところが、二人は聞こえない振りをします。

「やめなさい！」

脚の力は、腕よりずっと強いのです。二人掛けでも、思い通りにはさせません。

二人は、すぐに手を放しました。諦めた——のではありませんでした。

チャーリーに左右の乳首をつねられました——などという優しい拷問ではないです。人差し指の先と親指の爪とで乳首を挟んで、爪を食い込ませながらひねるのです。

「痛い！ 痛い痛い……やめて……やめなさい」

やめてくださいと懇願しそうになって、危うく踏み留まりました。けれど……また足首をつかまれても、もう逆らいませんでした。

足を頭の上まで引き上げられ、左右に開いた腕に重ねて手錠を掛けられました。上からみても横から見てもV字形ということです。

チャーリーが、股間を縦に割る鎖を下へ引っ張ります。

「んんっ……」

陰裂にいつそう食い込んでくる痛みと、陰核がさらにこねくられる（苦痛とは言い切れない）感覚とで、声が漏れてしまいました。別に平気です。

「駄目だ。どうやっても横へずらせない。鎖の環から突っ込むしか出来ないよ」

「それじゃ、柄を入れられないじゃないの」

「ビットのほうで我慢しろよ」

「ちえええ」

ジニアが長机の下のカラボックスからドライバーを取り出しました。彼女への実験に使ったものです。

「ほんと、わたしと同じ目に遭わせてあげたっただけ……」

ジニアがドライバーを私の目の前に突きつけました。先端のX字形にとがっている部分に目玉を突き刺されそうです。

「絶対に処女膜を破るなって、校長先生に言われてるから、こっちで勘弁してあげる」

ジニアが、私を挟んでチャーリーの向かい側にしゃがみました。

硬く細く冷たい感触が、肛門をつつきます。何をされるのか……は、すぐ分かりました。

冷たい感触が肛門に突き刺さりました。ずぶずぶと押し入ってきます。

「そんな……」

肛門は排せつ器官です。そこに異物を挿入するなんて、考えられないことです。痛みはたいしたことはありませんけれど、気持ちが悪いです。

「ちっとも手応えが無いわ。平然としてるし」

ぐっと、鎖が肛門に押しつけられました。つまり——鎖の環の間からドライバーを肛門に押し込んで、付け根の部分が鎖を押しているのです。

「こんちくしょう。いっそ、こいつでマンコをかき回してやりたい」

肛門が上下左右に引っ張られ、同時にお腹の中で異物感がうねくります。ジニアがドライバーをこねくっているのです。

こんなことをされたって、平気です。排せつ器官をいじられている恥ずかしさは著しいですが、皮が剥けた足の裏のほうが、よほど痛いんです。でも……まったく別の感覚が急速に膨れ上がってきました。

「チャーリー、手錠をはずしなさい」

「なにを偉そうに命令してるんだよ」

「外しなさいったら。今すぐブースを使いたいのです」

「ぼくたちは校長先生ほど優しくはないよ。お漏らしなんかしたら、君の制服で拭き取らせてやるぞ」

「違います！」

恥ずかしい言葉は口にしたくないし……

「鎖を着けさせられてからずっと、出していないのです。今の刺激で……小屋から出してくれないと、臭いがこもりますよ」

「うへえ……」

意味が通じたようです。

「中止だ、中止。部屋の中でくそをされちゃ、たまらないや」

ジニアも同意見のようです。ドライバーを抜いて身を引きました。

手錠を外されると、わたくしはわずか十秒を惜しんで、裸のまま隣の仮設トイレへ駆け込みました。制服を汚したくないという冷静な判断もありました。

便座に腰掛けて。今にも出そうだというのは事実ですが、出すまでには葛藤もありました。小水のほうは慣れてしまいましたけれど、下着を履いたままだなんて（記憶はありませんけれど）おむつじゃあるまいし。

きちんと出すには、いきまなければなりませんでした。だって、裏ごしをするようなものなのですもの。

出し終えると、お腹はすっきりしましたがけれど、わたくしには何の責任もないというのに——自己嫌悪に陥りました。

お尻にねっとりとした感触が絡み付くのを意識しながら、洗車場へ行きました。いつもよりもずっと入念に、チャーリイにされたように鎖を前後に引っ張り左右にこねくって、徹底的に汚れを洗い流しました。やはり、制服を着なかったのは正解でした。

これまでは、ただ後始末に局部を洗っていただけなので、もう三日もシャワーを浴びていません。男子寮の窓の明かりは点いていますが、窓際に人影はありません。ついですから、全身に水を浴びて、手の平で肌を擦って汚れを落とします。髪も、ずっと編み下ろしにしたままで不潔ですから、ほどいて洗いました。髪の毛のお手入れは、諦めるしかありません。自分で編み下ろしにするのは苦手ですし、別の思惑もあったので、ツインテールにしてみました。おさげを前に垂らすと、うまく乳房を隠せます。これで、いつ裸にさ

れても平気です——なんて強がってみて。まだまだ、わたくしはへこたれてなんかいないんだと、自分を励ましました。

小屋へ戻ると、手錠は元の形に戻されていました。さっきのみつともないV字形に比べれば、手足をX字形に広げるなんて、恥ずかしくもなんとも……ありますけれど、仕方ありません。あれこれ指図される前にあお向けに寝て、手足を手錠の位置に置きました。

三日目ともなると、破廉恥な格好をクラスメイトの目にさらすことにも抵抗が薄くなってきます。気高さは、服装に左右されるようなものではありません。どのような目に遭わされようと、き然と振る舞うことです。逃れられない運命は従容と受け容れることなのです。

とはいえ、その運命は日を追って苛酷に屈辱的になっていきます。

今日は授業が始まる前に、合同授業の為の大教室にY 7の全員が集められました。三十五人の一般生徒は普通に（仲良し同士がくっついて）スクールデスクに座って、わたくしとチャーリーとジニアは、教壇の前でみんなと向かい合わせに立たされました。その両側に校長のキプリング氏と校医のフォーブス女史が立ちます。異例の顔触れです。

「まもなく学年末試験が始まります」

校長が直々に三十五人に向かって語り掛けます。

「これからは、試験成績の上位者には賞品を出します。いずれはセカンダリークラス全体に広がりますが、今回は試験的にY 7生徒だけを対象にします——賞品の数も少ないことですから」

みんなは、あまり興味なさそうに拝聴しています。記念メダルか賞状か。どうせ、たいした物ではないでしょう。学年末の試験成績は、ほとんど意味を持たないというのも無関心の一因でしょう。進級さえできれば良いのです。この国では、第一にY 1 3終了時の全国統一試験、第二がY 1 1のそれです。

「商品は、ここに立たせているS S生徒との一日デートの権利です」

教室がざわめきました。

「男子生徒は上位四名に、アイリスかジニアのどちらかと学内に限ってですが、デートす

る権利が与えられます。女子生徒は上位二名がチャーリーとです」

生徒たちの視線が、わたくしに集中しました。当然ですわね。子爵令嬢をエスコートする機会なんて、平民には絶対に巡ってこないのですから。

「デートの間も、三人が着用する貞操帯を外すことは許しません。しかし、それ以外のことであれば……」

校長が、そろえた指で女史を指し示しました。

「ここに居る校医が、うまく処置をしてくれることでしょう」

十人くらいの男子生徒が、どよめきました。ぽかんとしている子のほうが多いです。女子生徒の反応は、もっと複雑でした。数人がチャーリーに視線を転じて物欲しそうな目つきになり、半数は露骨に顔をしかめて——残りの数人は、きょとんとしています。

理科系クラスのエド・フォークスが手を挙げました。

「校長先生。ジニアは、その……ええと……アイリスとは違う形の鎖を身に着けていて、前側は……要するに……防護されていませんが……つまり……」

「私の言葉をどのように理解するかは、個々の生徒に委ねます」

言いくさそうにしているエドを校長が遮りました。

「ただ、現在の彼女にセキスパートの役割を求めるのは無理です。しかし、一時的なセキスパートナーくらいは務まります」

わたくしには校長の言葉を理解できませんでしたが、彼が確信を持って断言しているのは分かりました。

エドは驚いた顔で校長を見上げて、それから肩をすくめるのとうなずくのとを同時にやってのけてから着席しました。

他に質問が無いと見て取ると、校長はわたくしを名指ししました。

「全員がそろっている場で、きみに申し渡しておく。今後は、教師に向かってMr. とかMiss と呼び掛けるのは禁止します。他の生徒と同じ、いやそれ以上に、必ずSir とMa'amを使いなさい。そして、生徒に対しては礼儀正しく家名に敬称をつけるのです。

分かりましたね」

貴族とはいえ、教わる立場のわたくしが教師に向かってMr. やMissを使っていたのは不適切だったかしらと、ほんの少しだけ反省しました。ですから、思い切りへりくだった返事をして差しあげました。

「はい、^{Sir Kipling}キプリング先生——^{My schoolmaster}校長先生様」

校長は眉をひそめましたが、何も言いませんでした。

そこで一時限目の予鈴が鳴ったので、集会はお開きになりました。

わたくしは、複雑な想いを抱えました。同年令で、まだまだ子供っぽいとはいえ、男性にエスコートされるなんて、初めての経験です。ちょっぴりわくわくします。でも、わたくしが賞品扱いされたことには、憤慨します。分かっています。特別奨学生契約細則で、わたくしはどんな命令にも服従しなければならないのです。

実は、この細則は——私のと他の二人のとは、異なっているようです。というのも、大教室から出て行きしなに、エドがジニアを後ろから抱きすくめて、耳元に何事かをささやくのを目撃したのです。

ジニアはエドを振り払って、きっぱりと言いました。

「そういうことは、校長先生を通して言いつけてください」

彼女には、なんらかの拒否権が与えられているようです。同じSS生徒なのに……ああ、そうでした。

二人は“Sexpert Scholarship Student”で、わたくしだけは“SEX SLAVE STUDENT”なのでした！

なぜ、わたくしだけが差別されるのでしょうか。わたくしだけが事実上の孤児で無一文なせいだからでしょうか。それでも、わたくしは貴族——あの二人よりずっと高貴な人間のはずなのに。

その日は、服装とか席の配置とか無遠慮な視線とかを別にすれば、それ以上の屈辱は受

けませんでした。わたくしが生徒からの（細則を字義通りに解釈するなら、たとえY1であっても）命令に無条件に服従しなければならぬということは、とっくに知れ渡っています。掲示板に試験日程と共に契約書の拡大コピーが張り出されているのですから。

女子が何でもいうことを聞くとしたら、男子がどんな命令を出すか、容易に想像がつかれます。けれど、その危惧はさいわいなことに裏切られたのです。

ひとつには、半信半疑だったのでしょう。スカートをまくれなんて命令して拒絶されたら、その男子の面目は丸潰れです。

そして、もっと大きな理由は——あの掲示は本当なのかと、こっそり尋ねてくる男子も何人かいましたけれど。すごく他人の目をはばかりているのです。特に、女子を。

落ち着いて考えれば、自明のことです。変態的なことを要求する男の子に好意を持つ女の子はいません。わたくしに変態的なことを仕掛けたら、そのときは知的好奇心だろうと変態的欲求だろうと満たせるでしょう。その代わり、卒業するまで女子から総スカンを食うのです。いえ、卒業で帳消しにはなりません。

この学園に在籍する生徒の大半は、将来の国家を背負って立つ人材です。政治的キャリアでも財界での立場でも、スタート時点でライバルに大きな差を開けられていることでしょう。

もちろん、誰も見ていないときに物陰に引っ張り込んで——ということは有り得るでしょう。そういう意味で、この恥辱極まりない股間の鎖は必要最小限の防衛線となっています。絶対に感謝なんかしませんけれど。

でも、脅威は男子だけではなかったのです。それを思い知ったのは、週明けのことでした。

その前に、この週末がどれほど惨めだったかをお話し致しておきます。カフェテリアでわたくしたちの面倒をみってくれるのは、一部の限られた人間のようです。いつものコックが、週末は不在でした。それで、金曜日の夕食のときに、二日分の保存食と飲料水をまとめて与えられたのです。翌朝分のサンドイッチはともかく、その後はシリアルと生の食パ

ン（ジャムとバターはありました）と缶詰とで過ごさなければなりませんでした。

食生活に不満をいうのは、間違っています。可能であれば、腕の良いコックに上等の食材を使わせて美味を追求するのはかまいませんが、そうでなければ、一般大衆と同じ食事に甘んじるのも高潔というものです。

週末の二日間でわたくしが持て余したのは——退屈でした。だって、手元には本も無ければ手芸用品も無し。破廉恥な服装では、美術部でデッサンどころか、散歩にさえ出掛けられません。

チャーリーとジニアは、ポータブルラジオで下品な番組ばかり飽きもせず聞いていましたけれど、わたくしには耐え難い騒音でしかありませんでした。

かといって、一日じゅう物置小屋にこもっていたわけでもありません。日曜の午前中は小屋の裏で過ごしました。ふたりに引きずり出されたのです。制服が汚れるからと親切にも全裸にしてくれた上でわたくしを地面にうつ伏せにさせて、右手首と左足首、左手首と右足首を手錠でつないで放置したのです。手錠の鎖は長目でしたから、そんなに窮屈には感じませんでしたけれど。

昼食前には小屋の中へ戻してもらえました。ジニアはわりと上機嫌でしたが、チャーリーは膨れっ面をしていました。男性器を金網で包まれていることと関係がありそうだと、わたくしにも推察できました。

週明けのお話をします。歴史の授業が始まる前のことです。

これまでは、わたくしに忠実に（ときとしてジニアよりもかいいいしく）仕えてくれていたマリー・デストンが、わたくしがさらし台に座るのを待って近づいて来て、剥き出しのキャンバスシューズを突きつけたのです。

「あなた、いつも裸足でしょ。可哀想だから、これを施してあげるわ」

ずいぶんと履き込まれたお古です。それだけなら、言葉遣いを無視して、好意かもしれないと勘違いしていたでしょう。ところが、そのシューズの側面には、フェルトペンで大きな文字が書かれていました——“Sex Slave”と。

「わたくしを辱めるつもりなのですか？」

声がとがってしまいます。それを聞きつけて、マリーの親友の（ということは、わたくしの親衛隊でもあった）ライラ・ロイヤーまで近寄って来ました。

「とんでもない。無一文のあなたに施しをしてあげているのよ。さあ、お礼を言ってから受け取りなさい」

マリーはシューズの裏側を向けて、わたくしの顔に押しつけようとしてました。

「やめて！」

わたくしはシューズを払いのけました。マリーは大げさに腕を振り回して——後ろに居たライラの顔に手の甲をぶつけました。

「きゃあっ、痛い！」

ライラが頬を押えて転びました。

そこヘトリアス氏がやって来たのです。

「先生。アイリスが、私の顔に靴をぶつけました」

訴えたのはライラです。

「またしてもきみか。ＳＳ生徒の分際で一般生徒に危害を加えるとは」

バッチイン！

手にしていた教鞭を、わたくしの机にたたきつけました。

「罰を与えねばならんな。そこに立って裸になりなさい」

「違います。マリーが……」

バッチイン！

「言い訳をするな。それから、一般生徒の名前を呼び捨てにするんじゃない」

「弁解させてください。デ^{Miss}ストンさんが……」

バチン！

頬を教鞭でたたかれました。

「……………」

悪いのはわたくしだと、トリアス氏は決めつけています。彼の後ろで、マリーとライラが意地悪に微笑んでいます。

わたくしは、ようやく悟りました。すぐに教鞭の罰を与えるトリアス氏の授業を狙って、わたくしを陥れたのです。

ぎゅうんと捻じられるような悔しさが胸に込み上げてきます。腰の奥が、怒りで熱く震えています。また、クラスメイトの前で全裸にされて、お尻を教鞭でたたかれるのです。

「トリアス先生」

キャティの声を聞いて、不安が募ります。スカートをまくるだけでなく全裸にさせるように提案したのは彼女でした。

「前の懲罰でも、^{P i s s}アイリス^{I r i s}お尿様はちっとも反省していません。お尻たたきではなまぬるいと思います」

トリアス氏は、即座にうなずきました。

「よろしい。とにかく、服を脱ぎなさい」

これは、懲罰がどうこうという以前に、命令です。服従しなければ、この場の思い付きで、どんなに恥ずかしい罰を与えられるか知れたものではありません。わたくしは立ち上がって、ジャンパースカートを脱ぎました。背中ファスナーを下げるのに三十秒以上も掛かっては、指が震えているのをみんなに知られてしまいます。全裸になるよりも、そのほうが恥ずかしいくらいです。

命令された通りに制服を脱いでも、懲罰は始まりませんでした。

「その姿で校長室へ行って、貞操帯の鍵を借りてきなさい。校長が不在だったら、スペアキーはフォーブス先生がお持ちです」

わたくしは全裸で校長室へ向かわざるを得ませんでした。さいわいに校長は在室で、一階まで下りて医務室まで行かなくて済んだのですが——校長が教室までついて来ました。わたくしがどんな罰を受けるか、見物するつもりです。そうではなくて、なまぬるい懲罰だったら、トリアス氏を指導するのかもしれませんが。

トリアス氏はわたくしの貞操帯を取り外しました。四日ぶりに、股間から異物の刺激が消え失せたのです。なんだか物足りない……なんでもありません。

「黒板を背にして立ちなさい。両足は一フィート開いて。両手は頭の後ろで組んでいなさい。懲罰が終わるまでに姿勢を崩したら、手足を縛りつけてからやり直します。それとも、最初から縛っておいてほしいかね？」

一瞬だけですけれど、わたくしは迷いました。何をされるのか分かりませんが、お尻をたたかれる以上に厳しい罰に決まっています。身動きしたら罰をやり直されるくらいなら——いいえ、縄目の恥を受けるなんて、青い血が許しません。

「必要はありません」

わたくしはきっぱりと言って（語尾が震えたりはしていませんよね）、命じられた姿勢を取りました。

トリアス氏が教鞭の先で、わたくしの脇の下をつつきました。くすぐったいです。

「無精ヒゲが見苦しいね。明日の朝までに処理しておきなさい」

ヒゲではないです。

「どうした、返事をしないのか。反抗するのか？」

わたくしの言い分は聞いてもらえないと、とっくに学習しています。

「……はい」

「はいだけでは、分からない。きちんと復唱しなさい」

教鞭の先でしつこくつつきながら、追究してきます。くすぐったいのが、場違いに思えてきます。

「明日の朝までに、脇毛を処理しておきます」

意固地になって、吐き捨てるように復唱しました。

「私は無精ヒゲと言いました。脇だけに生えているのですか？」

「……………」

陰毛まで処理をしろというのです。かまいません。こんなもの、一年前には生えていな

かったのです。ジニアに比べたら、ずいぶん薄いし細いです。無くたって、わたくしの尊厳をちっとも傷つけはしません。

「明日の朝までに、脇毛と陰毛を処理しておきます」

「よろしい」

トリアス氏（だけでなく校長まで）が、満足そうにうなずきました。そして、さらにわたくしを——言葉ではなく器具で、なぶります。

教鞭の先が肌をなでながら胸元へまわってきて、半割りオレンジの先端の突起を——包むように円を描いたり押し込んだりします。自分で触れるのとは違って、くすぐったいのですが、脇の下とはくすぐったさが違います。くすぐったさの中に、鋭い稲妻が奔るような感じです。刺激を受けて、乳首が硬くとんがっていきます。真冬に暖房の効いていない部屋で着替えるときと同じです。

「^{S i r}先生、これが罰なのですか？」

そうではないと、わたくしにも分かっています。股間の鎖を外したのだから、そこをたたくに決まっています。もっとも、乳房をたたかれるよりは痛くないと思います。ブラジャーを着けていないときに、ちょっと机の角にぶつけるだけで、鋭い痛みが走りますが、股間だと、それほどではありませんから。

「罰を受ける心構えをさせているのです。余計なことは言わないでよろしい」

教鞭の先が乳首から離れた——次の瞬間、ぴちっと弾かれました。

「あうっ……！？」

机の角にぶつけたところではない激痛に、危うく手で胸をかばうところでした。両足を踏ん張り肘を張って、姿勢を崩さないようにしました。

教鞭は肌をくすぐりながら下へ動いて、おへそは素通りしてくれましたが、陰裂の上端で止まりました。

教鞭は大陰唇の輪郭を上から下に、下から上になぞりました。それだけでも、脇の下よりもくすぐったいの。陰裂を浅くうがつと、陰核を探り当てて、ほじくり出すように教

鞭の先端が動きます。

「ひゃんっ……」

鎖の環に刺激されていたときのような甘い稲妻が腰の奥まで突き抜けます。

「これから懲罰を受けるというのに、エロチックな声を出すとは、心構えがなっていませんね」

トリアスは、いっそうしつこく教鞭をこねくりまわします。こんなやつに敬称なんて付けてやりません——心の中では。

教鞭がわずかに下へ動いて、陰裂の奥へと侵入してきました。

「それは、やめておきなさい」

校長が制止してくれました。

「万一にも処女膜を傷つけては、あの方を失望させます」

どういう意味でしょうか。教鞭が、また陰核をなぶり始めたので、稲妻に邪魔をされて何も考えられなくなります。

「これくらいは、よろしいですか」

ごく浅くですが、また陰裂の内側をつつかれました。そして、やっと教鞭が肌から離れたました。

トリアスは教鞭を眺めてから、にやりと笑いました。

「こんなにもぬれています。実に淫乱なビッチですな」

校長も教鞭の先端に目を近づけて、トリアスと同じ表情を浮かべます。

「教師と生徒に裸を見られているというのに、ちょっと性器をいじられただけで発情するとは——性奴隷の素質じゅうぶんと褒めてやらねばなりませんね」

ちょっとじゃないです。あんなにしつこく刺激されたら、気持ち悪くたってぬれてしまいます。生理的反応です。いえ、それは小さな問題でしかないのです。

わたくしが淫乱ですって？！ 性奴隷の素質があるですって？！

どのような罰を追加されようと、断固としてたしなめるべきだと思いました。青い血に

対する侮辱です。取るに足りない平民の戯言だと聞き流す寛容を発揮すべきではありません。でも……鞭で女性器をたたかれるだけでも過分の恐怖なのに、それ以上の迫害を招く行為は、ためらわれます。ああ、なんと弱気になってしまったのでしょうか。

「では、罰を与えます」

ためらっているうちに、機会を失ってしまいました。

ひゅん、バチン！

「痛いっ……！」

股間で激痛が爆発しました。乳房を机の角にぶつけるところではないです。反射的に股間をかばおうとした手の動きは、強い意志の力で封じ込めましたが、内股になって腰をよじるのまでは止められませんでした。

「ちゃんと立っていなさい。本当に縛りつけるよ」

わたくしは足を踏ん張りました。脅かされたからではありません。それが、(理不尽な)罰を受ける姿勢だからです。

ひゅん、バチン！

「くっ……」

かろうじて踏み堪えました。

教鞭が伸びてきて、激痛が爆発した位置をつつきます。左右の大陰唇に一発ずつだったようです。

ずっと教鞭が引かれました。三発目が来ます。

ひゅん、ビシイッ！

「あがつ……！」

それまでの二発とは比べものにならない激痛です。陰裂の中心を打たれたのでしょう。腰全体が砕け散ったかと思いました。床に膝を突いてしまいました。頭の後ろで組んだ手を動かさなかったのは奇跡です。

「立ちなさい」

姿勢を崩したから縛る——とは、言われませんでした。わたくしは氣力を振り絞って立ち上がります。いっそ、泣き叫んで赦しを願って。もちろん聞き入れてもらえずに、惨めに縛りつけられて。ああ、そうなったら、どんなに楽でしょう。強い意志の力で身動きを押さえ込む必要がなくなるのですから。

でも、それでは本物の奴隷になってしまいます。それがどんなに理不尽であろうと現在の秩序の中で、他人に強制されてではなくみずからの意思で、規範に従って行動する。それが、気高き者の在り方です。ソクラテスは、みずから毒杯をあおったのです。

そう思うと、胸が高ぶってきます。腰の奥に勇氣がみなぎってきます。
「トリアス先生。それくらいで赦してやりなさい。繰り返しますが、処女膜を尊重してやるのです」

ああ……校長は、幾分かでもわたくしの勇氣を分かってくさいました。慈悲深いなどとは思いませんし、処女膜にかこつけてはいますけれど。

トリアスが教鞭を——すぐには引きませんでした。全体をわたくしの乳房に押しつけて、横にしごきました。まるで、汚れを拭うような仕種です。まるでではなくて、事実そうしたのでしょう。けれど、最後まででき然と懲罰に耐えたわたくしのプライドは、そんな仕打ちくらいでは損なうことなど出来ません。

それよりも。最大限にへりくだってマリーにお礼を述べて、あらためてキャンバスシューズを押し頂いて、その場で履かされたことのほうが、よほどの屈辱でした。皮肉を利かせて完璧な^{curtsey}膝折礼でもしてやろうかと思いましたけれど、よしました。まだ裸でしたから、つまむ裾がありません。

こうしてわたくしは、首輪だけではなく屈辱の文字を書かれた靴まで身に着けることになったのです。足の裏が擦り剥けなくなったのはありがたいことですが、屈辱の埋め合わせにはなりません。

ああ、最後まで懲罰に耐えたといいましたけれど。実は続きがあったのです。その日は放課後までずっと、校舎の玄関横に立たされていました。それも、制服は取り上げられた

ままで、両手を頭の後ろで組んで、足は左右に一フィート開いた姿勢で。ツインテールで乳房だけでも隠そうとしたのですが、後ろへはねられてしまいました。

さいわいに、教師も生徒も、そう頻繁に出入りはしません——昼食後のひと時を除いては。誰も見ていないときのほうが圧倒的に多いのです。それでも、わたくしは命じられた姿勢を保ち続けました。ツインテールを元に戻しもしませんでした。

理不尽な懲罰をき然と受け容れている。その想いが、胸を高ぶらせました。他人に見られているときは、腰が熱くうずきました。本当に、女性は子宮で物事を考えるのだと、あらためて認識しました。物理的な刺激を受けていないのに、女性器が潤ってきて、お小水にしては変に粘っこい体液が太腿まで垂れてきたのは不可解でしたけれども。

「へええ。こいつ、露出狂だぜ。素っ裸で股座の奥までさらして、ぬらしてるぞ」

名前を知らない延長教育生徒が、そんなことを言いましたけれど、もちろん、わたくしは性的に興奮していたりはしません。どんなに破廉恥で惨めな姿をさらしていても、貴族として毅然と振る舞っている自分に満足していただだけです。

——放課後にも、新たな屈辱が待ち受けていました。

チャーリーとジニアともども、医務室に呼び出されたのです。わたくしひとりだけが裸になって、ビニールを敷いたベッドに横たわるようにフォーブス女史に命令されました。わたくしは無益な質問なんかせずに、命令には無条件に服します。そういう契約なのですから。

「トリアス先生から、無駄毛の処理をするように言われているのでしょ」

ベッドの脇に小卓を置いて、その上に大きな瓶とか小さめの金属ボウルとかアルコールランプを並べていきます。

「かみそりを使っても、二日もすると見苦しくなってくるわね。もっと良い方法を教えてあげます。あなたの毛質だと、施術後二週間はつるつるを保てるわね」

もっと良い方法とは、ワックス脱毛でした。常温では固形のワックスを熱で溶かして肌に分厚く塗り、冷めて固まってから一気に引き剥がすのです。昔から高貴な女性には愛好

者が多かったそうですが、最近では平民にも普及しています。もっぱら腕や足の無駄毛処理が中心で、股間にも使われているのかまでは知りませんけれど。

ワックス脱毛そのものは、ちっとも屈辱ではありませんけれど。

「三週間に一度は施術しなければならないけれど、その都度煩わされるのは願ひ下げよ。この子の世話をするのは、あなた方の役目でしょ。やり方をちゃんと覚えて、次からは面倒をみてやってちょうだい」

「そういうことなら、喜んで世話をしてやります。なあ、ジニア？」

世話ではなくて悪戯でしょう。それとも意地悪。ワックスを必要以上に熱くするとか、わざと痛い剥がし方をするとか、いくらでもやり方があります。実核を剥き出しにされて、そこに加熱したワックスを塗られたりしたら……想像しただけで、陰核が縮み上がりました。鼓動が速くなります。腰の奥に熱い戦慄が走ります。

意地悪は、チャーリーとジニアだけではありませんでした。準備が調う間も、施術を受ける姿勢で待っていなさいと命じられました。

「寝るときと同じ格好をしてればいいんじゃないかな」

チャーリーの言う通りです。手足をX字形に伸ばして、脇も股間も無防備にして。

いっそ、手錠で拘束されたいと思ってしまいました。でも、絶対に言いません。わたくしは、自由意思で施術を受けるのです。だいいち、みずから拘束を願うなんて——マゾヒストでもあるまいし。

脱毛の手順は省略します。かみそりでそるよりは時間がかかりましたけれど、脇毛も陰毛もまとめて処理したので、三十分くらいで終わりました。

何千本もの毛を一気に引き抜かれるのですから、かなりの痛みを伴うと、女性向けの雑誌には書いてありました。実際には、たいしたことはありませんでした。もっとも、何度も教鞭でたたかれたことで、苦痛の基準が狂ってしまったのかもしれませんが。以前のわたくしだったら、「痛い！」くらいは漏らしていたでしょう。

Suppression

七月になって早々に、わたくしは誕生日を迎えました。誰からも祝福されることのない誕生日でした。

性奴隷などという惨めな肩書ですが、そんなにわいせつな悪戯はされずに済んでいます。やはり、男子生徒は女子の目を恐れています。耳もです。

すれ違いざまにお尻をなでるところか、後ろから抱きすくめて胸元に手を入れてきたり、はなはだしいのは正面に立ちはだかつて股間をまさぐる男子までいましたが、じきに少なくなりました。わたくしが黙っていなかったからです。いえ、抵抗したわけではありません。

「今、お尻を触りましたね。先に、触らせると命令してください」

大声でそんなことを言われては、退散するしかないでしょ？

ただ。わたくしの機転では切り抜けられない困難に直面したことがありました。特別奨学生徒は、言いつけられた雑用もこなさなければなりませんけれど。普段（こんな日々が普段になってはたまりませんけれど）は、こきつかわれることもありません。寮の自室以外は専門の業者が掃除しますし、洗濯してくれるハウスメイドも居ます。まさか、代わりにノートを書いてくれなんていう生徒はいません。

それでも、寮に忘れ物をしたから大急ぎで取って来いとかいうのはあります。そのときが、それでした。ところが、校舎を出たところで、Y11の男子生徒に呼び止められました。同じような依頼、いえ命令でした。男子寮と女子寮は正反対の方角です。二つの命令を同時には果たせません。事情を説明しても、彼はこっちを優先しろと主張します。全国統一試験を控えているぼくのほうが忙しいのだし、上級生なのだし、男だから——と。

言い争う（ことを、わたくしが許されていたとしても）時間が惜しかったので、彼の命令を先に片付けました。当然ですが、最初の命令を果たしたときは授業が始まっていて、

無駄足になってしまいました。彼女は怒り狂って――授業の後で受けた罰は、スカートをまくってお尻をたたかれるよりも、なまぬるいものでしたけれど。

放課後すぐに、わたくしは校長に訴えました。悪意を持って、こんな両立不可能な命令を出されたら、対抗のしようがありません。

校長の返事は単純明快で、とうてい受け容れられるものではありませんでした。

「どちらか一方の命令にだけ従えばよろしい」

当然ですが、続きがありました。

「それから、もう一方の命令に従わなかった罰を受けるのです」

礼儀正しく辞去の挨拶をして校長室を出てからも、わたくしの肩は怒りに震えていました。

さいわいに二律背反の命令は、今までのところ、その一回きりです。男子生徒からの性的な悪戯も、一日に十回くらいで済んでいますし、ほとんど一瞬です。

女子生徒からの嫌がらせが多いくらいですが、ほとんどが面と向かったの嫌味ですから、心を強く持っていれば、へっちゃらです。

加害者は教師と生徒だけではありません。わたくしたちと接する機会のある使用人たちが、だんだんと図に乗ってきました。食事を提供するコックは、わたくしとジニアを抱き締めたり何十秒かは堂々と身体を触るようになりました。といっても、被害はもっぱらジニアに集中して、わたくしにはお義理といった扱いでした。ちっとも悔しくはありません。ジニアのほうがグラマーですし、鎖の貞操帯も前を防御していませんものね。

休日だけ出勤するスクールバスの運転手は、バスの運行を始める何時間も前から洗車場のすぐ横に椅子を持ち出して、そこで待機するようになりました。コックと違って身体に触ったりはしませんけれど、水で股間を洗うわたくしとジニアをじっくりと観賞するのです。そして、こちらの被害はわたくしが受け持つ破目になりました。夕食を終えて小屋へ戻るとすぐに制服を取り上げられ、朝食が始まる直前まで返してもらえなくなったのです。ジニアの発案です。

「もっと、身体をくねらせながら洗うとかしたら、彼は喜んでくれるわよ。チップの一ポンドも張り込んでくれるんじゃないかな。あなた、一文無しなんでしょ」

もちろん、死んだって——もっと現実的な喩えなら、(昼食時には物置小屋に拘束は出来ませんから) 朝食と夕食を取り上げられたって、そんなことはしません。

そうこうするうちに、学年末の試験が始まりました。特別奨学生になってから、勉強の機会は奪われていたに等しいですが、わたくしには一年分以上の貯金があります。とくに国語や古典語は、ケアレスミスでも無い限り満点の自信がありました。

ところが。テスト明けの授業で、最初に古典語のテストが返されたとき、わたくしは目を疑いました。答案用紙には、採点の赤ペンが入っていないのです。それなのに、右肩には二重線の上に大きくゼロの数字が書かれています。

「採点漏れがあります」

特別奨学生の身分を弁えて、ずいぶんと控えめな言葉で、教師の怠慢を指摘しました。ところが、キャビン氏から返って来た言葉は耳を疑うものでした。

「ゼロ点のことかね。マイナスの点は付けられないので、そうしておいたのです」

採点漏れではなく故意だったのです。

「なぜ、そんなことをなさるのですか?!」

「きみは、チャーリーとジニアがテストで取っていた点数を知っているかね」

大体は知っています。使用人が落第点を取ったりしたら、主人の管理能力を疑われます。二人とも平均点に届いたことはありませんが、落第点を取ったこともありません。

「きみは、今回の全教科がゼロ点でも、嘆かわしいことに及第点をはるかに越えてしまうのです」

分かってきました。チャーリーもジニアも、きちんと(わたくしの父が)学費を納めていた生徒とはいえ、わたくしの使用人でもありました。そんな者が優秀な成績を修めれば、良く思う者は、生徒にも教師にもいないでしょう。まして今は——学園のお情けで養われ

て（辱められての間違いです）いる身です。

それでも。裸の上に超ミニスカートも、女性器に食い込む鎖も、電気も無い物置小屋も、さらし台の机も、乞食のような扱いも、屈辱的な命令への絶対服従も、いやらしく身体を触られることも——すべて甘受するとしても、これだけは我慢出来ません。財産も爵位も青い血さえも関係なく、わたくしの個人としての能力を全否定されるのですから。

「公式に保存される学業記録にまでとは望みません。せめて、この答案用紙には、正当な点数を記入してください」

今の身分を弁えて、ぎりぎりまで譲った要求です。

「思い上がるのも、たいがいにしろ！」

怒鳴りつけられました。

「財産と身分を鼻に掛けて、教師までないがしろにしてきたのだから、それを失えばしっぺ返しを食らうのは当然だろうが。三倍返し、いや十倍返しは覚悟しておけ」

授業内容でも道徳的な問題でも、間違っている部分は教師に対してもきっちり指摘してきました。それを曲解して、そんなふうに使っていたなんて……でも、言い返しても、ますます怒らせるだけでしょ。

「そういえば、この授業では、まだおまえに懲罰を与えたことがなかったな。いい機会だ——服を脱げ。制服だけでいいぞ。下着まで脱がすほど、私は無慈悲ではない」

わたくしを除く全員が笑いました。

もう慣れてしまいました。わたくしはき然とした態度で——内心では羞恥にもだえながら、それを押し隠して、制服を脱ぎました。直ちに、わたくしは全裸。正確には、一本の鎖で陰裂を隠しているのか際立たせているのか。

半ば埋もれている乳首を無理矢理に摘まれて、教壇の中央へ引きずり出されました。これしきのことで、痛いだけの恥ずかしいだの、いちいち反応するのは面倒です。私も図太くなったものです。

後ろ向きにされたので、ほっとしていると。腕を背中へ捻じ上げられました。ツインテ

ールのお下げを引っ張られて、それで手首を縛られました。

「やめてください。おっしゃってくださいれば、手を後ろで組みます」

問答無用で縛られてしまいました。右手首は左のお下げで、左手首は右のお下げで。左右の手首が肩甲骨の下で交差しました。後ろから見れば、腕はW字形に折れ曲がっているでしょう。

「SSSアイリス……」

くすくす笑いが起きました。

「軍艦みたいだな」

「それはHMS、“Her Majesty Ship”だよ」

「SSSはナチスの親衛隊だろ」

コホンとせき払いをして、キャビン（わたくしにこのような辱めを与えるやつに敬称は不要です）が続けます。

「彼女は、ずいぶんと古典語が得意のようですから、その実力をを見せてもらいましょう」

このクラスはすでにY7の履修範囲は終えているから授業に差し障りはないと、生徒を安心させてから、わたくしに命じました。

「私は、すべての教師と生徒との如何なる命令にも服従します——これを、古典語で黒板に書きなさい」

いちいち翻訳などしなくても、古典語が頭に浮かびます。けれど……

「手を自由にしてください」

ケビンは肩をすくめてから、チョークをわたくしの唇に押しつけました。

「これは懲罰です。口にくわえて書きなさい」

一瞬の憤慨と教師への軽蔑。そして、すぐに諦めました。チョークを口にくわえて黒板に向かいます。

「もっと上のほうに書きなさい」

足をそろえて伸ばして、顔を上向けます。髪の毛を下へ引っ張られているので、容易な

ことです。書くべき言葉も分かっています。

Omnibus magistris et scholaribus mandatis obediam.

顔を動かして文字を書き始めましたが、思うようにチョークが動きません。それに、すごく薄くしか書けません。

「汚い字だね。これで点数をくれというのだからあきれろ」

からかいの言葉は無視します。でも、せめて濃く書こうと思って、二度三度となぞりました。

強くかんだせいで、チョークを折ってしまいました。口の中に残った切れ端は、ひどく苦い味がしました。粉薬と一緒にですね。

「チョークひとつ、まともに持てんのか」

わたくしの口にチョークを突っ込みながら、キャビンは半割りオレンジを、もぎゅっとつかみました。この人は、乳房が好みなんでしょう。小さくてごめんなさいね——皮肉です。

「あれ？ “magesiris” だっけ？」

書き終えようとしたとき、誰かが言いました。男子生徒の声ですが、誰なのか分かりませんでした。すでに三年間、一緒に学んできたというのに。

私は後ろへ下がって、書いたところを見直しました。

スペルミスです。“magistris” です。

「消して書き直さない」

またしても無理難題を言われました。いえ、簡単なことです。黒板消しを使うのは無理難題ですが、黒板の字は簡単に消せます。私は横向きになって背伸びをして、右肩を持ち上げるようにして黒板に押しつけ、前後に動かしました。

文字は——消そうと思った範囲以上に消えてしまいました。チョークの粉が広がって、全体的に白くなっています。もう一度、ずっと慎重に肩を揺すって粉を拭き取りました。それから、消した部分を書き直しました。ずいぶんと手間取りました。

「ふむ。間違っていないね。しかし、もっと早く書くようにしなさい」

言葉だけを聞いていると、まともな授業を受けているように錯覚します。

「よろしい。その下に、こう書きなさい——私は決して教師にも生徒にも逆りません」

これも易しい問題です。書いた言葉が、そのままわたくし自身の宣誓と見なされるのだろうという確信さえなければ。でも、どうせ——契約書の内容の言い換えに過ぎません。

Numquam magistros aut discipulos detestor.

今度はスペルミスも格変化の間違いもなく書けました。

「よろしい。次は、こうです——私は従順な性奴隷です。短い文章ですから、右上に書きなさい」

ますます簡単に、そして困難になってきました。わたくしは右へ動いて、また背伸びをして書き始めました。心の動揺が文字にも表われて、今度は自分で間違いに気づきました。

さっきは、高い位置に書いた文字を無理して当てずっぽうに消そうとしたのが失敗の理由です。わたくしは横を向いて、精一杯の横目遣いで黒板の文字を見詰めながら、頬を擦り付けて消しました。

なぜ、こんな道化めいたことをしなければならないのでしょうか。正しく採点してくださいと要求するのは、そんなに罪なののでしょうか。チョークの粉が目に入って、涙がにじみます。泣いてなんかいませんとも。

書き終えて、その文字を眺めると、ますますチョークの粉が目染みます。

Ego sum servus sexus submissi.

「よろしい、次はこうです——私は自分の無毛のマンコが自慢です」

これまでは客観的事実(?)の記述でしたが、これはわたくしの心を直接に踏みにじる語句です。

自慢どころか。有るべき物が有るのを見られるのはじゅうぶん耻ずかしいのですが、無いのを見られるのがそれ以上に耻ずかしいとは、知りませんでした。

それでも、書かなければならないのです。

Ego cor meum genitalia feminina glaber.

マンコに相当する下品な単語なんて知らないの、女性器と上品（ではないかも知れませんが、正しい医学用語です）に表現しました。

からかわれるのも覚悟していましたが、キャビンは寄り道をせず、最初に定めていた（のだと思います）コースを進みました。

「よろしい。では、最後にこう書くのです——私は淫乱なビッチです」

もう、チョークの粉が目に入ることもなくなりました。

二行の文章の下に書こうとして、腰をかがめました。ぴりぴりっと、陰核に小さな稲妻が走りました。

「あっ……?!」

わずかな刺激だったのに、腰全体に雷鳴がとどろいたような感じになりました。屈辱にまみれていたところへの不意打ちで、心の準備が出来ていなかったせいでしょう。

わたくしは（可能な限り）気取られないように素早く体勢を立て直して、淡々と書き進めます。けれど、文字には内心が表われてしまいます。震えて、スペルミスだらけで……

間違ったところを消そうとしたら、止められました。

「もっとピンポイントで消しなさい」

「……?!」

意味が分かりませんでした。

「鉛筆の尻に付いているのと同じ消しゴムを、きみは二つも持っているではないですか。それを使いなさい」

言いながら、わたくしの胸元を指差しました。

理解せざるを得ません。でも、わたくしの乳首は半ば埋もれ……意識すると、途端に硬くしこって、飛び出してきました。それは、近くに立っているキャビンにも見えたのです。

「何を期待して乳首を立てているんだね、この淫乱娘は」

命令は含まれていませんから、雑言は無視して、黒板と向かい合いました。書いていた

ときよりも腰が高い位置に来ますから、刺激が少し減って楽になりました。物足りないなんて、これっぽっちも思いません。

下目遣いに文字を見ながら乳首を近づけて。黒板に軽く押しつけると、ひんやり心地好いです。上体を慎重に動かして、乳首でチョークをこすり取ります。無数の細い稲妻が乳首から乳房の奥まで飛び散りました。かろうじて声は押さえましたが、身体がびくんと跳ねるのまでは、どうしようもありませんでした。

体勢を立て直して。乳首を消しゴムにして、間違えた文字を消していきます。ぴりぴりぴりっと、立て続けに細い稲妻が走ります。今度は予期していたので、平気ではないけれど、耐えられます。

電撃を心地好いと思う人はいないでしょう。でも、これは本当の電撃ではなくて……心地好くはないけれど、乳房全体がうずいて、腰の奥に奇妙なうねりを感じます。いつまでも続けていたくなります。

でも、しつこくは続きません。消したい文字を消し終わると、少し深く腰をかがめて、文字を書き直しました。

書き終わって足を伸ばすと、陰裂からにじみ出た体液で腿がぬれているのが分かりました。腰をかがめた分だけ鎖が食い込んでいたせいです。

書いた文字をあらためて眺めると、そんなに屈辱的な文章でもありません。

Ego sum nymphomanis femina canis.

“nymphomanis”という形容詞は^{nymph}妖精が語源ですから幻想的です。ビッチは^{femina canis}雌犬のことですが、侮蔑のニュアンスが——古典語にあるかどうかは知りません。

わたくしが書き終えて、キャビンが何か言いかけたとき、終業のチャイムが鳴りました。思っていたよりも時間が経過していました。

「アイリス。放課後、私の部屋へ来なさい。落第点を取ったのだから補習です」

どんな補習か、想像がつきます。でも、受けなければならないのです。年間を通じての点数は及第ですが、今のは絶対に無条件に服従しなければならない命令だからです。

「誰か、アイリスの髪をほどいてやってください」

そう言って、キャビンは教室から出て行きました。生徒も、次の教室へと移動します。わたくしの手首を縛っている髪の毛をほどいてくれる親切な人は——ひとりだけ居ました。

最後まで教室に残っていたオッター・デアリングが、なぜかそっぽを向きながら近づいてきて。

「すぐ、ほどくから——身体に手が触れたらごめんね」

まるで普通の女の子に断わるみたいな物言いをして、わたくしの後ろへ回り込むと、ちっとも身体には手を触れずにほどいてくれたのです。

こういうときは、きちんとお礼を言うべきなのかしら。だとすると、どんなふうに言えば良いのだろうとためらっているうちに、彼はそそくさと立ち去ったのです。

わたくしがためらったのは、触り放題虐め放題の性奴隷としては、ひざまずいて、なんだったら彼の靴にキスでもしなくてはいけないかしらと、一割くらいは本気で考えたからです。それとも、子爵令嬢としてなら、軽くうなずいて一言だけが適切かしらと、こちらは二割くらい本気でした。残りの七割は、単純に戸惑っていました。

男子は、全員がわたくしの崇拝者か^{しもべ}僕か、少なくともファンでしたけれど、彼は特に熱心な崇拝者であり^{しもべ}僕でした。四月のキャティ・ストックとのいさかいのときも、彼はチャーリー以上の献身をしてくれました。

もしかすると、今もまだ、わたくしを崇拝しているのでしょうか。首輪をはめられ、鎖で女性器を虐められ、下着さえ与えられずに超ミニの制服一枚を着せられて、屈辱の文字を書かれたボロ靴を履かされている、このわたくしの中に、彼には青い血が見えているのでしょうか。

S e r v i c e

その日に返された答案用紙は、ことごとくゼロ点でした。わたくしの進級に関しては、一科目を除いて問題ありません。

合格ラインは六十七点です。学習内容の三分の二も覚えていないなんて、許されざることです。わたくし自身は、八十五点以下を取ったことは、一科目を除いて一度もありませんでした。過去形なのが悔しいです。

追試はありますし、それが赤点でも二科目までで、かつ四十点以上なら仮進級できるとか、救済処置はありますが、わたくしには縁のないことでしたし、これからも縁がないので割愛します。

これからも無縁というのは——卒業までずっと白紙答案を提出し続けても六十七点をもらえるらしいのです。白紙ではないですが、四割くらいしか解答欄を埋められなかったときがそうだったと、後でチャーリーが言っていました。

少し話を戻します。

わたくしがさっきから言っている例外の一科目は保健衛生です。

体育と保健衛生を担当しているアリス・プレトリカ女史は、履修範囲からの出問は七割にとどまり、あとはとんでもない問題ばかりなのです。

同性愛についてどう思いますか。男性同士、女性同士それぞれを論じなさい。

社会的性差を肯定、否定それぞれの立場で論じなさい。

同性愛と服装倒錯の違いを考察しなさい。

とても進歩的な問題意識と（一部の教師からは）評価されていますけれど、キスをしたことのない生徒（わたくしも、その一人です）も多いY7に出す問題ではないと思います。

ふざけているとしか思えない問題もありました。

フレンチキスとフランシェ帽子の共通点を考察しなさい。

フランシェ帽子というのは、男性器にかぶせる性病予防具のことです。フランシェではイングル帽子と呼ばれています。

わたくしは、貴族令嬢の品位を損なわないように注意しながら——国営放送のアナウンサーがコメントしそうな解答を書くのですが、たいていは「書き賃」だけの点数でした。だから、今回のテストがゼロ点だと通年成績が及第点に達しません。ので、保健衛生も補習を受けることになるでしょう。どんな内容になるのか、今から不安です。

不安なのは、今日の古典語の補習も同じです。

ラルフ・キャビンの本当の（というか、出生証明書に書かれている）名前は、Lで始まるラルプ・カバイムです。“Ralph Cabin”と“Lalp Cabime”。有り得ないようなスペルミスですが、彼は自分の名前を生きたV 1の記念碑と称しています。彼の出生証明書が作られているまさにそのとき、ドイツの飛行爆弾が近所に落下したのです。役所の人がそれでもお仕事を続けたのは、さすがのジョンブル魂ですが、さすがに驚いたはずみでスペルを間違えて。戦争中のどさくさに紛れて、そのままになったのだそうです。そんなエピソードは、どうでもいいです。つまり、彼は三十八歳です。それなのに独身で、学園の職員宿舎に住まっているのです。若い頃に結婚して、すぐ奥さんに逃げられたというのは事実らしいです。離婚の原因が彼の変態的性行為だったというのは、噂です。けれど、わたくしを不安にさせる噂です。わたくしは、学園に在籍するすべての人の命令に逆らえないのですから。

わたくしは不安のうちにその日の授業を終えて、キャビンの研究室へ行きました。教師は全員が個室を与えられているのです。

「きみの作文能力は分かったから、次は発音と会話です。このプリントを一行ずつ音読して、その意味を行動で表現しなさい」

プリントには、びっしりと文字がタイプされています。その一行目は、こうです。

“Ego vestimenta mea depono.”

わたくしは服を脱ぎます。

わたくしは当てつけの意味をこめて、できるだけ流ちょうに正確に発音して——服を脱ぎました。

“sedeo super pedes magistri mei.”

わたくしは教師の足の上に座ります。

ケ빈は、まず椅子から立ち上がって——ズボンとパンツを脱ぎました！ 股間の男性器が、水平まで鎌首をもたげています。四月に見たチャーリーの勃起よりも大きいです。ケ빈は椅子に座り直して、両足を女性みたいにぴったりと閉じました。男性器は両足の間から突き出ています。

つまり、わたくしは……彼の足というよりも太腿と男性器の上に、足を開いてまたがなければならないのです。

身体を動かす前に、ざっとプリントの文面に目を通しました。意味を成さない文章が目立ちます。理解する必要などありません。キャ빈の思い通りに弄ばれるしか、わたくしに選択肢は無いのです。

わたくしはキャビンと同じ向きになって、彼の太腿をまたいで——せめてもの腹いせに、どすんと腰を落としてやりました。

「きゃっ……？！」

悲鳴をあげたのは、わたくしのほうでした。腰をつかまれて後ろへ引かれたので、股間を男性器にこすられたのでした。しゃく熱した鉄棒のように感じられました。それは一瞬のことで、太腿の上に座ってみると、そんなに熱くはありません。でも、大陰唇が男性器に押しつけられて、気色が悪いです。視線を落とすと、まるでわたくしの股間に男性器が生えているみたいで、醜悪です。

「どうした、次を読みなさい」

何が起こるか分かっていますが、命令に服従しなければなりません。

“Perfricare quaesio ubera mea.”

わたくしの胸をもんでください。

この言葉を行動で示すのは、キャビンです。わたくしを羽交い絞めにするみたいにして、両手で乳房をもみしだき始めました。

もぎゅもぎゅもぎゅと、指が食い込むほどに強くもまれます。

「次を読みなさい」

“Durius perfricare quaesio.”

もっと強くもんでください。

もむなんてもものではなくなりました。わしづかみにして——金庫のダイヤルだって、もっと優しくひねるでしょう。

“Sit tantas senserit ei. Cura papillae meae etiam quaesio.”

とても気持ちがいいです。乳首も可愛がってください。

痛いだけです。乳首は弄らないでください！

もちろんケビンには、わたくしの内心の声は聞こえていません。聞こえたとしても無視するでしょう。

ケビンは乳房をつかんだまま人差し指を滑らせて、乳頭をくすぐりました。すでに乳首は、乳房を握り潰す圧力で押し出されています。

「くっ……」

稲妻ではありません。芋虫にはいまわれているような気色の悪さが、乳首から乳房全体に広がって、胸の奥まで浸透していきます。屈辱と怒りとで、子宮が熱を帯びてきます。

「続きを読みなさい」

“Aahhh... Ohhhh... Ad culmen voluptatis pervenire studeo!”

わたくしは快感の絶頂に達しようとしています。

馬鹿々々しい。髪の毛一筋ほども情感を交えないようにして、棒読みしてやりました。

文字列は、まだまだ続きます。

“Aaaaah! Ooooh! Veni, veni. Sentit bonum!”

来る、来る。気持ちいい。

どこから来るというのでしょうか。本当に性的な快感があったとしても、こんなフレーズを口にしたら冷めてしまうに決まっています。まして、絶体に、次のような言葉は口にしないでしょう。

“Amabo etiam clitoridem meam.”

陰核も可愛がってください。

鎖の環で防護されているので、そんなに酷いことは出来っこない——と安心しかけて、ぎょっとしました。お行儀の悪い歩き方をしたときは、防護どころか刺激の元凶になっていたのです。

果たして……鎖をぎゅっと股間に押し込まれて、その反動で包皮が完全に剥けてしまいました。そこを……

「ひゃああっ……?!」

冷たく鋭い刺激を受けました。シャープペンシルの先端でつつかれているのです。

表面を擦られると、これまでにない、太くて甘い稲妻がそこを貫きます。

悔しい……認めたくはありませんが、これは性的な快感だと思います。

ケビンが腰を揺すり始めました。

「どうも、この鎖の感触が興奮めだが……」

そんなことを呟きながら、腰を上下に動かします。もしも、これが交接に伴う運動と類似のもののだとしたら——ジニアで実験したときの、二秒で一往復は間違っていたことになります。一秒に二往復です。

太腿と大陰唇とが、勃起した男性器にこすられます。なんだか、ぬるぬるしてきました。

「くそ……まだだ」

ケビンがつぶやいた直後。陰核に痛みが走りました。

「きひいいっ……！」

シャープペンシルの先端を強く押し込まれたようです。突き刺さった感触はありませんが、じゅうぶんに痛いです。それなのに……

「ひゃうっ……くううう」

また優しく擦られると、さっき以上の稲妻が立て続けに腰の奥まで貫きます。雷鳴まで聞こえてくるようです。

ケビンが、また腰を揺すり始めました。たちまち稲妻が走り始めます。腰の奥で沸騰している屈辱と、ひとつに混ざり合います。性的な快感をかき立てられながら、屈辱が強くなります。屈辱に甘んじるのも悪くはないなんて気になってしまいます。

そんなのは嫌です！

「いやあっ……駄目！ 赦してください！」

プリントに書かれていない言葉を叫んでしまいました。

ケビンの動きを封じようとして、身体を捻って強く抱き着いてしまいました。

その瞬間、おへその少し上に、軽い衝撃を感じました。そんなところまで稲妻がとどくのですね——と、ぼんやり思っていたら。

ぱちんとお尻をたたかれて、わたくしは正気を取り戻しました。

「よろしい。補習は終わりです」

わたくしは、ケビンの腰から離れました。というよりも、彼に払い落とされたのです。

床にずり落ちて、なんだか腰に力が入らないのですが、どうにか立ち上がりました。そこで気づきました。さっき衝撃を感じたあたりに白いねばねばした液体が大量にへばり着いています。

ああ、そうか。これが精液というものだなと、自然に理解しました。と同時に、おぞましが背筋を駆け上りました。わたくしはけがされたのです。

けれど、二つの観点から、わたくしはその思いを打ち消しました。

精液は、新しい命の種子なのです。女性は、それを子宮に受け止めて卵子と結合させて、

新しい命を育むのです。けっしてけがらわしいことではありません。

そして、もうひとつの想いは。わたくしは性奴隷にされたのです。これこそが、わたくしの務めなのだと——絶対に受け容れられないけれど、諦めなければならない境遇なのです。けれど……たとえ肉体がけがされても、精神の高潔さまではけがせません。青い血を、これっぽちの白濁で損なうことなど出来ないのです。

交接欲を代用手段で満たしたケ빈は、途端に親切になりました。ティッシュで汚れを拭ってくれたのです。

——翌日には、保健衛生のテストも返却されました。予想していた通りにゼロ点でした。おびえていた（ではありません。懸念していただけです）通りに、放課後から補習を受ける破目になりました。

「あなたは、教科書をY 1 3まで終えているそうね。今日は、その先の応用問題を教えてあげる」

なんだか、ねっとりとした物言いです。嫌な予感が強まります。

ディーブ女史はケ빈と同じで、わたくしを裸にさせました。だけでなく、校長とフォーブス女史のどちらから鍵を借りたのか（それとも、幾つも予備があるのか）知りませんが、南京錠を外して、わたくしの股間の鎖まで取り去りました。そして、わたくしをソファの上に寝かせます。彼女は、パイプ椅子でわたくしの横に座りました。

「まずは、オナニーをしてごらんなさい」

さらっと言いますけれど。

「そんな不潔な行為、わたくしは致しません」

ディーブ女史が、ゆっくりと首を横に振ります。

「不潔でもないし破廉恥でもないし、健康に良くないなんてのは閉経した婆さん連中の戯言よ」

「……………」

わたくしの沈黙を無言の反抗と、彼女が受け取ったのなら、その通りです。

「あなたはセキスパートを目指すのでしょ。オナニーで自己啓発に努めるべきなのよ。感度の良い女は、殿方に好まれるわよ」

そんなの、^{gentlemen}殿方ではなく^{bastards}ろくでなしです。でも、言い返したりはしません。

「やり方を知らないの？」

「知りません！」

即座に力強く断言しました。陰核を刺激すると気持ち好くなるといいますが、自分で実験した結果は、芳しいものではありませんでした。芳しかったら、困っていたでしょうけれど。

「まあ、いいわ。一から教えてあげるから、言う通りにするのよ？」

「それは命令ですか？」

「その通り。あなたが逆らうことを許されていない命令よ」

「……わたくしは、どうすればいいのですか？」

わたくしは心の中で、彼女にも敬称を付けることをやめました。

「そうね。私がお手本を示してあげる」

アリス（女性に対しては、自然と個人名で考えてしまいます）が、わたくしの乳房に手を伸ばして、中指の腹を乳頭に触れました。

「ひゃんっ……」

くすぐられてもいないのに、変な声が出てしまいました。背筋がぞくぞくするようなくすぐったさです。自分の指とも男の指とも、まるきり違います。

「感度は良いわね。セキスパートの素質じゅうぶんね」

なぜか、あまり腹が立ちません。

残る四本の指が乳房を包みました。さわさわさわと、ふもとから頂きに向かって——もむのではなく、触れるか触れないかのタッチでくすぐります。

「あんっ……やだ……」

乳房全体が膨らむような感覚が生じました。乳首は、痛いくらいにとがってきます。そ

れに呼応するかのように、腰の奥がじんわりと熱くなってきます。

この感覚は——これまで、不当に扱われて怒りが子宮にわだかまったときと、すごく似ています。うれしいときも恥ずかしいときも怒ったときも顔が熱くなります。それと同じです。

アリスが、もう一方の手も乳房へ伸ばします。二本の手で双つの乳房を——もむのでもなく、くすぐるのでもなく、的外れかもしれませんが、弦楽器を奏するような指の動きです。

それが、延々と続きます。乳房全体がもどかしくうずきます。腰の奥の埋火が、だんだん熱くなってきます。

「ああっ……^{Ma'am}先生……」

口走って、あわてて口を閉じました。教え子に変態的な悪戯を仕掛ける教師を先生などと呼びたくないです。

「そんなに気持ちが良いの？」

悔しいけれど、その通りです。男性に——教師にでも生徒にでも、触られたときとは、まるで違います。それはもちろん……気持ちが好いといっても、わたくしの知っている気持ち好さとは違います。激しい運動をして汗をかい肌を吹き抜ける風の感触とは、まったく似ていません。寒い冬の日暖阳房の効いた部屋で感じる心地好さとも違います。重層的な甘みたっぷりのケーキを食べるときの幸福感とも似ていません。ほんのちょっぴりだけですが、我慢し続けていた生理的欲求を解放したときの心地好さと似ているような気がします。砂山とエベレストほどにも違います。

快不快でいえば、明白に快なのですが、この感覚を表わす言葉を、わたくしは知りません。

「おっぱいだけで、これでは——こうしたら、どうなるかしら？」

左の乳房から手が放れた——と思った直後、股間で快感が爆発しました。陰裂の上端に、激痛と錯覚したほどの落雷が生じて。

「いやあああっ……！ やめて！」

叫んだだけでした。両手は自由なのに、アリスの手を払いのけようとはしませんでした。

「だめ！ そこ……いやあああっ！」

がくんがくんと腰が跳ねました。十本の足の指がきゅうっと反り返るのが分かりました。

膣全体が溶岩のように煮えたぎります。

「ああっ……わたくし、もう……もう……」

もう、どうなるのか——自分でも分かりません。

不意に刺激が無くなりました。

「え……？」

もうすこしでどうかなるという、その直前で放り出されたのだと、本能的に悟りました。

「んふ。続きをしてほしい？」

はいと答えかけて、危うく踏みとどまりました。このまま快感に流されてはいけないうと、かろうじて残っている理性が金切り声を上げています。なぜ、手を払いのけなかったのだろうと、自己嫌悪に陥りました。

「続きをする、それを受け容れろとあなたが命令されるのであれば、わたくしは拒めません。ですけれど、わたくしは、続きなんか望んでいません」

アリスは、驚いた表情を一瞬だけ浮かべました。

「ふうん？ それなら、これはどうかしら」

アリスは身体の位置をずらして、わたくしの股間に顔を埋めずめました。

「……………」

彼女の意図を判じかねていると、陰核に生温かい感触と、軽い圧迫を感じました。それだけでなく……

「ひゃああっ……汚いです！」

どうかなりそうだったときよりも、いっそう繊細な刺激を受けて、声が裏返りました。女性器をなめられているのです。いえ、陰核を歯にくわえられて、舌先でつつかれていま

す。稲妻が貫くとかではなく、陰核そのものが稲妻と化して、それとも溶岩と化して、快感の固まりになったような感覚です。

わたくしは身を起こそうとしました。アリスの頭を突き放そうとしました。でも、身体が動きません。手錠で拘束されているかのように、腕も動きません。

「いやですっ……やめてええええええ！」

拒否の言葉の最後が高音域に突き抜けて——この感覚を絶頂というのでしょうか。ソファの上ではなく、手応えの無い真っ白な雲の中を無限に落ちていくような感じです。快感に全身が碎け散りそうです。

アリスが、ようやく身を引きました。

わたくしは、慌てて跳ね起きました。真っ白な雲は消え去って、すうっと現実世界が姿を現わしました。

アリスが、また驚いた顔をしています。今度は、表情がなかなか消えません。

「どうも勝手が違うわね。じゅうぶんに性感は発達しているのに」

最近、相手の言葉の意味が分からなくても、深く考えないようにしています。じきに彼（今は彼女です）のわたくしに対する行動で、意図が明らかになるからです。

^{Young lady}「お嬢様だけあって、^{Young whore}淫売娘のようにはいかないわね」

わたくしにしたような悪戯を、わたくしと同年くらいの売春婦を相手に、いつも（時折かもしれませんが）しているということでしょうか。このような人物が……義憤を覚えて、けれど、すぐに立ち消えました。校長もケビンもフォーブス女史も、わたくしにしていることは、アリスと同じか、もっと悪質です。アリスは、わたくしを気持ちよく……なんでもありません。いわば、学園全体が悪徳の巣窟に成り下がっているのです。

あれ……？ アリスは、まだ何かするつもりなののでしょうか。服を脱いで、首輪以外はわたくしと同じ姿になりました。

「私があなたにしたことを、今度はあなたが私にするのよ」

命令されれば従うしかありません。わたくしとアリスが入れ替わります。

「自分で自分を触っても、指で触れた部分の知覚と指の知覚が交差して、微妙なタッチがわからないでしょ。まずは、指の使い方を私の身体で覚えなさい」

もっともな考え方ですし、教え子のために身体を張ってくれているのですが——言い訳のように聞こえました。なぜ何を言い訳しているのかは、よく分かりませんでしたけれど。

とにかく、アリスにされたことを思い出しながら、右手の中指の腹で彼女の——わたくしの二倍はありそうな、彼女の乳首に触れました。まるでチェリーです。サイズで二倍ならボリュームは八倍です。

さわさわさわ……指を動かしてみましたが、アリスはぴくとも反応しません。

「もどかしいわね。指なんかやめて、口で吸ってちょうだい」

それでは、わたくしの指遣いの練習にはなりません。が、黙って従います。

乳首を口にふくむなんて、赤ん坊のとき以来です——記憶はありませんけれど。

大きいくて軟らかくて弾力があります。まるで味の無いグミキャンディーです。

「舌の先を指にするような感じでなめなさい。そして、赤ちゃんがするみたいにおっぱいを吸うのよ」

れろれろ、ちゅばちゅば……これでいいのでしょうか。

「手を遊ばしてちゃ駄目。もう片方の乳房を可愛がって」

可愛がるという表現はどうかと思いますけど。動きづらいのでパイプ椅子から降りて、アリスの胸におおいかぶさる形で右手を伸ばしました。舌と指の両方に注意を分散するのは難しいので、どちらも動きが単調になります。

しばらく続けていると、頭を押しつけられました。

「筋は悪くないわね。つぎは、私のおまんこよ。やっぱり舌を使いなさい」

P u s s y だなんて、教師が使ってはいけない言葉だと思います。なんてことは、さておいても。他人の女性器をなめろだなんて……あまりに卑わいで屈辱的な要求に、かえっていろんなことを考えてしまいました。身体が柔らかければ自分の女性器もなめられるかな、とか。男性器をなめる行為はフェラチオといいますけど、性奴隷にされたからには、

いずれそんな命令も下されるのではないかしら、とか。

わたくしがためらっていると、アリスが身を起こしました。

「嫌だというの？」

手を伸ばして、わたくしのおさげをつかみます。

あっと、思い当たりました。昨日のことを思い出したのです。手を使いたくても使えないようにして、口を使わせる。考えすぎかもしれませんが、そのような屈辱を味わうくらいなら、自由意思に基づいて行動するほうがましです。

「命令には従います」

わたくしは、髪の毛をつかむアリスの手を振りほどいて、彼女の股間に顔を埋ずめました。夏の海岸に打ち上げられている海藻のような臭いが鼻を衝きます。わたくしの女性器も同じような臭いがするのでしょうか。

そうか、わたくしは落ち着いているのだなと思いました。だって、ジニアで処女膜の実験をしたときは、臭いにはまるきり気づかなかったのですから。落ち着きではなく、卑わいな行為にだんだんと慣らされた結果だとしたら、悲しいです。

「ひゃぶっ……?!」

お尻の穴をつつかれて、わたくしは反射的に身を起こしました。

「ほら、早くなさい」

また、つんつんとつつかれて。わたくしは腰をよじって逃れましたが、顔は元の位置へ戻しました。

どうすれば良いか勝手は分かりませんが、とにかくアリスの陰核を口にふくんでみました。

「それでいいのよ。先端をなめて……ストローで吸うみたいにしてちょうだい。そうじゃない。もうすこし唇を浮かして、空気を吸い込むの」

また、開き掛けのドアを思い出しました。わずかに開けただけでも、靴の先をこじ入れられたら、もう閉じられません。開け放って、訪問者を迎え入れて、用件を片付けるしか

ありません。訪問者が強盗ではないことを祈ります。

わたくしはアリスに命じられるままに、陰核を吸ったりなめたり、甘がみしたり。

「いいわ、その調子……もっと強く吸って……おおお、いい。軽く^{come}逝っちゃいそうだわ」

わたくしと同じように、いえ、もっと激しく、腰が跳ねています。なんだか、わたくしが彼女を操っているような錯覚が生じます。操られているのはわたくしのほうだと、それは分かり切っていますけれど。

そういえば。これは主として女性が使うスラングですけど、女性器全体のことをマフィンと呼ぶこともあります。マフィンを頬張って、中のレーズンを舌先でつついているようなイメージが、頭に浮かびました。

マフィン全体が湿気てきました。割れ目からねっとりとした汁がにじみ出ています。

「なめて、すすって……お汁をすすってちょうだい」

うげえ、です。でも、命令には従います。わたくしは、教師にも生徒にも逆らえない性奴隷なのです。そう思うと、腰の奥に屈辱が熱くわだかまってきます。

ずぞぞ……味はしません。量が少ないせいか、口の中がねちゃついたりもしません。でも、惨めな想いはひとしおです。口の中に彼女の分泌物とわたくしの唾液とが、たまってきました。もっと惨めになってやれ。なぜか、そんな思いに駆られて——飲み下してしまいました。

またひとつ、階段を下へ進んでしまったのだわ。唐突に、そう思いました。セキスパートに性奴隷に成り下がる階段を。でも、それは外形的な行為でしかありません。魂を高潔に保っているかぎり、わたくしの青い血がけがされることはないのです。

それから、さらに十五分ほど。わたくしはアリスに命じられるままに、彼女の陰核を舌で刺激し、その間も両手で彼女の乳房をもんだりくすぐったり、最後には小陰唇の中まで舌を挿入して膣口までつきました。

「おお。逝く、逝くわよ……」

ほんとかなと、ちょっぴり疑いました。彼女は、わたくしとは比べものにならないくら

いに性的な経験が豊富なはずです。少女売春婦を買うくらいですものね。その割には反応が、わたくしと比べても控えめだったからです。

わたくしのファーストキスはアリスの女性器ということになるのかなと思いついたのは、物置小屋へ戻ってからでした。

さいわいに、補習を受けさせられたのは、この二回だけでした。わたくしが二度とゼロ点に抗議しなかったからですが、教師がその気になれば何とでも口実は設けられたはずで。どの教師も、わたくしをまともな生徒としては扱ってくれませんが、セキスパート奨学生あるいは性奴隷として扱う教師も、今のところは少数だということでしょう。

全教科の試験結果が（生徒からの異議も吟味した後に）確定してから、学年ごとの順位が掲示されました。わたくしとチャーリーとジニアの名前はありませんでした。

Y7男子の上位四人は、わたくしかジニアかどちらかとの一日デートの権利を獲得しました。夏休みが始まる二日前からは、授業が午前中だけ。午後からが、権利の行使に充てられました。

最初は、同じクラスのハーディ・リンクスとです。彼も、オッターに負けないくらいに献身的なわたくしの崇拝者で僕^{しもべ}でした。わたくしが落ちぶれてからは、彼のほうから近づいてくることはなくなりましたが、それは大半のクラスメイトと同様です。近づいてくる男子は、女子の目を盗んでわたくしに痴漢紛いの行為を仕掛けてくる者ばかりでしたから、近づいてこないことが最大の好意だと、わたくしは解釈していました。

校長からは事前に、デートの相手はわたくしの御主人様^{Master}であり顧客^{Customer}なのだから、丁寧に振る舞えとは指導されていました。わたくしが性奴隷なら彼が御主人様だし、売春婦なら顧客です。でも、まさか、彼がわたくしに対してそのようなことを要求するなど、考えられないことです。

だから、二人きりで校内を散策したり、単独では出入りを禁止されているカフェテリアに連れて行ったりしてもらえるのかなと、楽しみになんかしていませんが、軽く考えてい

ました。

ところが、彼がわたくしをエスコートしてくれた先は、彼の所属しているレスリング部の部屋でした。三人の上級生がわたくしたちを出迎えました。三人とも、シングレットというのでしたかしら、半袖膝丈のレオタードを身に着けています。

ははん。スパーリングとかして、格好いいところをアピールしたいのね——と、わたくしは独り合点しました。

案の定、ハーディは服を脱いで——え？ 女性の目の前で着替えるつもりですか。

着替えるどころか、彼は全裸になりました。

「きゃ……」

わたくしは、顔を背けて両手で目をおおいました。清純ぶったのではないです。男の人に裸を見られるのは慣れっこになっても、男の人の裸には免疫が付いていません。

「ファウルカップを忘れてるぞ」

「無理だよ。だって、これだもの」

げらげら笑う声に興味が湧いて、指の隙間からちらっとのぞきました。

彼の男性器が勃起していました。チャーリーに比べても可愛い、訂正します——小さいです。それをお腹に貼り付けるようにして、彼はユニフォームを着ました。

「きみも準備しろよ」

え……？

「貸してあげられるシングレットはないから、裸でやれよ」

「女のパンクラチオンだな。ルールはCACCだけど」

何を言っているのか、理解できません。

「さっさと脱げよ」

上級生のひとりが、わたくしに近寄りました。他の二人もそれに倣って——包囲された形です。

わたくしはおびえたりなんかしません。上級生の目を見詰めて、静かな声で尋ねました。

「それは、わたくしへの命令なのですか？」

上級生は目を反らしかけましたが、自分が絶対に優位であることを思い出したのでしょう。にらみつけてきました。

「そうだ、命令だ。裸になって、ぼくたちとレスリングをしろ」

「わたくし、ルールを知りません」

「さっきも言っただろ。CACC、Catch as catch can——つかめるところはどこをつかんでもかまわないし、関節技、キック、パンチ、なんでもあり。まあ、きみは女性だから、顔面への攻撃はしないであげる」

「それと、レイプもしないよ。出来ないからね」

もうひとりの上級生が苦笑しています。つまり。レスリングにかこつけて、か弱い乙女を男が四人掛かりで痛めつけようというのです。

「なぜ……わたくしに恨みでもあるのですか」

「無いとでも思ってたのか」

ハーディです。

「いつも女王様気取りで、ぼくたちを見下しててさ。しょっちゅう荷物持ちをさせるし、カフェテリアではこっちの都合も考えずに呼びつけるし、去年の誕生日にあげたハンカチなんかジニアに投げ与えたし……」

わたくしは、ただあきれて、ハーディの恨み言を聞くばかりです。彼はオッターと競うようにしてチャーリーの仕事を横取りしていたのだし、それでもたまには彼の献身に報いてあげようと考えて陪食の機会を与えてやったのです。ハンカチは、あんな安物を身のまわりに置くなんて、わたくしの品位を損ないます。でも、好意は分かっていたから、捨てたりなんかせず、ジニアに下賜したのです。

そのひとつひとつを、彼に説明する気にはなれません。しょせん愚民には高貴な者の考え方など理解できないでしょう。それに……今さら言い聞かせたところで、虐められるのが怖くて言い逃れをしていると勘繰られるだけでしょう。

よろしいです。わたくしを痛めつけて満足するのであれば、お好きになさい。今日を耐えれば、それで終わるのです。この先何年も性奴隷としての辱しめを受けることを思えば、なにほどのことがありますでしょう。

わたくしは、四人に取り囲まれたまま、制服のジャンパースカートを脱ぎました。求められて、靴も脱ぎます。

部室は広くて、部屋の中央には五ヤード四方くらいのマットが敷かれています。印象としては、マットのまわりのわずかな空間が、ロッカールームとミーティングルームになっています。

その広いマットの上で、わたくしはハーディと向かい合いました。

彼は姿勢を低くして両手を前に突き出して、まるでへっぴり腰です。もちろん、これがレスリングの構えだということくらいは知っています。

猿真似をしたところで、その後の体さばきを知りません。どうやったって敵いつこないのですから、^{Sitting duck}棒立ちですけれど座り込んだアヒルです。

「ファイティング・ポーズを取れよ」

「それは命令ですか」

「いいから、やっちまえよ」

上級生にけしかけられて、それでもハーディは慎重に近づいてきて……腕をつかまれたと思ったら。

「きゃっ……?!」

マットの上に引き倒されていました。とっさに突いた手がずるっと滑って、お腹をマットに打ちつけました。このまま転がっていれば、そんなに酷いことはされないで済むかなとずるいことも考えましたけど。

「立てよ」

命令された上に腕を引っ張られては、立ち上がるしかありません。よろめきながら立ち上がると。

「きゃあっ……！」

足を払われて、尻餅をつきました。

ハーディは正面で片足を上げて。

「痛いっ……！」

股間を踏んづけられました。鎖が陰裂に食い込んで、すごく痛いです。本能的に股間を護ろうとして、背中を丸めてうずくまります。その背後から……

「いてえっ……」

小さく叫んだのは、ハーディのほうでした。背後から股間を蹴りあげようとして、つま先を鎖にぶち当てたのでしょう。

良い気味ですと言いたいところですが、ハーディはつま先、わたくしは鎖のせいで尾底骨から陰裂までのダメージです。割りに合いません。

「こいつめ！」

腹を立てたハーディが髪をつかんで、わたくしをマットから引き抜きました。そのまま前へ回り込んで。

ぼぐっと、鈍い衝撃がお腹に広がります。

「ぐふっ……」

重たい痛みが腹全体に広がって、吐き気が込み上げてきます。

「思い知ったか」

ぼぐっ……二発目は腹筋を固めたので、苦痛も小さかったし吐き気もしませんでした。

「腹はやめておけよ。内臓破裂とか、しゃれにならない」

三人の上級生の誰かが、ハーディを止めてくれました。

「なんだよ。顔は殴るな、レイプは禁止、そのうえ腹も駄目って、どうすればいいんですか」

「交替しろ。お手本を見せてやるよ」

ハーディがしぶしぶを顔に貼り付けてマットの外へ出ると、いちばん年長らしい男子が

わたくしの前に立ちはだかりました。同級生の数年後の姿というより、若い教師の十年前といった印象です。けれど、せいぜいY10くらいだと思います。延長教育の生徒は、SS生徒と関り合いにならないようにしている感じですし、Y11は卒業と進学とを控えて、それどころではないはずです。Y10だろうとY13だろうと、わたくしよりずっと大きくて腕力も強いことに変わりはないです。

わたくしがうずくまったまましていると、その人はわたくしにおおいかぶさるようにして。腰の鎖を握って、わたくしを持ち上げました。

「痛いっ……！」

体重がもろに鎖に乗って、食い込むなんてものではないです。切れ味の悪い刃物で股間を切り裂かれるような激痛です。

わたくしは、足を伸ばして立とうとしました。ところが、彼は腰の横に手をまわして、両側から引き上げます。

「やめて……ください！」

突きのけようとする、ますます鎖が食い込んでいきます。進退窮まって、彼の肩にしがみつきました。鎖の圧迫が消えて、ほっとする間もなく。

ぐらっと部屋が傾いたと思ったら、彼に浴びせ倒されました。どすんと、彼の体重が全身を押し潰しました。

「ぐぶふっ……！」

カートゥーンだったら、人形のパイ生地を描くところです。冗談を言っている場合ではありません。

全身を打って、痛みで動けないわたくしに、彼が手足を絡ませてきました。どういう体勢なのかうまく説明できませんけど、肘を外側へねじ曲げられるような激痛です。ぐききつと関節がきしみます。

「痛い……腕が折れます！」

わたくしの訴えを無視して、いえ、面白がるかのように、彼は身体を揺すって、その動

きがますます肘をきしめます。

「どうだ、降参か？」

「降参です。降参します！」

わたくしが（半泣きになんか、なっていません）叫ぶと、彼は赦してくれました。

彼はわたくしを横向きに転がして、添い寝するような形になりました。わたくしの手足を自分の手足に絡めてから、わたくしを腹の上に乗せるようにして、あお向けになります。そして——ぐんっとわたくしを突き上げました。

「いやああっ……」

そんなに痛くはないです。けれど、空中でブリッジの姿勢に固められました。ブリッジよりも開脚の角度が大きいです。直角を超えています。他の三人もマットに上がってきて、わたくしの股間をのぞき込みます。

「可愛い^{lips}陰唇だな。こんなのでセキスパートになれるのかな？」

「^{cunt}マンコは……鎖が邪魔で、よく分からないや」

「^{asshole}ケツ穴も色が薄くて小さいね」

卑わいな単語の連発です。可愛いというのも、否定的な評価なのでしょう。肯定的な評価をされたって恥ずかしいだけですけれど。

立っている正面から閉じた陰裂を見られるのと、開脚しているところをのぞき込まれるのとでは、恥ずかしさが千倍も違います。腰の奥が羞恥に燃え盛っています。

「降参します。やめてください」

「まだ早いよ」

取り合ってくれません。ハーディが鎖をつかみました。正確には、腰を巻いている鎖と股間を割っている鎖との交点を、南京錠とまとめてつかみました。下へも手を突っ込んで、腰の後ろの交点もつかみます。

「これって、女の^{jerk}センサーになるのかな」

鎖を前後にしごき始めました。元から陰裂に食い込んではいませんが、ぎちぎちではあり

ません。わずかな余裕はあります。そのせいで、鎖が陰裂と会陰と肛門とを擦ります。のこぎりで引かれているような痛みが走ります。

「それはマンズリ^{beaf flicking}っていうんだぜ」

「牛肉ほど分厚くないよ」

痛みに耐えているうちに、陰核への刺激が稲妻を呼び寄せました。膣口と肛門にも、むずがゆいようなくすぐったいような感覚が生じました。

「くうっ……んん」

「善がりだしたな」

わたしの苦鳴に混じる別の響きを、耳ざとく聞きつけられてしまいました。けれど、苦痛はそのままに快感のほうは次第に強くなっていて、うめき声を止められません。

腰の奥で燃え盛る恥ずかしさと浅い部分にたまっていく快感とが絡みあって、全身に広がっていきます。

もっと虐めてほしい。そんな思いが浮かんできて、あわてて打ち消しました。虐めてほしいだなんて……わたくしはマゾヒストではありません。「虐めて」ではなく「可愛がって」なら問題は……大あります。同じことです。肉体の快感と苦痛に心の恥辱とが混然一体となって、何も考えられなくなっていくます。

でも、わたくしは負けません。快感に囚われては、麻薬中毒患者と同じです。

「くうっ……まだ、降参させてくれないのですか」

気力を振り絞った訴えは聞き届けてもらえました。鎖の動きが止まって、同時にわたくしはマットの上にたたきつけられたのです。

「あれだけマンズリしてやってアクメに達しないなんて——こいつ、不感症じゃないのか」

「前も後ろも未開通だから、まだガキなんだよ」

「Y 7 だものな」

「ぼくはガキじゃないよ」

「でも、まだ童貞^{cherry}だろ」

好き勝手なことを言い合っています。

酷い目に遭いました。でも、大怪我をさせられずに終わった——のでは、ありませんでした。

二人目の上級生がマットに立って、ボクシングのファイティングポーズを取ったのです。しゅっしゅっと、ジャブを繰り返す真似をしています。

「アイリス、立てよ。おれにぶちのめされるために立て。顔は勘弁してやる」

命令には従わなければなりません。泣いて赦しを乞うなんてみっともない真似はできません。でも、身体が動きません。

「しょうがないな。ハヴェント、立たせてやれ。倒れないように、羽交い締めにしておけ」

「自分の足で立ちます！」

名前を呼ばれた三人目の上級生が動く前に、わたくしは宣言しました。両手を突いて上半身を起こし、両足を踏ん張って、よろよろと立ちました。強制されるよりはみずからの意思で命令に従う——というプライドだけではありません。羽交い締めにされていては、殴られた瞬間によろめいて衝撃を和らげることすら出来ません。

「形だけでもファイティングポーズを取れよ。か弱い女の子を一方向的に虐めるみたいで後ろめたいよ」

まさに言葉通りのことをしているくせに。でも、命令ですから——肘を曲げて両手を拳にして顔の前で構えました。

「きみも攻撃していいんだよ」

フットワークは使わず、彼は無造作に近づいてきて——パンチを繰り返しました。胸を狙われていると分かったときには心臓のあたりに、どすんと衝撃を受けていました。

オレンジの輪切りが潰れて、ぷるんと跳ね返るのが分かりました。乳房をもぎ取られたような激痛が走ります。机の角にぶつただけで息が詰まるほど痛いというのに、拳骨で思い切り殴られたのです。両手で胸を抱えて前のめりになりました。

「ほら、ファイト、ファイト！」

命令に従おうと思っても、身体が動きません。とうとう羽交い締めになされてしまいました。ブリッジのポーズで空中にさらされるよりも屈辱です。

正面の上級生は、さっきよりもわたくしに近づくと、両手を使って乳房を連続して横に殴り始めました。

「ワンツウ、ワンツウ」

殴られるたびに、ささやかな乳房が左右にひしゃげます。さっきほど激烈ではありませんが、鈍い痛みが蓄積していきます。

「ワンツウ、ワンツウ……フィニッシュ！」

また正面からパンチをたたき込まれて、乳房が破裂したような激痛です。

「うわあ。だいぶん赤くなったな。腫れた分だけ、おっぱいが大きくなったんじゃないかな」

そんなことは分かりませんが、ずきずきとうずいています。

「先輩、交替してください。ぼくは、まだスパーリングをしてない」

わたくしを羽交い締めに使っていた上級生との対戦(?)です。サンドバッグにされていた間、ずっと支えてくれていたおかげで、自分の足で立てるようになりました。驚きました。まだ、皮肉を考えられる余裕があります。口にする蛮勇はありませんけれど。

「それじゃ、ぼくはね……」

目の前に立って、両肩をつかむと……

「あがっ……！」

股間が爆発したような激痛が、腰を砕きました。

「……………?!」

両手で股間を押さえて、その場に崩折れました。

「^{ball}玉が無いから、^{nuts crushing}金蹴りほどは効かない感じだね」

男の人が睾丸を蹴られる痛みは分かりませんが、女性器を蹴られたって、物凄く痛いんです。教鞭でたたかれるよりも。それに、局所的な痛みではなく、股間全体が痛いんです。

でも、彼が言うように男性はもっと痛いかもしれません。すくなくともわたくしは、もん絶したり跳びはねたりはしませんでしたから。

「ひと通りは試したけど、あまり面白くないな」

わたくしをサンドバッグにした上級生が、つまらなさそうに言いました。

「恋の駆け引きをするわけじゃなし。穴を使えないビッチなんて、何の役にも立たないや」

「それじゃ、もう赦してやるんですか？」

ハーディは不満そうです。

「そうだな。おい、アイリス」

「はい、なにかご用でしょうか、^{My master}御主人様」

この言葉遣いは、校長からの命令です。赦してもらえそうな雰囲気になって、やっと思い出したのです。我ながら現金です。

「そこにひざまずけ。そして、こう言え——父親の権威を我が物と勘違いし、高慢ちきに皆様を見下してきて、申し訳ありませんでした。わがままな振る舞いで皆様に迷惑ばかり掛けて、申し訳ありませんでした。深く反省しています。両手を組んで謝罪してから、最後に、おれたち一人ひとりの足にキスしろ。それで、おれたち四人はおまえを赦してやるよ」

また、四人に取り囲まれました。わたくしが謝罪するのが当然といった顔です。

これも命令には違いないのだから、服従しなければならないのでしょうね——と、弱気が頭をもたげました。言われた通りにすれば、それで『デート』はおしまいにしてもらえそうです。

けれど。たとえ不服従の厳しい——これまで以上となると、厳しいのではなく残虐です。その残虐な罰をこうむっても、譲れない一線があります。高潔です。プライドです。わたくしが高慢ですって？！ 貴族としての品位を保って、平民であるクラスメイトに接していたのを、そのように曲解するのですか。

わたくしには、この四人にも他の生徒にも、謝罪する必要など断じて有りません。

これ以上の暴力から逃れる方便だとしても、わたくしの口から出た言葉は、わたくしを縛ります。何をされても仕方がない、そういう契約です。けれど、無実の罪を認めるわけにはいきません。

「お断わりします」

わたくしは勇気を振り絞って、敢然と拒否しました。どんなに残酷な罰でも、潔く受ける覚悟でした。誇らしさに、胸がねじ切れそうです。悲壮が腰の奥で熱くたぎります。

「ちえ、頑固だな。もうちょっと遊んでやるか」

これまでの延長なら、もうすこしの間は耐えられる……かもしれません。

わたくしは立たされて——頭から袋をかぶせられました。男の体臭がこもっています。ユニフォームを入れる袋かもしれません。分厚い生地で、袋の口を首のところで閉じられると真っ暗になるだけでなく、息も苦しく感じられます。

どんと斜め後ろから突かれて、前へよろめきました。すぐに受け止められて、真後ろへ突き飛ばされます。それを真横へ押されて……あちこちへ小突き回されて、倒れる暇もありません。肩をつかんで向きを変えられたりもします。

こんなことをして、何が面白いんだろう。そう思っていると——不意に足払いを掛けられました。

「きゃっ……?!」

身体を支えようと前へ手を伸ばしましたが、背中から落ちて頭を打ちました。視界を奪われて身体を動かされているうちに、三半規管の平衡が狂ったみたいです。

「痛いっ……」

鎖をつかんで持ち上げられて、身体が宙に浮きました。くるんと裏返しにされて、そのままマットにたたきつけられました。腕に力が入らず、ささやかな乳房がまた潰れました。

それからは……いちいち覚えていないです。脇腹や股間を蹴られたり胸やお腹を踏んづけられたりお尻を蹴られたり。腕をつかんで引きずり起こされてすぐ押し倒されるのなんてまだ優しいです。足をつかんで逆立ちにされて、そこに股をクロスする形でのしかから

れてぐりぐり擦りつけられたり。あお向けに寝かされて四人掛りで手足を引っ張られたり。

もしもわたくしがぬいぐるみ人形だったら、ばらばらにされていたに違いありません。生身の身体だから、どこも千切れたり裂けたりしなかったのです。

最後は、袋を取ってもらえたのですけれど。

「おまえのデートだからな。一番乗りをしろよ」

ハーディがユニフォームを脱いで裸になりました。男性器は勃起しています。ずっとだったのかもしれませんが。あお向けに転がったわたくしの足を大きく開かせると、上からおおいかぶさって、男性器をわたくしの股間に押しつけました。正確には、そけい部です。太腿と大陰唇とのくぼみに、包皮から顔を出している亀頭を、腰を激しく動かして、擦りつけます。そして、古典語教師のキャビンより多量の白濁をわたくしの下腹部にぶちまけました。

次は最年長の上級生でした。両足をそろえて、わたくしに抱えさせました。そして、わたくしの足を折り曲げて、のしかかってくると、男性器を太腿の間に突っ込みました。みずからもわたくしの膝頭をつかんできつく閉じ合わせて、腰を激しく振りました。さっきよりも、刺激が微妙です。快不快ではなく、ぬるぬるした感触が気色悪いです。この人もすぐに射精して、胸のあたりまでわたくしを汚しました。

三人目はボクシングの人でした。先の二人の精液をロールペーパーで拭ってから、わたくしの上体を起こさせ、自分は中腰になって。両手でわたくしの乳房を中央に寄せて、男性器を挟んだ——つもりかもしれませんが、北緯三十度のオレンジでは無理です。陰茎の両側に触れさせるのが、やっとでした。それでも、激しく腰を動かしてオレンジを側面からすり潰すみたいにして（そういえば、陰茎とすり粉木は形が似ています）目的を果たしました。

手の甲で拭おうとしたら、その手をハヴェントにつかまれて、剥き出しの陰茎を握られました。湯煎したサラミソーセージの感触です。しごくように命令されたので、手を動かしました。

「もっと強く、もっと早く！」

サラミでなくフランクフルトだったら折れるくらいに強く握って、一秒に二往復どころか四往復くらい、五分も続けていたらけんしょう炎になっていたかもしれませんが、二分くらいで終わりました。亀頭のすぐ下のあたりを握って、しごくというよりも包皮を剥いたりかぶせたりといった感じに動かしていたので、手には(あまり)掛かりませんでした。その代わりマットを汚して、ハヴェントは他の二人から叱られていました。

このあたりになると、意識もだいぶんしゃっきりしていました。

射精してしまうと、わたくしへの関心は薄れたようでした。まだ足元がおぼつかないわたくしをうつ伏せにすると手足を持って宙づりにして、物置小屋まで運んでくれました。

四人掛りで虐めるのを『デート』というのなら、これはエスコートでしょうね！

——翌日は全身が痛くて、まだ乳房も女性器も腫れていましたが、授業には出ました。わがままだ身勝手だと昨日はけなされましたが、Y5から学園で学ぶようになって以来、こう見えても無遅刻無欠席です。名誉ある記録を、これしきのことで中断してたまるものですか。

一時限目の授業は欠席しました。校長に呼びつけられたからです。いわば公式行事ですから、欠席扱いにはならないでしょう。

校長からは、昨日のデートで何が無かったかを詳しく尋ねられました。鎖の防護が侵されなかったことと、フェラチオ(または類似の行為)は無かったと証言したら、それでおしまいでした。

後になって、フェラチオをさせられたと証言しておけば、彼らが叱られたのかなと思いつ返ししましたが、わたくしのうそが暴かれて、結局罰せられるのはわたくしでしょうから、正直に答えておいて正解だったと思います。

——今日の放課後は、オッター・デアリングとの『デート』です。指定された通りに昼食は取らないで小屋で待っていると、彼が迎えに来ました。

「良かったら、これを使ってください」

差し出された紙包み（リボンでラッピングされています）を開けると、もう何十日もわたくしとは縁の無かった品々が出てきました。おそろいのブラジャーとパンティ、そして半袖のブラウスです。

「え……？」

「デートのときくらい、まともな格好を……あ、ごめんなさい。普段は目に余る格好をしたら、そういう意味ではなくて……」

疑問符がどんどん増えていきます。彼は、いったい何を目論んでいるのでしょうか。

「これを身に着けろという命令なのですね」

「命令じゃないよ。^{Miss Hood}フッド嬢が今のファッションが好きなのなら、それでもかまいません」
すねたような物言いです。

わけが分からないまま、彼の言葉に従うことにしました。わたくしが制服を脱ぎかけると、彼があわてます。

「ちょ、ちょっと……ぼく、外に出ているから」

物置小屋のドアが閉められました。てっきり、わたくしが性奴隷にふさわしくない格好になるところを見たいのだと思っていたのに。ますます調子が狂います。チャーリーとジニアが、まだ食事から戻ってなくて良かったです。からかわれるのは目に見えていますから。

とにかく。一か月ぶりにブラジャーとパンティを身にまといます。身体を拘束されたように感じました。ブラウスは普通に着ると、裾が超ミニスカートからはみ出てしまいます。おへその上で裾を結んでみます。男性向けの通俗雑誌のグラビアで見かける着こなしです。もちろん、ボタンはきちんと掛けましたよ。

下着のサイズはちょっと窮屈ですが、胸元をのぞき込まれてもスカートが翻っても、防備は完璧です。^{let them all come}矢でも鉄砲でも持って来いです。騎士が^{full plate armor}全身よろいを身に着けたときも、こんな気分になったのではないのでしょうか。

わたくしがドアを開けてオッターの前に立つと、彼ははにかんだような微笑を浮かべま

した。

「すごく似合ってるよ」

下着は見えないし、ブラウスはフリルも付いていない簡素なものです。どこがどう似合っているのか分かりません。儀礼的な言葉なのでしょうが、性奴隷に対して御主人様がおべっかを使う意味が分かりません。

「もし、よかったら——だけど」

またも儀礼的な言葉と共に、左腕を曲げました。彼の魂胆は分かりませんけれど、意図的に気分を損ねさす必要も無いでしょう。わたくしは彼に寄り添って、左腕に右腕を絡めました。

「それでは、行くよ」

どこへでも連れて行ってください。好きにしてください。運命に身を任せます。

彼に（本来の意味で）エスコートされて行った先は、学園内のあちこちに配置されている東^{pavilion}屋のひとつでした。環境を変えて勉強をする（人は、あまりいませんけれど）のも善し、ひとり思索にふけるも善し、小人数でお茶会を開くのにも使えます。人目につきにくい場所に設けられているので、愛を語らう（それ以上のことをしてはいけません）のにも向いています。

デートだというのに、テーブルを挟んで向かい合って座って。

彼は持って来たバスケットの中身を、いそいそとテーブルの上に広げました。小ざれいなクロスの上に紙皿と紙コップを並べて、サンドイッチとフルーツと、ワインの小瓶に炭酸水。まるきり、ピクニックです。

ここに至ってようやく。もしかしたら、オッターは本気でまともなデートをしているつもりなのかもしれないと思いました。

わたくしは勧められるままにサンドイッチを食べ、炭酸水で薄めたワインも飲みました。カフェテリアのキッチンで特別注文で作らせたのだろうサンドイッチは、とても美味でした。ワインを炭酸水で割るなんてと、フランシュ人なら顔をしかめるでしょうけれど。オッタ

一には精一杯の背伸びでしょう。わたくしも、これくらい薄ければ平気です。

「ええと……^{Miss Hood}フッド嬢……」

「アイリスと呼んでください」

「え、いいの？」

以前のわたくしでしたら、彼がおずおずとお伺いを立ててくるまで待っていたでしょうけれど。今はわたくしのほうが彼を^{My master}御主人様と呼ぶなければならない身分なのですから。

いつまでも過去の権威を引きずっているほどわたくしは愚かではありません。

「それじゃ……ミ……アイリス」

ミスを付けかけて、それが伯爵令嬢以上への呼び掛け、子爵令嬢に対しては非礼に当たると気づいて言い直しました。顔が真っ赤です。

うふ、可愛い……同い年の男性に、失礼な感想ですね。でも、男性を可愛いなんて思う感情が、まだ残っていたのには驚きました。今のわたくしにとっては、男性とは迫害者の言い換えに等しいのですから。

「ねえ、アイリス？」

呼び掛けられて、あわてました。彼は何事かを話していたようですが、ちっとも耳に入っていなかったのです。

「ごめんなさい……」

素直に謝ります。

「久しぶりに人間扱いされたので、うれしくてぼおっとしていました」

口にしてから、皮肉に聞こえたのではないかと、不安になりました。昨日、わたくしの振る舞いについてあれこれ言われたのが、まったく平気なわけでもないのです。けれど、無用の懸念でした。

「と、とんでもない。あなたを、あんなふうに扱うほうが間違っているんです。あなたが、今でも子爵令嬢であるという事実は揺るぎません。あなたは、ぼくにとって、今も……あ、憧れの女性です」

言ってから、彼の顔はますます赤くなりました。

「エスコートさせてもらって、ぼぼくのほうこそ舞い上がっています」

こんなに率直に告白をされたのは、初めてです。

「お世辞でもうれしく思います」

ああ、もう。もうちょっと気の利いた返事を出来ないものでしょうか。

彼は、それから——自分のこと（生い立ちまで）とか、伯父が一代騎士叙勲を受けているとか、一年以上も前に観た映画の感想とか、好きな食べ物とか、趣味の Flyable paper solid airplane のこととか、いろんなことを話してくれました。気を遣ってデリケートな話題、学園生活とかナイフランド紛争とかは避けていました。一時間も（そんなに長く、彼は話し続けたのです）すると、わたくしは彼のことを世界でおそらく三番目くらいには詳しく知っている人間になっていました。一番と二番は、彼の御両親です。

普通のデートみたいに（学園内ですけど）あちこちへ行かなかったのも——性奴隷を連れて歩くのはみっともないと、そんなふう考えたのではなく、さらし者にされるわたくしの惨めさを思ってくれたのでしょう。

とはいえ、彼の話を聞いているだけでは退屈です。ですけど、わたくしの話など、過去の自慢か現在への嘆きにしか聞こえないでしょう。

まだ残っていたフルーツに彼が手を伸ばしたとき、わたくしは思い切って自分の手を重ねました。

「わたくしを、あなたのお好きなようになさってもよろしいのよ？」

性奴隷が御主人様に気に入られようとして、こびているわけではありません。一途な男の子に恩恵を与えようと思ったのです。

「な、なな、なんでもいいの？」

彼の声が上ずってきました。しよせんは男。女を自由に出来ると分かれば、女性器は封鎖されているから、胸かお尻か、それとも手に握らせるつもりかもしれません。

「それじゃ、これなんだけど……」

彼がバスケットから取り出したのはビスケットの箱でした。ドイッチュ原産のスティックプレッツェルです。マッチ棒を十倍くらいに拡大した感じです。それを一本だけ取り出しました。

「チャーパンに交換留学してた友達から教わったんだ。二人で両端から食べていくんだ」

「それで、どうなるの？」

どちらも降りなければ、二人の唇と唇とがくっつきます。チキンレースかなと思ったのですけれど。

「あの……ええと……」

もじもじする様子が、いっそう可愛らしく思えます。わたくしになら「キスさせろ」で済むのに。

ファーストキスは、この子にあげよう。そう決めました。体育教師の女性器へのキスは、あれがキスなら、わたくしは何百回も何千回もリングやマフィンやソーセージとキスしています。喩えが偏ってしまいました。

「いいわよ。これをくわえるのね」

顔を近づけて、彼が手にしていたスティックの端をくわえました。

オッターもあわてて（折ってしまわないように慎重に）反対側の端をくわえました。

顔と顔は五インチと離れていません。視線をそらすのは不可能に近いです。なんだか、本当に恋人同士になったようなくすぐったさがあります。

ぼりっ。端っこを四分の一インチほどかじりました。くわえ続けているには、かじった分だけくわえ込んで、顔を近づけなければなりません。

ぼりっ。オッターのかじったかすかな振動が、わたくしの歯に伝わります。ますます顔がくっつきます。

それでも、またかじって。彼もかじって。鼻と鼻がぶつかからないよう、互いに顔を傾けます。本当に、完全に、キスの体勢です。

あと一口で唇がくっつく。そのまま五秒くらいが何事も無く過ぎて。不意にオッターが

顔を寄せてきました。唇と唇とが、ついに触れ合いました。

そこからはオッターが、が然と情熱的になりました。残りのスティックはかまわずに飲み込んでから——ちゅううと、音を立てて唇を吸ってきて。それから舌を入れてきました。

そういうのが大人のキスだというのは知っていました。舌と舌とを絡めたり、口の中をなめまわしたり。くすぐったいのではないかしらと思っていましたけれど、全然そんなことはありませんでした。でも、口の中で生の肉がうごめいていると思うと、あまり気色は良くないです。あ、でも。交接というのも、女の人の体内で男の人の生の肉が動くのですわね。つまり、キスとは男女の営みの代償行為。そう考えると、胸がきゅうんとねじれて、腰の奥が熱く潤ってきました。

あれ……？

この感覚。恥ずかしいことを強いられて、怒りと屈辱に震えているときと、とてもよく似ています。本当の意味で——強制されるくらいならという意味ではなくて、みずからの積極的な意思に基づいた行為だというのに、なぜ憤慨しなければならないのでしょうか。

身体の反応に対応する自身の感情に疑問を持ったのは、これが初めてでした。けれど、それを深く考えられる状況ではありません。ファーストキスなのです。これよりも一大事なのは初体験でしょうか。こちらは、わたくしの意思に反して強制されるのではないかと——鎖で封じられていることから、容易に想像できます。その日が少しでも遅くなりますように。なんて、デートの最中に考えることではないですね。

テーブルを挟んで顔を寄せ合っていましたけれど、不自然な姿勢です。その思いはオッターも同じだったらしくて、わたくしたちは自然と立ち上がって、テーブルの横に立って、抱き合いました。男の人にしがみつくて、何もかも彼に委ねた気分で、無防備だけれど安心できます。男の人に抱き締められるって、何もかも彼に支配されているけれど守られているって気分で、すごく幸せです。この時間が、いつまでも続けば良いのに。

けれど、何事にも終わりがあります。SS生徒の境遇だって、そうに決まっています。いえ、それを考えるとシャボン玉が弾けてしまします。

オッターは、わたくしを抱き締めている手を下へずらしていった、腰……に達したときに、あわてたように手を放しました。

「あ……身体を触ってごめんなさい」

本当はお尻も触りたかったんだと思います。最初のデートで、それはやり過ぎだと思い直したのでしょう。紳士の過ぎます。昨日、ハーディたちに何をされたか教えて、たきつけてやりたくなりました。けれど、オッターの前ではSSSアイリスではなく子爵令嬢として振る舞うべきだと思いましたので、ふしだらな言動は慎みました。

こうして、オッターとのデートは、シャボン玉が弾けることもなく終わりました。それは、地平の果てまで広がるしゃく熱の砂漠の中で見つけた、貴重な湧き水のような時間でした。わたくしは、心ゆくまで喉の渇きを潤せたのです——その瞬間だけは。

ジニアとチャーリーも二人ずつの異性と『デート』をしました。

ジニアは、ものすごく露骨に、その様子を自慢っぽく話して聞かせてくれました。詳しいことは断固として省略しますが、彼女の鎖の貞操帯はY字形をしています。裏口からの訪問（ソドムの罪がどういうものかくらい、わたくしだって知っています）は無理でも、玄関からの訪問は可能なのです。彼女は、その可能性を十二分に活用して——デートの相手に、未来の花嫁に対する不実を働かせたのです。

チャーリーは、対照的に不機嫌でした。きっと、金網で男性器を封じられていることと関係があるのでしょう。

「ぼくは猫じゃないんだ」

それが、デートについての感想のすべてでした。きっと、マフィンを振る舞われたのだろうと思います。

学年末のテスト明けから五日後には、新学年に向けての長い夏休みが始まりました。チャーリーとジニアは、他の生徒と同様に、親元へ帰省しました。わたくしには、帰る場所

がありません。学園の物置小屋で、バカンスも娯楽も無く過ごさなければならないのです。せめて勉強でも出来れば良いのですが、教科書も参考書もありません。図書室も閉まっています。

教科書については、ささやかなエピソードがあります。教科書は基本的には学校から借りるシステムなのですが、わたくしは先へ進んでいましたので、常に上の学年の分を自前でそろえていました。それを没収されてしまったので、あらためて貸与してほしいと願い出たのですが、もう学年末だからと、はねつけられてしまいました。ですからY 8になれば、その学年の分を受け取れるはずです。すでに独学で履修済みですけど、娯楽にはなるでしょう。今から楽しみです。皮肉はやめます。

カフェテリアも休業ですから、乾パンと缶詰とドライフルーツを食料として。ミネラルウォーターだけは、飲み放題なくらい潤沢です。あ、軍隊のいわゆる^{field ration}野戦食を一ダース（十二日分）だけ与えられました。パスタに各種のスプレッドにシリアルバーにナッツ類と粉末飲料。以前のわたくしだったら顔をしかめていたでしょうけれど、今となってはフルコースの御ちそうに匹敵します。

——チャーリーとジニアが帰省する前夜のことは、あまり思い出したくありません。

ミルダ・フォーブスにワックス脱毛を施されてひと月近くが経っていました。

「ぼつぼつ無精ヒゲが目立ってきたな。帰る前にきれいにしておいてやるよ」

そう言われたのは、いつものように全裸になって床に寝て、手足を長机ベッドの脚に手錠で拘束されてからでした。

「……ありがとう。お願いしますね」

横柄な口調をたしなめても、手荒く扱われるだけです。あまり（本来の）上下関係を際立たせない言葉遣いで、相手の^{going goodwill}行為を好意として受け容れるようにしています。たいていはbadwillですけど。

このときも、そうでした。チャーリーは昼のうちにミルダから借りていた鍵で鎖を外して、教わった手順通りにワックスをわたくしの股間に塗り込みました。必要よりも熱く溶

かして、必要よりも分厚く。それくらいなら、どうということもありません。熱いのをちょっと我慢するだけです。

ところが彼は、ジニアにピンセットを使わせて陰核の包皮を剥き下げました。彼の意図が分かると——冷たい空気にさらされた乳首と同じことです。実核が固く大きくなってしまいました。その、いっそう敏感になった神経の塊に、彼はワックスを垂らしたのです。へらに乗せて塗りつける必要がないほどに熱く溶けたワックスを。

「くうっ……」

わたくしは歯を食い縛って、彼の好意ではない行為に耐えました。さいわいに、ワックスはすぐに固まり始めたので、激熱は一分と続きませんでした。

ワックスはそけい部から会陰にまで塗りつけられて、ある程度固まってから、さらに重ね塗りされました。ミルダが使った量の三倍以上を股間に塗られたのです。

覚悟していたのとは違って、彼は優しく——ワックスがその形を保つように注意しながら剥がしてくれたので、毛を引き抜かれる痛みは、ミルダのときよりも小さかったのですけれど。それは彼の親切ではありませんでした。

彼は剥がし取ったワックスの塊を額に入れて、物置小屋の壁に掛けたのです。わたくしの女性器の形がくっきりと写し取られた——反転レプリカを。

わたくしへの意地悪（と、せいぜい軽く考えるようにします）は、まだ続きます。

「乳首のあたりにも、ちょこっと産毛が生えてるわね。ついでだから、きれいにしときましようよ」

乳房にも、ことに乳首は念入りにワックスを垂らされて、これには声を出さずに耐え抜きました。

それが、ジニアには面白くなかったのでしょう。前にされたように、手首と足首を重ねて手錠を掛けられました。身体は深いV字形に折れ曲がって、肛門が屋根裏を向きます。屋根裏と表現したのは、簡素なプレハブですから天井板が張られていないからです。どうでも良いことです。

肛門のまわりにも産毛があるとジニアは主張して——熱いワックスを高い位置から糸のように細く垂らして、多弁花のつぼみの中芯を狙ったのです。まさか中にまでは入り込みませんでしたけれど、わたくしはちょっぴりだけ痩せ我慢を緩めて悲鳴をあげました。それで、ジニアは満足したようです。

続きは製品版でお楽しみください。

原 案：W I L L

著 者：濠門長恭

表紙絵：藤間 慎三

発 行：SMX工房

ブログ：<https://goumonchoukyou.jp/>

<https://ci-en.dlsite.com/creator/6218>